

剥片の一部に使用痕を有するものである。剥片の形状は様々であり、自然面の残っているものも多い。

以上、出土遺物を記したが、これらの出土地点・出土層位について次に記してみる。

石器はCGH06・CGH09グリッドからの出土が25点、AGH03グリッドからが1点である。ま

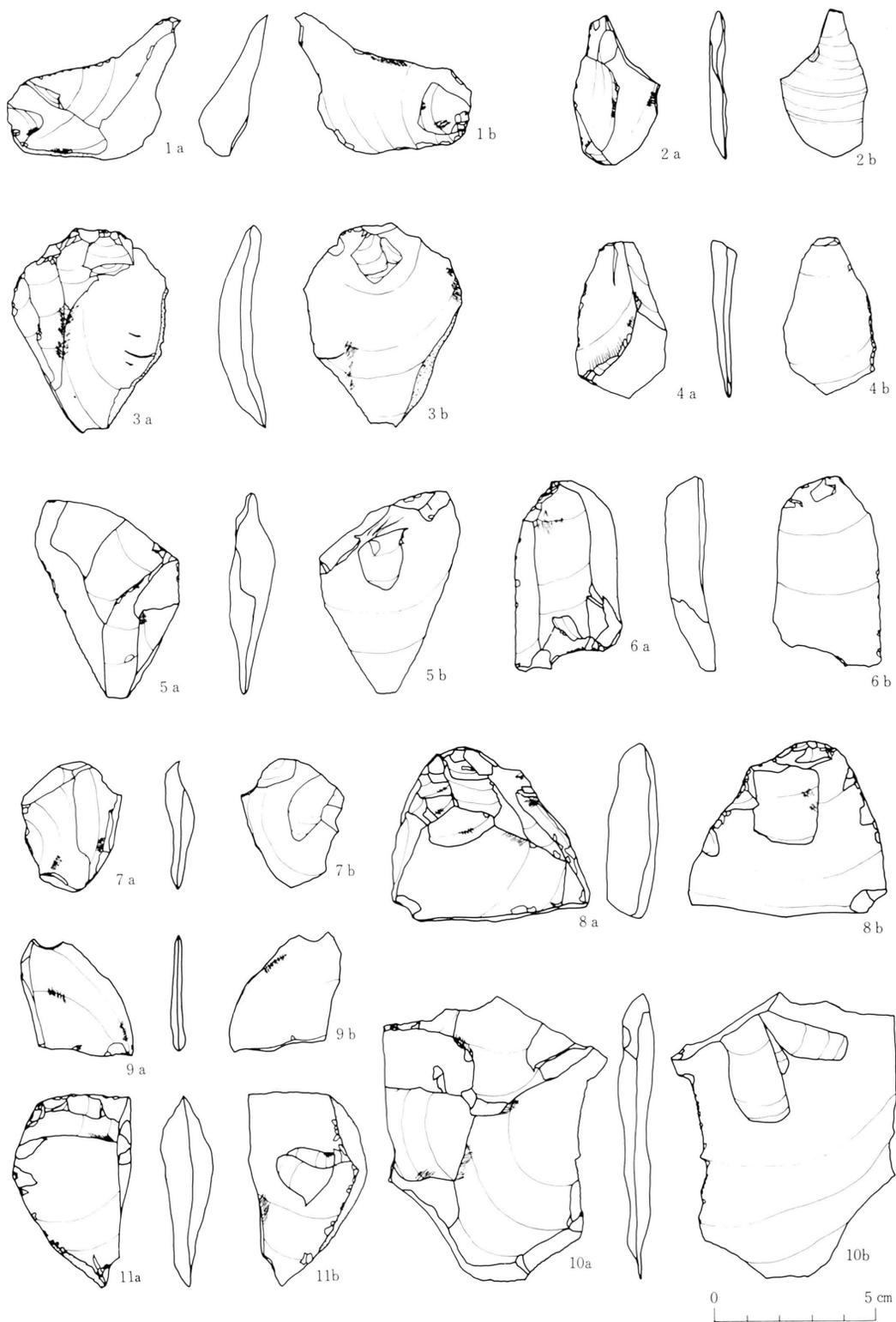
第3表 第Ⅲ類石器計測表

図版番号	写真図版番号	出土層	計 測 値				石 材	遺物記入番号	備 考
			長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
第6図・1	図版・2	Ⅱ	34	29.0	6.5	4.2	凝灰質硬質頁岩	No.23	
2	〃	〃	55	27.5	12.0	17.5	凝灰質硬質頁岩	No.19	
3	〃	〃	45	36.0	8.0	10.6	硬 質 頁 岩	No.14	
4	〃	〃	65	36.5	13.5	28.3	硬 質 頁 岩	No.16	
5	〃	〃	40	44.0	7.5	12.4	凝灰質硬質頁岩	No.21	

た、土器は縄文土器がCGH09が4点、CEF09が1点、AG03が1点であり、土師片はCGH09が2点、CEF09が1点、須恵片はCEF09が1点である。石器の出土範囲と縄文土器の出土範囲がほぼ限られているため、関連する遺構の検出にとめた。その結果幅10～20cmの溝状の黒

第4表 第Ⅳ類石器計測表

図版番号	写真図版番号	出土層	計 測 値				石 材	遺物記入番号	備 考
			長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
第7図・1	図版・2	Ⅱ	32.0	48.0	15.0	14.8	凝灰質硬質頁岩	No.25	
2	〃	〃	45.5	26.5	5.0	4.5	珪 質 頁 岩	No.29	
3	〃	〃	62.0	48.0	10.0	23.9	珪 質 頁 岩	No.34	
4	〃	〃	48.0	27.5	6.5	6.2	硬 質 頁 岩	No.27	
5	〃	〃	57.0	47.0	12.0	25.6	珪 質 頁 岩	No.20	
6	〃	〃	55.0	33.0	14.5	25.1	珪 質 頁 岩	No.18	
7	〃	〃	39.5	32.0	8.0	6.7	硬 質 頁 岩	No.24	
8	〃	〃	53.0	61.0	15.5	46.9	細粒石質凝灰岩	No.17	
9	〃	〃	33.0	30.5	4.5	7.4	細粒石質凝灰岩	No.30	
10	〃	〃	88.0	69.0	10.5	54.8	凝灰質硬質頁岩	No.12	
11	〃	〃	59.0	36.0	8.0	9.8	珪 質 頁 岩	No.37	



第7図 石器 (Ⅳ類)

色土の落ち込み、及び不定形の黒色土の落ち込みを認めたので精査したが、いずれも深さは10 cm以内であり、遺物も含まれず、遺構とは考えられなかった。ただ、縄文土器片と石器がほぼ近接グリッドから出土していることから、土器と石器は関連したものとしてとらえることができる。なお、土師・須恵器片の出土もあったが、少量であり、いずれも出土範囲を限定することはできない。次に出土層位については、いずれも第Ⅱ層上からの出土であり、砂質土の上ののっている遺物もあった。

4. まとめ

今回の調査では遺構の検出はなかったが、本遺跡出土土器および石器について若干記してみたい。縄文土器片のうち底部の観察し得るものが2点あるが、いずれも平底で周囲に張り出した底部を有し、圧痕文が張り出した外面に付されていることなど、他遺跡の縄文早期末葉の土器注2)に類似しており、早稲田貝塚出土第五類土器(梨木畑式土器相当)ともとらえられる。口縁部片は底部片より若干時期が古くなる可能性がある。

石器は26点出土したが、いずれも剝片石器であり、エンドスクレーパー・サイドスクレーパーとみなされるものが10点あるが、他の生活用具などは出土していないことなどから、この地域での生活について特定することは難かしいが、西からの微高地が調査地周辺から次第に低くなり、砂質土・グライ化層などがあることから西からの流れ込みも考えられる。また、石器の時期については、縄文土器底部片と同時期の早期末葉から前期初頭のものと考えられる。なお本遺跡の北、および東は段丘べりになっており、湿地状になっていることもあることなどから、段丘上附近に遺構が存在する可能性もある。土師・須恵器片についても少量ではあるが、本調査地附近に平安時代の遺構が存在する可能性を示している。しかし、調査対象範囲には、遺跡として認められる確証はない。

- 注1. 中川 久夫 他 (1963) 「北上川上流沿岸の第四系および地形」地質学雑誌第811号
——北上川流域の第四紀地史(1)——
同 上 (1962) 「北上川上流沿岸の第四系および地形」地質学雑誌第812号
——北上川流域の第四紀地史(2)——
注2. 二本柳正一 他 (1958) 「青森県上北郡早稲田貝塚」考古学雑誌43—2

しも なが い 遺 跡
下 永 井

遺 跡 記 号：SN

所 在 地：紫波郡都南村大字下永井第19地割他

調 査 期 間：昭和50年4月10日～4月24日

調 査 対 象 面 積：1760㎡

平 面 実 測 基 準 点：東京起点487.560km (CA50)

基 準 高：海拔116.00m

1. 遺跡の位置と立地 (第Ⅳ図P272、第Ⅴ図P274)

本遺跡は紫波郡都南村大字下永井第19地割神田に所在し、都南村役場より南西約1km、岩手飯岡駅の南方0.2kmの地点に位置する。

遺跡の所在する都南村は、西部が奥羽山系の扇状地につらなり、東部が北上山系の丘陵地帯に接している。中央部はほぼ平坦な沖積面と低位の段丘面からなっている。

東北新幹線は都南村のほぼ中央部を南北に縦断し、現在の東北本線と平行して走る。東方には国道4号線が南北に貫通し、さらには北上川が南流する。

都南村の北上川西岸には、扇状地性の段丘群が広範囲に発達している。これらの段丘群は今までの研究成果(中川ほか：1963、高橋：1978)によれば、新旧を別にする中位と低位の段丘からなり、中位段丘を二枚橋段丘、低位段丘を都南段丘と呼んでいる。また、二枚橋段丘と都南段丘との間に花巻段丘を設けている。これは二枚橋段丘が削剝されて生じた侵食面であるとし、両者を区別している。

中位の二枚橋段丘は西部山地の東縁の山麓部に孤立して断片的に分布する。花巻段丘は日詰以北には最も広く発達するが、都南村内では分布する面積が比較的小さい。村内で最も広い面区分を占めるのが低位の都南段丘面で、雫石川の旧河道、北上川本流に沿って村の中心部に分布する。

本遺跡は低位の都南段丘面に立地する。遺跡の南西方向では、雫石川の旧河道沖積面とを境する緩崖になっており、それとの比高は1.3m前後である。

2. 調査の経過 (第1図)

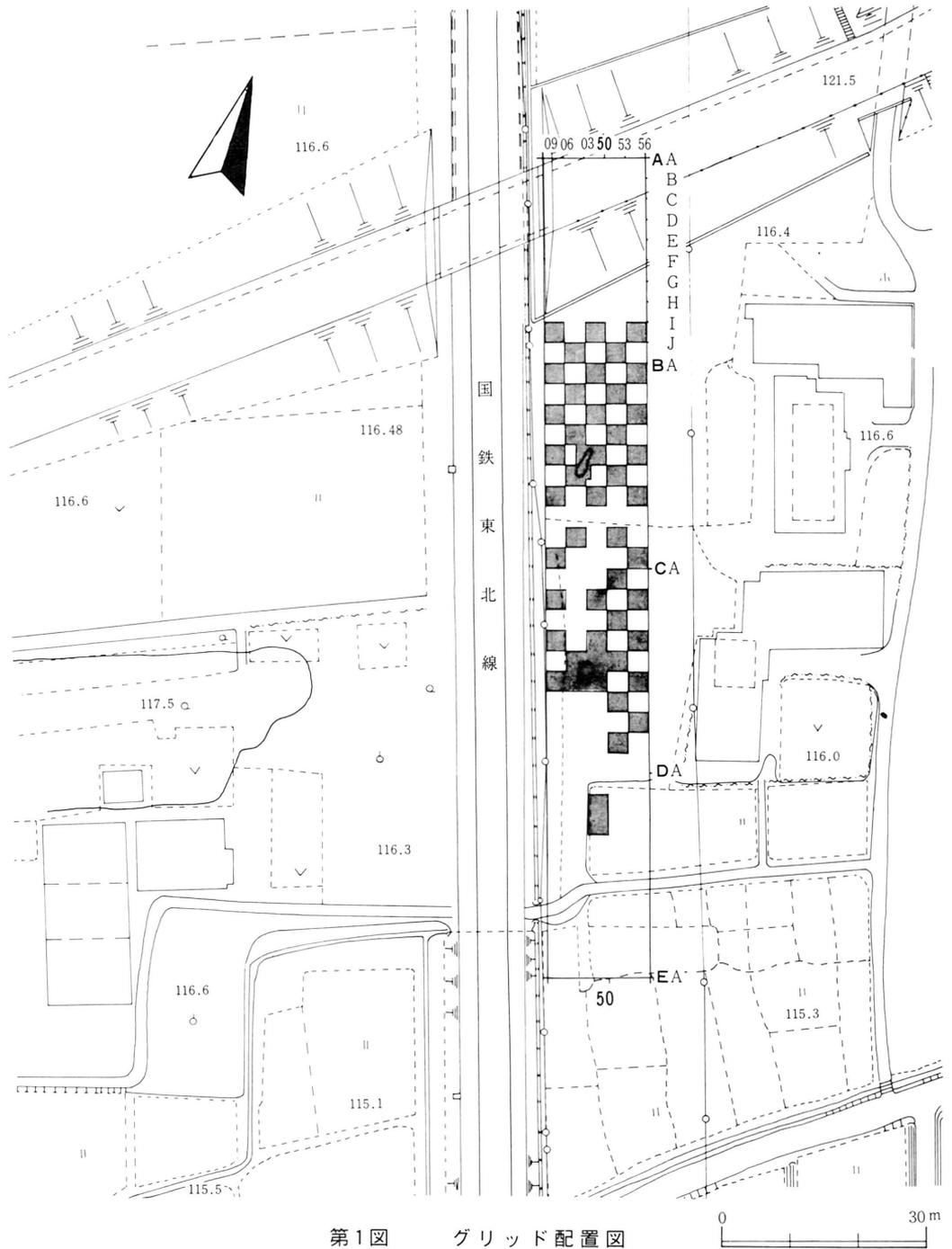
本遺跡は47年度に実施された新幹線路線敷予定地内にかかわる分布調査によって発見された遺跡である。本遺跡の周囲には神田遺跡・荒屋遺跡・菖蒲田遺跡など(岩手県教育委員会：1974)、近接して同一段丘上に立地する遺跡があり、立地形をも加味して遺跡として認定した。

調査区域は南北約80m、東西約22mに及び、約1760㎡を調査対象とした。

調査は、まず路線敷の2本の中心杭(487,540km、487,560km)を基準にして調査区全体に一辺3mのグリッドを設定し、そのうち約452㎡を発掘した。

遺跡の乗る段丘は東北本線によって分断されており、調査区は復線工事に伴う盛土部分が随所にみられた。地目は宅地・畑地となっている。

発掘の結果は、溝状土壌1、円形土壌1の計2個のピットが検出された。江戸時代ないしそれ以降のものと思われる陶器の小破片が1点出土しているほか、遺物は全く出土していない。



3. 調査の結果

[1] 基本層序 (第2図)

遺跡の基本層序を明らかにするために、調査区域内の2地点で深さ約2mの深掘を実施し、断面観察を行なった。その結果は第2図に示すとおりである。

盛土：上部は耕作土として利用されている。Ⅱa層のにぶい黄褐色土が基本となり、Ⅰa層の黒色土が部分的に混入する。

Ⅰa層：黒色 (10YR 4/1) 土。粘土質シルト。くろぼくであり、調査区の全域を覆う。上部は腐植物を混入しており、旧耕作土であったものと思われる。層厚20cm±。

Ⅰb層：黒褐色 (10YR 5/2) 土。粘土質シルト。Ⅰa層に比べてやや粘性が強い。下部に向かうほど色調が明るくなる。層厚3~10cm。

Ⅱa層：にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 土。粘土質シルト。粒土の小粒子を斑状に含む。層厚20cm±。

Ⅱb層：にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 土。粘土質シルト。Ⅱa層に比べて若干粘性が強い。植生痕がかなり入っている。層厚20cm±。

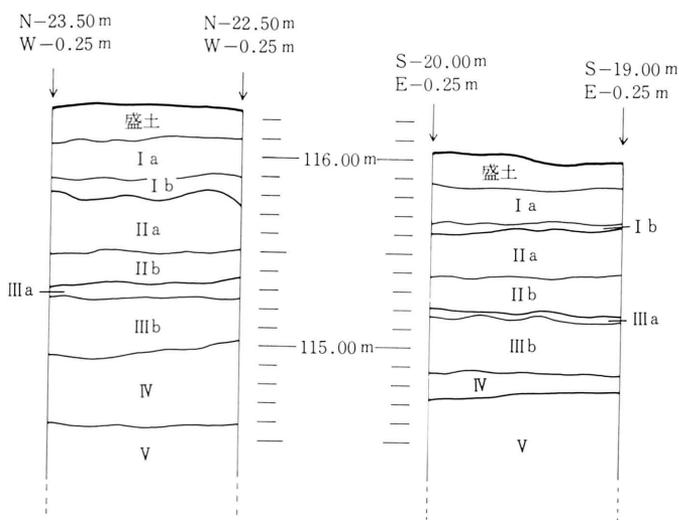
Ⅲa層：灰オリブ色 (7.5Y 5/2) 土。粘土。Ⅲb層に比べてややシルト質であり、ところどころに細砂が認められた。層厚4~10cm。

Ⅲb層：灰色 (7.5Y 5/1) 土。粘土。部分的に細~中砂を混入する。層厚30cm±。

Ⅳ層：灰色 (7.5Y 5/1) 土。砂。細砂から粗砂まで混在するが、下方へ向かうほど粗砂の占める割合が強まる。部分的に小礫の混入がみられる。層厚10~50cm。

Ⅴ層：灰色 (7.5Y 5/1) 土。砂礫、礫は平均径が2~3cmと小さく、形状は全般的に円礫である。充填物は細~中砂からなるが、粘土も認められる。

なお、粗掘はⅡa層の上面まで行なった。Ⅴ層の層厚は東建地質調査株式会社の試錐結果によれば360~1,500cmとなっている。



第2図 BC 03東壁
CG 50西壁 セクション図

[2] 発見遺構

BE 06溝状土壌（第3図）

〔位置〕 BE 03グリッドよりBF 06グリッドにかけて位置している。

〔確認面〕 遺構の確認面はⅡa層土面であるが、掘込面は認定できなかった。

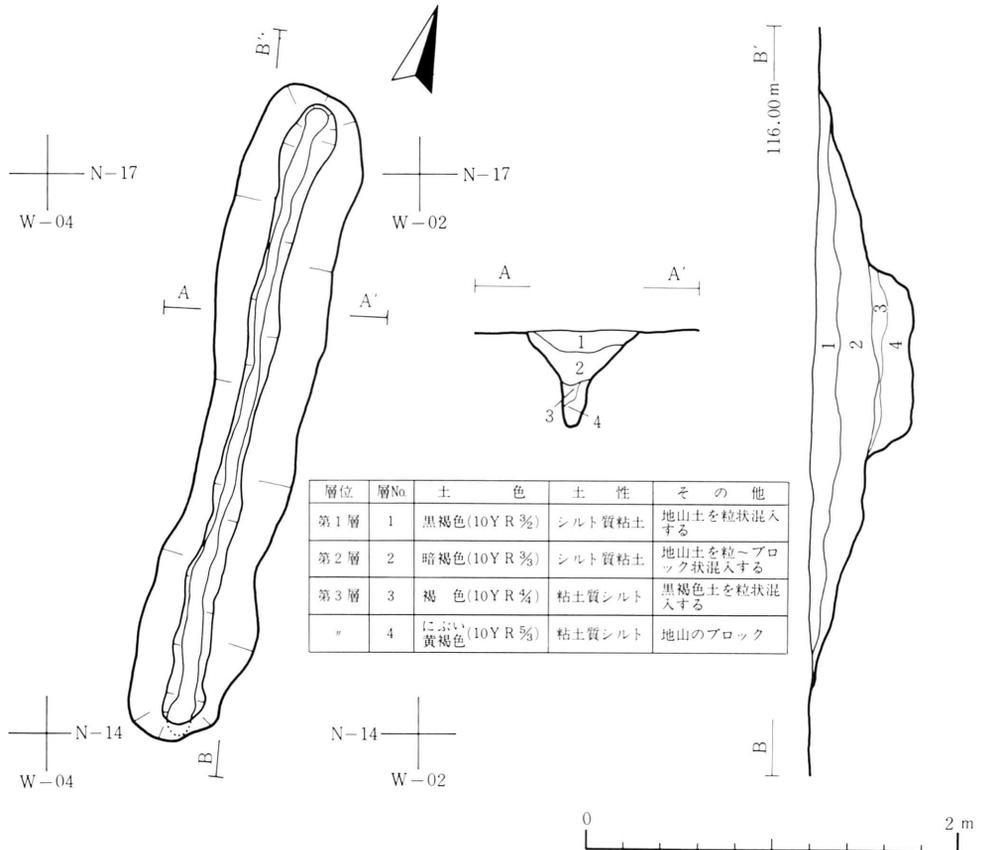
〔形態〕 平面形は両端に丸味をもつ、細長い溝状を呈し、短軸の断面形は上方に外傾するV字状を呈する。底部はほぼ平坦であるが、南側にやや低くなっており奥に掘りこまれている。

〔大きさ〕 長軸356cm、短軸60cm±の規模をもち、深さは50cm±となる。

〔方向〕 長軸方向はグリッドの南北軸とほぼ平行し、N-5°10'-Eとなる。

〔堆積土〕 3層に分けられる。上層は黒褐色を呈するシルト質粘土層で、地山土を粒状混入する。中層は暗褐色のシルト質粘土層で、地山土を粒状～ブロック状に混入する。上層に比べて密であり、粘性も若干強い。下層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層で、地山土がブロック状に堆積したものである。少量の暗褐色土が粒状に含まれている。

〔出土遺物〕 まったく出土していない。



第3図 BE 06溝状土壌

BE 06土壌（第4図）

〔位置〕 C区の中央部、CE 06グリッドからCF 06グリッドにかけて位置している。

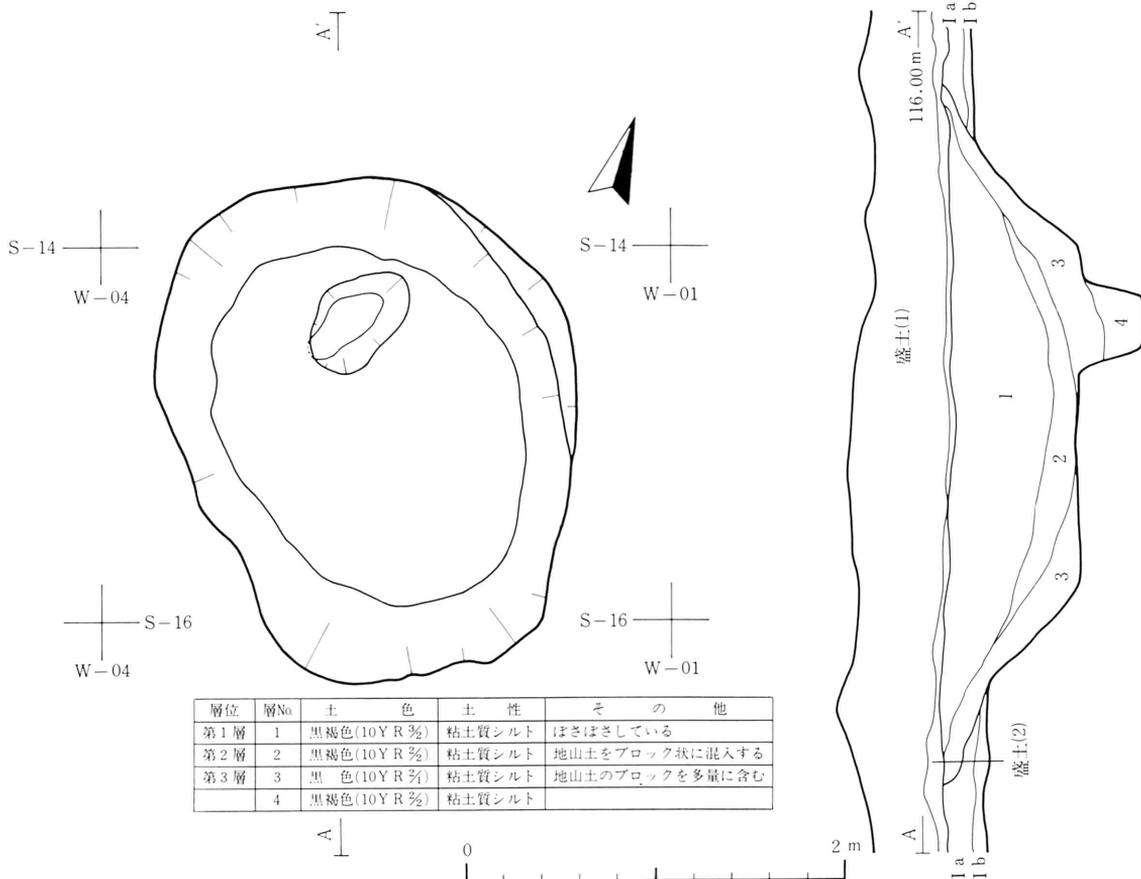
〔確認面〕 遺構はⅡa層上面から確認したが、断面観察によればⅠa層の中央より掘込んでいる。

〔形態〕 平面形はやや歪んだ楕円形を呈し、断面形はすり鉢状を呈する。城底の北寄りの部分に小ピットをもつ。

〔大きさ〕 長軸277cm、短軸217cmとなり、掘込面からの深さは64cm±となる。小ピットの規模は62×41cmで、深さは34cm±となる。

〔方向〕 長軸はN-30°10'-Eの方向を示す。

〔堆積土〕 遺構内堆積土は3層に分けられる。上層は黒褐色の粘土質シルト層で、土の密度は疎でぼさぼさしている。含有物はみられない。土壌の上部に厚く堆積している。中層は黒褐色の粘土質シルト層で、地山土をブロック状に含む。底部にかけてレンズ状に堆積する。下層は黒色の粘土質シルト層で、壁際に堆積する。ブロック状の地山土を多量に混入する。



第4図 CE 06土壌

小ピット内の堆積土は黒褐色の粘土質シルト土で、密度は非常に疎でふかふかしている。

〔出土遺物〕 遺物はまったく出土していない。

〔3〕 検出遺構の問題点

BE 06溝状土壌：本土壤と同種の遺構は近年多くの調査例が報告されている。それらは、谷地形と湧水を存在させる場所に、並列的に群をなして占地している例が多い^{注1)}。形状は本土壤と同じく長楕円形を呈するものが一般的であるが、隅丸長方形に近い形を示し、壙底にピットをもつものもある^{注2)}。

時期については、縄文時代のものとするにはいずれの報告でも一致しているが、早期から後期までかなりの幅がある^{注3)}。

性格に関しては、墓壙説・貯蔵穴説・落し穴説などがある。これらは、自然堆積を示す覆土の状況、遺物が少数の例外を除いて出土しない点、分布形態、および居住地からははずれる立地の問題などからみて、狩猟に伴う落し穴とする説が蓋然性を得ているものであろう。

本土壤は一般的にみられるものよりも深さが浅いところに問題は残るが、同種の落し穴遺構と考えられる。

CE 06遺構：この土壌は堆積土断面図によれば盛土直下のIa層中より掘り込まれている。Ia層がどの段階で堆積したものであるかは明らかでないが、近世以降の極めて現在に近い時期に作られた土壌である可能性が強い。

堆積土は自然堆積であるが、比較的短時間で埋り切ったものと思われる。機能に関してはまったく不明である。

注1. 宮澤寛・今井康博「縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題—いわゆる落し穴について—」『調査研究集録』第1冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査図 1976

① 県内の都南村湯沢遺跡・北上市藤沢Ic遺跡^②においてもこのことは是認されうるもので、長軸方向が谷に引かれる傾向にある。

① (財)岩手県埋蔵文化財センター『都南村湯沢遺跡』1978

② (財)岩手県埋蔵文化財センター『藤沢Ic・Id遺跡現地説明会資料』1977

注2. 紫波町西田遺跡・安代町荒屋II遺跡^①で発見されている。

① 岩手県教育委員会「西田遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報』1978

② (財)岩手県埋蔵文化財センターで発掘調査 1978 調査者の御教示による。

これは県内における形態分類であり、県外においてはそのほかに種々の形態がみられる。

注3. 神奈川県霧ヶ丘遺跡^①や多摩ニュータウンNo.99遺跡^②では縄文の早期、八王子市松山廃寺遺跡^③では縄文時代前期としている。県内においては、湯沢遺跡(注1)で中期末～後期初頭とする見解が出されている。他の遺跡においても中期の遺構を破壊して作られている例が散見できる。

① 今村啓爾ほか『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団 1973

- ② 安孫子昭二「No.99遺跡」『多摩ニュータウン調査報告』V 1968
- ③ 加藤晋平・久保 昇ほか『松山癡寺』八王子遺跡調査会 1973

4. まとめ

- 1) 今回の発掘調査では溝状土壌1、円形土壌1の2基の土壌が検出されたにとどまった。
- 2) 遺物はまったく発見されなかった。
- 3) 今回の調査区域は東南方向へ向かって緩く傾斜する段丘の縁辺部に設定されており、西方の若干高くなる面では歴史時代の遺物を表採することができる。したがって、該地にはこれらに関連する遺構が存在する可能性が強い。

引用文献

- 東建地質調査株式会社 『東北新幹線地質調査書』 1973
- 岩手県企画開発室 『日誌』 北上山系開発地域土地分類基本調査書 1975
- 岩手県教育委員会 『埋蔵文化財遺跡地図』 1974
- 中川久夫ほか 「北上川中流沿岸の第四系および地形」 『地質学雑誌』 第69巻第812号 1963
- 高橋文夫 「Ⅲ地形・地質」 『都南村湯沢遺跡』 岩手県埋蔵文化財センター 1978

付 記

本書所収の前九年Ⅱ遺跡では、溝状土壌の発見された遺跡を管見の及ぶかぎりで集成している。そちらを参照されたい。

津志田遺跡

遺跡記号：TS

所在地：紫波郡都南村大字津志田第10地割他

調査期間：昭和50年4月23日～5月15日

調査対象面積：4800㎡

平面実測基準点：東京起点489.220km

基準高：海拔120.00m

1. 遺跡の位置と立地 (第Ⅳ図P272、第Ⅴ図P274)

津志田遺跡は紫波郡都南村大字津志田地内に所在し、国鉄東北線岩手飯岡駅北約1kmの東北線沿いの東側に位置し、盛岡中央卸売市場の北側に隣接する。都南村の北上川西岸には段丘群が広く発達し、それぞれ新旧を異にする中位と低位の段丘に、区別されている。村内の北上川西岸ではこのうち低位の段丘が広い面積を占め、都南段丘と呼ばれている。本遺跡は下永井遺跡と同じこの低位の都南段丘面に立地する。遺跡の地目は畑地で一部草地と宅地になっている。標高は102.2～102.6mでほぼ平坦である。

東北新幹線は都南村では南北を縦断し現在の東北線と平行して走る。本遺跡付近での新幹線関連遺跡では南方1.5kmの下永井、北1.5kmの南仙北遺跡がそれぞれ調査されている。

2. 調査の方法と経過 (第1図)

本遺跡は東北新幹線建設事業にともなって昭和47年に実施した跡線敷内の遺跡分布調査の際に発見されたものである。

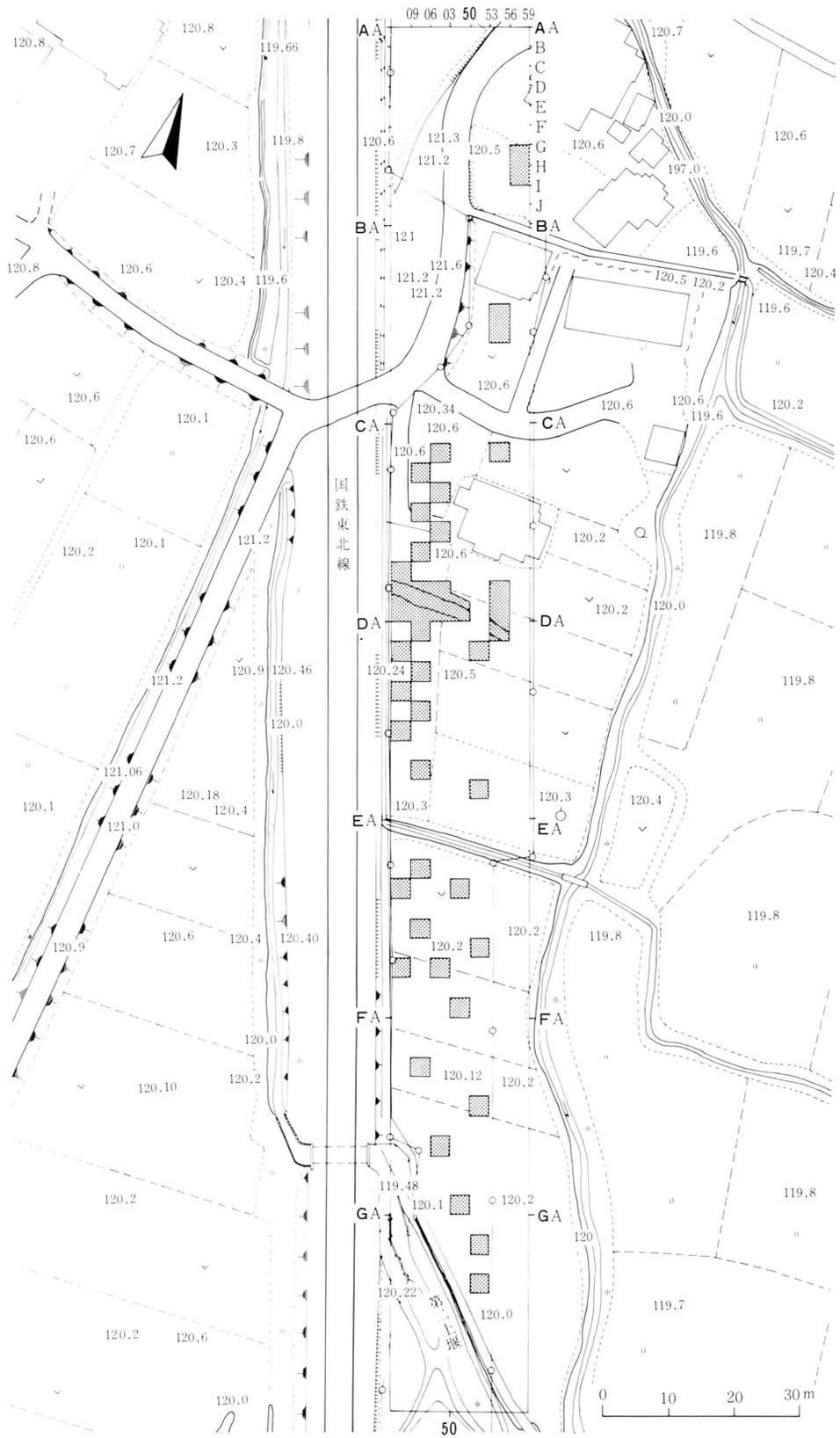
調査はグリッドの設定にかかわる測量より着手した。グリッドの設定にあたっては、新幹線の中心抗東京起点489.200kmと489.220kmの二点を結ぶ直線と、その延長を遺跡の中心軸に定め489.220kmを本遺跡の基準点(CA50)とした。このCA50を基点にし一辺3mのグリッドをくみ、市松状に表土を除去して遺構の探索につとめた。

3. 調査の結果

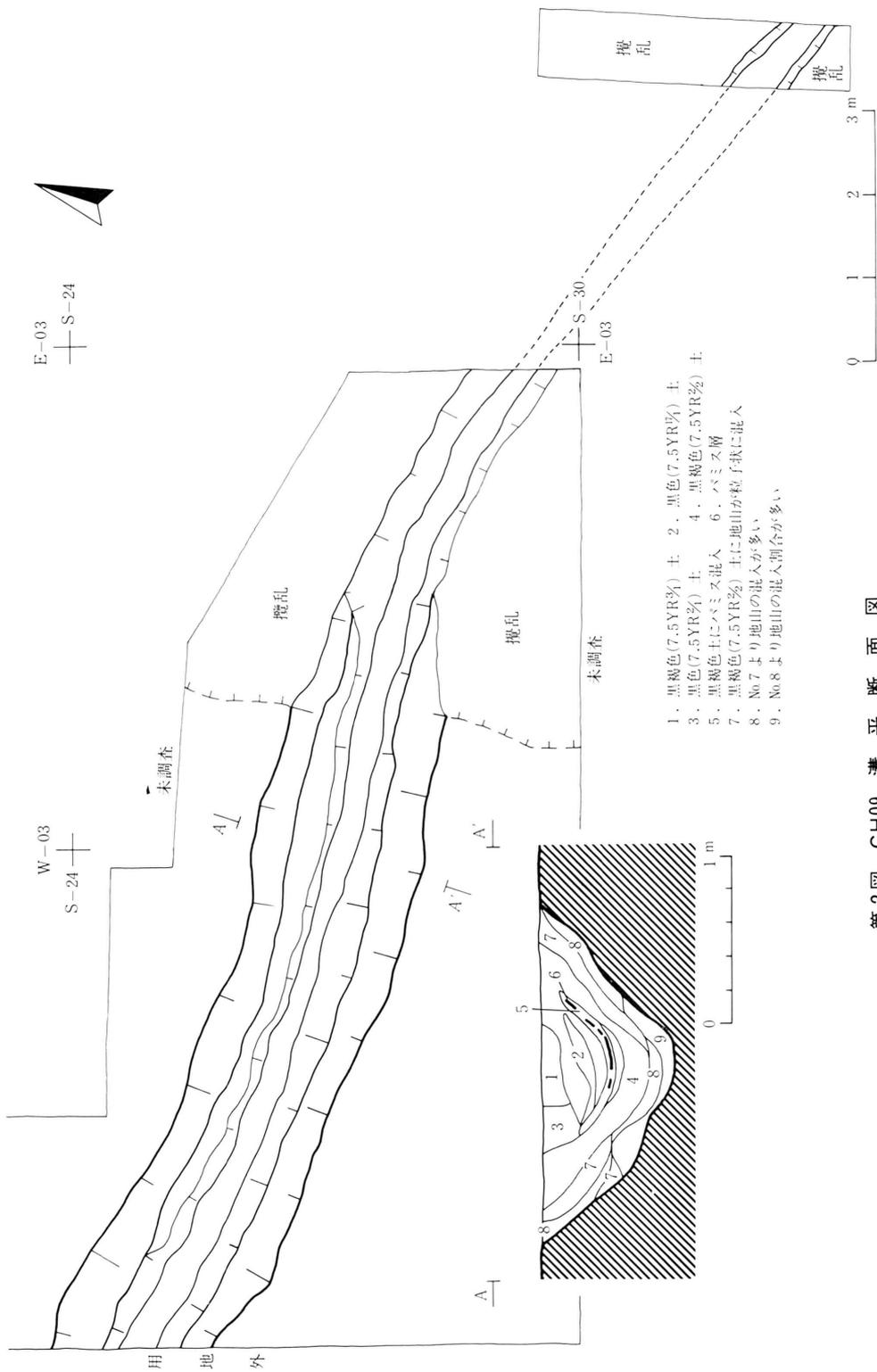
〔1〕 遺跡の基本層位

遺跡の立地する段丘の基本層位を明らかにするために、調査区域内にCC06・DB53・DI53・EH03グリッドの4箇所深さ1.5m程の深掘りを設定した。その結果、調査区域の殆んどが根菜類の栽培や天地返しのため深さ1m以上に及ぶ攪乱がみられた(4箇所の深掘りのうちDB53・DI53・EH03グリッドではすべて天地返しによる層位の逆転がみられた)。以下攪乱が及んでいないCC06グリッドの東壁のセクションにより層位を観察すると以下ようになる。

第一層：黒褐色(7.5YR $\frac{2}{2}$)土、普段の耕作土で植生根が多い。層厚20～30cmを測る。



第1図 津志田遺跡グリッド配置図



第2図 CH09 溝 平 断 面 図

第Ⅱ層：黒色（10YR 3/1）土、クロボクで構成され、やや粘性がありよくしまっている。遺物の出土はみない。

第Ⅲ層：褐色（10YR 5/2）土、上部はやや暗色を帯びたシルト（地山）。

第Ⅳ層：褐色（10YR 3/4）土、粒子細かく粘性に富むシルト質粘土。

なお、国鉄の地質ボーリング結果によると（調査区489.212km付近）表土下2.5m程で砂礫層(注)となり、10m以上の層厚を測る。

〔2〕 発見された遺構

調査の結果、溝1本が検出された。

CH09溝（第2図）

調査区CH09グリッドよりDA56グリッドにかけほぼ東西に走る溝で第Ⅲ層上面で検出された。検出された溝の全長は18m程で、上巾1.7～2.0m、下巾0.3～0.4mで検出面からの深さは0.8m前後を測る。溝の壁はゆるやかな傾斜をもち北壁では一段を有する。溝の底面は多少の凹凸はあるものの全体としては傾斜は認められずほぼ平坦である。埋土は黒褐色土を主体に黒味の強い土で、埋土のほぼ中頃には粉状のパミスの混入がみられ、一部ではレンズ状～帯状に挟入する。溝の壁沿いや底部には黄褐色の地山が粒子状～小ブロック状に混入している。埋土中からの遺物は皆無である。

4. まとめ

- ① 今回の調査で発見された遺構は溝1本に限られた。
- ② 溝は全掘していないので全体の規模・性格等については明らかでない。
- ③ 遺物はまったく発見されなかった。
- ④ 時期についても明らかでないが、埋土中に粉状のパミスが層状に検出されたことからパミス混入以前の遺構であることは確かで、かなり古い時期のものと考えられる。
- ⑤ 今回の調査区域は天地返し等によりかなりの深さまで攪乱がおよんでおり、遺跡としての保存状態は良好とは言えない。

注. 東建地質調査株式会社「東北新幹線東京起点^{486K 500M}間地質調査報告書」（1973）
^{486K 880M}

みなみ せん ぼく
南 仙 北 遺 跡

遺 跡 記 号：MS

所 在 地：盛岡市南仙北二丁目 2—24他

調 査 期 間：昭和50年 4 月10日～ 4 月24日

調 査 対 象 面 積：800m²

平 面 実 測 基 準 点：東京起点 490.600km (BA50)

基 準 高：海抜119.00m

1. 位置と立地と現状 (第Ⅳ図P272、第Ⅴ図P274)

<立地と現状>

南仙北遺跡は、盛岡市南仙北二丁目(旧小鷹)地内にあり、国鉄東北本線仙北町駅の南方1.25km付近に位置している。ここから、北上川と雫石川・中津川の合流点までは、北々西方向に約2.25km離れている。

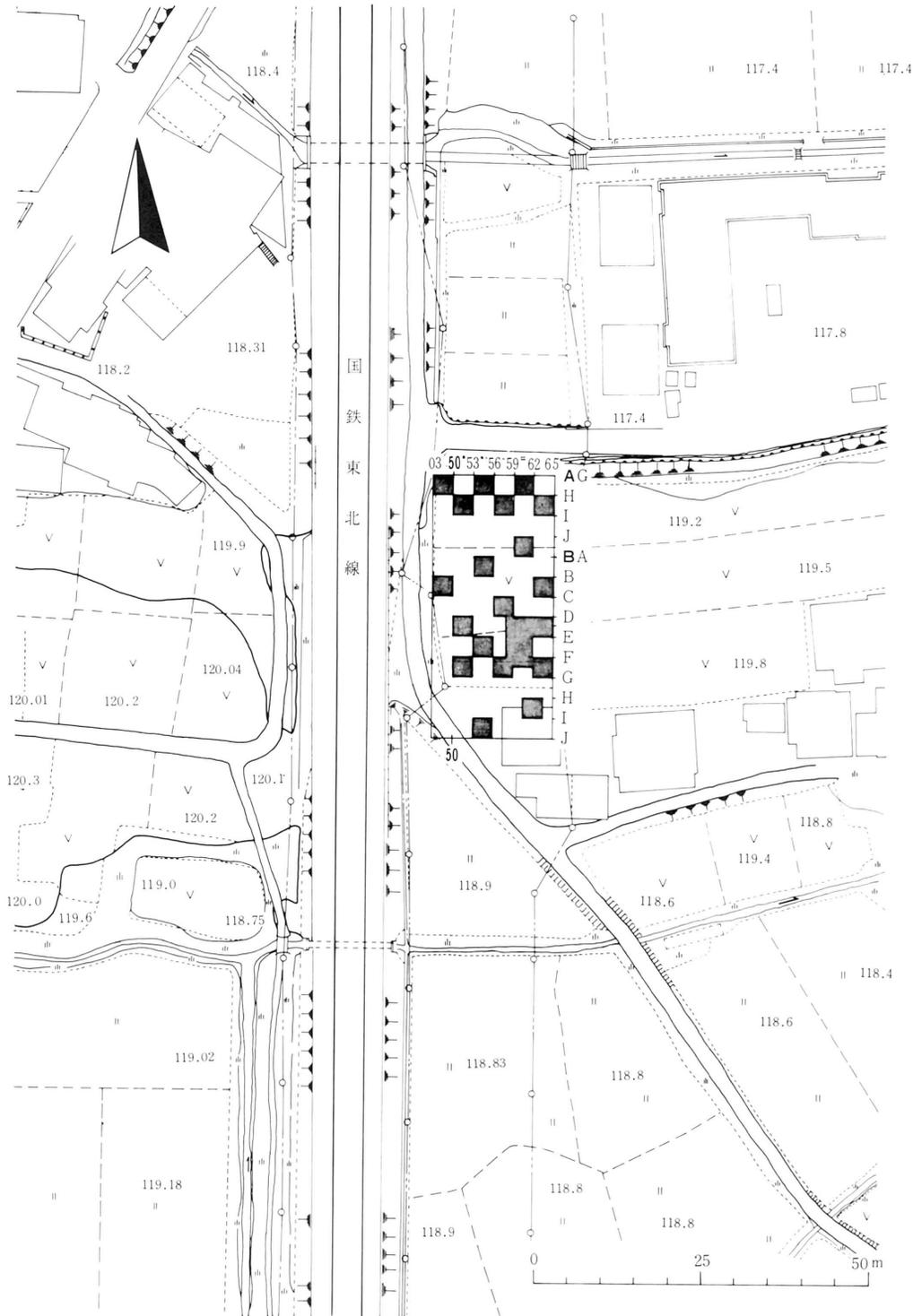
この付近では、雫石川と北上川の沿岸低地帯が、その南方～西方一帯に広がる低位の河岸段丘と境を接している。この河岸段丘は地形分類上、日詰台地の一部をなすもので、都南段丘と呼ばれている。遺跡は、この都南段丘の北辺部に立地しているが、その高度は、海拔119～120m前後で、北側の低地水田面より2m程、高くなっている。

遺跡付近の土地は、現在、畑地や宅地として利用されているが、一部は削平され、水田として利用されている。

<遺跡の現状と周辺の遺跡>

この遺跡の範囲は、比較的小規模であるが、東北本線を挟んで、その東西に広がっている模様である。遺跡が発見された時期は、比較的早く、明治時代に東北本線を通す工事をした際、多数の遺物が出土したと伝えられている。また、第二次大戦後まもなく、現在、調査区西側の道路敷きになっている区域を開墾した際にも、土器片が多数発見されたと云われている。この様に、この遺跡の存在は早くから知られていたが、根菜類の栽培に伴う深耕の繰り返しによって、その大半は既に壊滅している。

なお、この遺跡の周辺部には、段丘の辺沿いに太田方八丁・林崎八幡宮裏・泉屋敷・小鷹・西鹿渡・百目木などの、原始・古代の各遺跡が並んでいる。これらの遺跡のうち、太田方八丁遺跡は、近年大規模な調査が実施され、志和城の擬定地として最有力視されている遺跡である。林崎八幡宮裏・西鹿渡・百目木などの各遺跡は、古代の集落跡である。泉屋敷遺跡は、かつて住宅改築の際に発見された遺跡であるが、既に壊滅している。また、小鷹遺跡は、現在、所在地が不明になっているが、かつては土器片や石鏃・石斧などが出土したと伝えられている。以上の各遺跡の他に、この遺跡の南々東に約0.35km離れた地点付近の畑地からも、平安時代のものと思われる土師器の破片が採集されている。さらに、南々西に1.5km離れた地点付近には、奈良～平安時代の生畔・横屋集落跡があり、南方約1.5km地点付近には、新幹線ルートにかかる津志田遺跡がある。



第1図 南仙北遺跡グリッド配置図

2. 調査の方法と経過

〈方法〉

南仙北遺跡の調査は、序文2に述べた方法に準じて行なった。なお、この遺跡の調査では、平面測量の基準原点を新幹線中軸線上の東京起点 490.600km地点に置き、この点をBA50とした。以下、この点を基準に、中軸線に平行・直行する形で、3m×3m単位の方眼区分を設定し、地割りを行なった。なお、高度測量は、海拔119.00mを基準高にする様、努めた。

〈経過〉

調査は、昭和50年4月10日から4月24日まで行なった。4月10日から13日までは、現地付近の遺跡分布調査や基準測量を行なった。4月14日には、午前中、調査予定地内の雑物撤去を行なった。その後、4月14日から18日までは、遺構検出のための粗掘り作業を行なった。4月17日から4月24日までは、検出された住居跡一棟の調査を行なった。それと併行する形で、4月17日から4月18日までは、深掘り部分の土層調査を行なった。

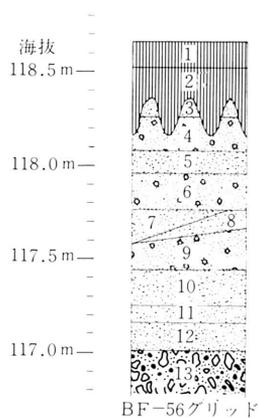
以上の経過をたどり、4月24日、一切の調査予定を完了し、器材を撤収した。

3. 調査の成果

〔1〕 基本層序

遺構付近の土層構成は、場所によって幾分の差異が見られるものの、基本的には、耕作土からなる表土層と、その下に続く砂と砂礫の互層からなる。これらの堆積層は、河川の沿岸の流水によって堆積したような状況を示している。以上のような様子を、遺跡中央部のBF56グリッド西壁の土層柱状模式図でみると、第2図および第1表に示した様になる。この図と表からも解るように、BF56グリッド付近では、1、2で代表される耕作層が、地下0.26～0.5mの深さに及んでいる。そのため、自然堆積層である3～4層は、部分的に著しい攪乱を受けている。それより下の5～12層は、ほとんど攪乱されなまま重なり合って、地下約1.5m付近で12の基底礫層に到達している。

以上の各層のうち、人工遺物の含まれる層は1～2層であるが、それ以外の土層には、遺構の埋土を除いて、人工遺物が全く見ら



第2図 土層柱状図

第1表

南仙北遺跡土層注記

層番号	土色	色記号	土性	層厚	備考
1	黒褐色	Hue7.5YR $\frac{3}{4}$	砂質壤土	0.15 m	表土、耕作土、遺物あり
2	暗褐色	〃 $\frac{3}{4}$	〃 3と1の混合攪乱土	0.06~0.35	耕作土、遺物あり
3	黄褐色	Hue 10YR%	砂土	0~0.22	この上面より遺構検出、遺物なし
4	〃	〃	〃 礫まじり	0.06~0.24	遺物なし
5	〃	〃	〃	0.10~0.14	〃
6	〃	〃	〃 礫まじり、4より礫は少ない	0.07~0.30	〃
7	〃	〃	〃 粒子がやや粗い	0~0.14	〃
8	〃	〃	〃 粒子が細かい	0.04~0.16	〃
9	〃	〃	〃 〃 小礫まじり	0.06~0.22	〃
10	暗赤褐色	Hue 5R $\frac{3}{4}$	〃 粒子が粗い	0.12~0.24	〃
11	極暗赤褐色	Hue 10R $\frac{3}{4}$	〃 水酸化第二鉄が沈澱、固結	0.06~0.15	〃
12	暗赤色	Hue 10R%	〃 〃	0.09~0.20	〃
13	褐色	—	砂礫層	0.10+ α	深掘りは地下1.7mまで掘った

れない。遺構の検出面は、発見された住居跡1棟についてみる限り、3層の上面にある。したがって、この住居跡より以後の文化遺物は、全て1~2層中に含まれていると推定される。なお、発見された住居跡は、3~4層を切り込んで作られている。

〔2〕 発見された遺構と遺物

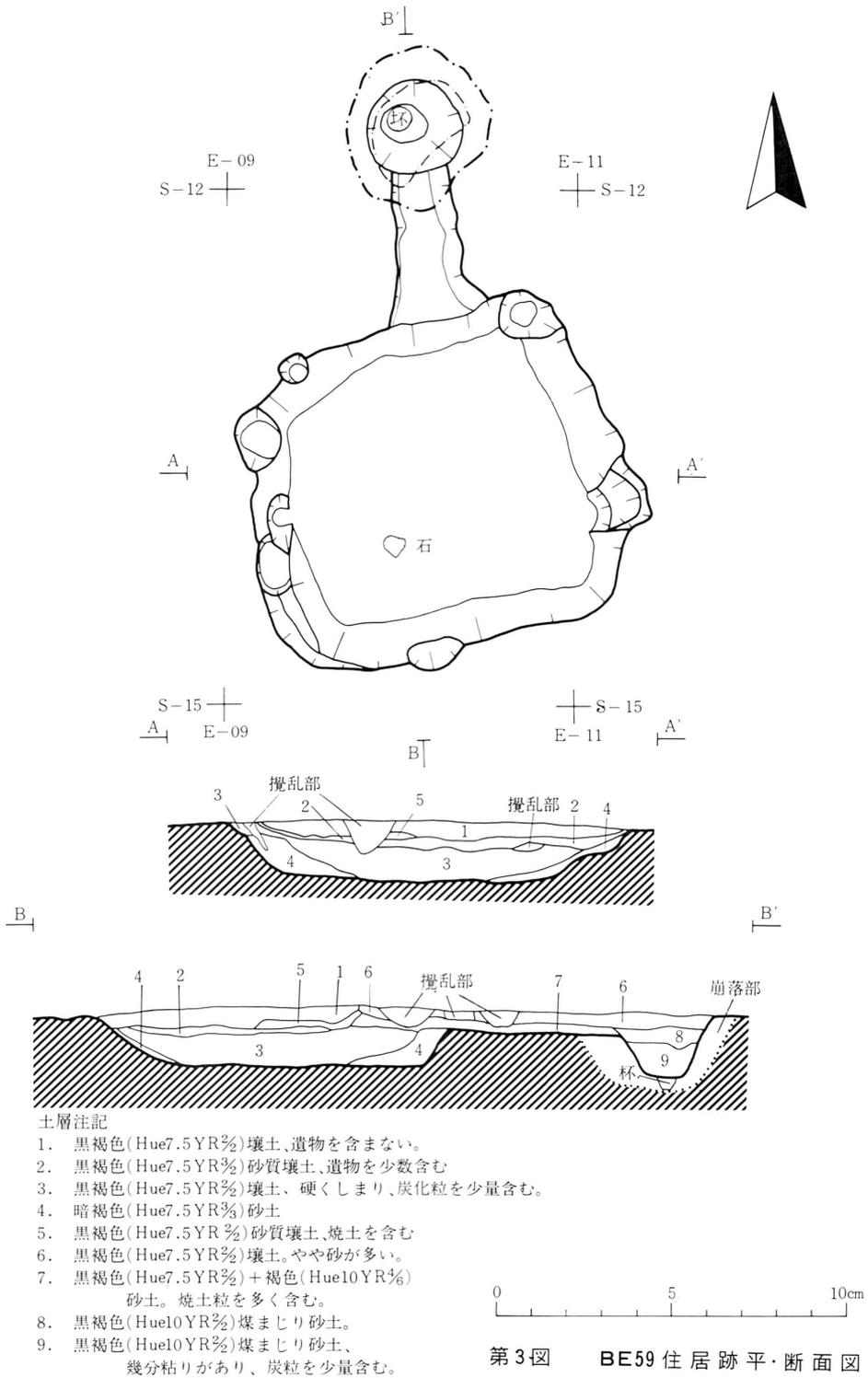
今回の調査では、調査区の南東部寄りの場所から、小型の竪穴住居跡が1棟発見されたが、それ以外の遺構は発見できなかった。この住居跡は、平安時代に属する遺構である。

BE59住居跡（第3、4図、第2、3表、写真1-2・3、2-1~3）

〔規模・形状〕 竪穴は、3~4層を掘り込んで作られており、平面プランは隅丸方形を呈する。その規模は検出面上で、東西2.2m、南北1.9mで、検出面より深さ0.35m内外をそれぞれ測る。竪穴の北側部分には、全長約1.4mの煙道・煙出部が付属している。竪穴に伴う柱穴状ピットとしては、P₁、P₂、P₃があるが、上屋の支柱穴であるかどうか、不明である。

〔付属施設〕 竪穴に伴う付属施設としては、かまどがある。しかし、その本体部分は破壊されているため、規模や形状は不明である。煙道部は、長さ約0.85m、幅0.35~0.55m、深さ0.1~0.15mを測る。煙出し部は、調査の途中で、周囲の土が崩れて大きく変形したが、もともとは、摺鉢状のピットになっていた。その規模は、口径0.55m、底径0.25mで、検出面より深さ0.35mを測る。

〔埋土〕 竪穴の埋土は、主として、黒褐色~暗褐色の壤土ないし砂土からなるが、かまど部の中層部や煙道部の下層部には、焼土層が薄く広がっている。また、煙出し部の中下層には、



第2表

出土遺物の計測表

(単位 cm)

図版 番号	写真 番号	器種名	出土遺構名	器 高	口 径	底 径	器 厚		備 考
							体 部	底 部	
4-1	3-3	土師器 内黒環	BE59住居跡 煙道・煙出し底部	6.1	13.1	6.5	0.4~0.8	0.7~1.0	ほぼ完形
4-2	3-4	土師器 カメ	BE59住居跡 埋土	不 明 (残存部約7cm)	不 明	推 7cm内外	0.5~0.9	不 明	胴部下半残存

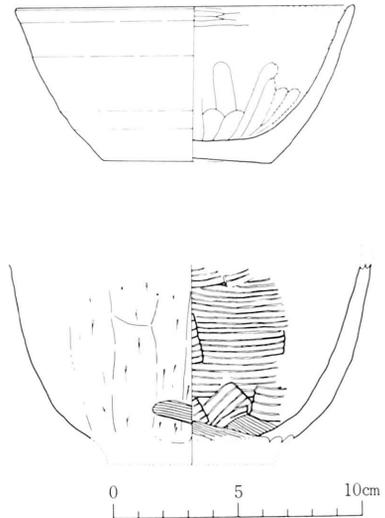
煤やその他の炭化物によって黒褐色に染まった砂質土層が見られる。これらの竪穴埋土のうち、上層部の埋土は、根菜類を掘る際に、部分的な攪乱を受けている。

〔重複関係〕 この竪穴は、一見して、単一期間内の遺構と思われる。しかし、埋土層の堆積状況を見ると、埋土の中層部付近にもう1つの床面を持った、2時期にまたがる遺構である可能性も考えられる。

その事は、例えば、竪穴内の出土遺物が主として中層部の2層から出土している事、そして、煙道部から続く焼土層が中層部の北側一帯に広がっている事などからも裏付けられる。この様に考えた場合、新旧床面の平面プランの規模や形の違いが問題になるが、調査時の土層観察からは、十分にその事が確かめられなかった。

〔遺物出土状況〕 竪穴内の遺物は、主として埋土中層部の北壁寄りの場所から発見されている。この付近から発見された遺物は、全て、接合不能な土器片である。その合計は12点であるが、そのうち11点は土師器の環・カメ類の破片で、1点は須恵器の環片である。これらの遺物は、主として、かまど本体の推定位置付近から分散した形で出土している。以上の遺物の他に、この住居跡の遺物としては、煙出し部の底からほぼ完形の環が1点出土している。この環は、煙出し部の底部に正立した形で埋め込まれていたもので、確実に、住居跡に伴う唯一の遺物である。

〔遺物〕 住居跡内の主な遺物は、第4図1・2に示す通りである。1は煙出し部より出土した土師器の内黒環である。この環は、ロクロを使用して作られ、底部に回転糸切り痕を有し、内面は、ヘラ磨きされて黒色処理されている。その大きさは、口径13.1cm、底径6.5cm、器高6.1cmで、器厚0.4~0.9cmを測る。2は、竪穴北東部の埋土中層から出土した土師器長胴カメの下半部破片である。このカメは、粘土ひもの輪積み、ないし巻き上げによって作られている。その内面には、横方向の刷毛目状のヘラケズリが施され、外面には、縦方向のヘラケズリが施



第4図 BE59住居跡出土遺物実測図

されている。カメの大きさは、残存部で、上幅推定約14.5cm、下幅約8.3cm、高さ約7.0cmを測る。

その他（第2表、写真2-6・7）

その他、遺構に伴うものではないが、第3表に示すように、BE59住居跡周辺の4つのグリッドの耕作土中から、土師器や須恵器のヤツボ・カメ類の破片が少数出土している。それらに混って、落合I遺跡^⑩でA群Ⅲ類に分類された非内黒の土師器、ないし土師器類似の酸化炎焼成された軟質土器の坏の破片が若干出土している。この中には、BE59住居跡出土の土器片と接合できる破片もあったが、大部分は接合の不能な細片である。おそらく、旧地表面付近にあったり、他の遺構の埋土中に含まれたりしていた土器片が、耕作によって移動したものであろう。

4. 考察とまとめ

以上、今回の調査で発見された遺構と遺物の概略について述べてきたが、次にこれらの結果をもとに、南仙北遺跡の時期と性格について若干の考察を加えてみたい。

(1) 竪穴住居跡の年代

BE59住居跡から出土した内黒坏の口径：底径：器高の法量比は9.1：4.2：4.0（＝2.17：1：0.95）となり、口径が底径の2倍強、器高が底径の1倍弱の値を示す。これを器形全体のプロポーションで見ると、口径の大きさに比べて底径が比較的大きく、底部から口辺にかけての器壁の立ち上がりが急で、全体的に深みのある形になっている。

同種の坏で、この坏に製作技法とか形状の似た例は、江刺市落合I遺跡のC309住居跡のかまど部出土のA群Ⅰ-2類の坏や、紫波町上平沢新田遺跡のAG12ピット^⑪(1)、およびCC68住居跡(2)出土の坏に見られる。そのうち、落合I遺跡の坏は全部で3個体あるが、それらの坏の法量比の算術平均値は、2.27：1：1.06となる。この値は、南仙北のそれと比べた場合、幾分の違いはあるものの、かなり近い数値になっている。事実、これらの坏類と比べた場合、肉眼的には非常によく似た印象を受ける。また、上平沢新田の場合は、2例の法量比の算術平均値が2.23：1：0.94になり、この値も南仙北例に非常に近い値を示している。このような形態的類似性から、南仙北遺跡の坏の所属年代を上記2遺跡の場合とほぼ同時期に想定しておきたい。ではそのような想定がなりたつと考えた場合、上記の坏類には、一体、どれくらいの年代が与えられるであろうか。これらの坏類に対し、落合I遺跡の場合は、10世紀代の年代が考えられている。上平沢新田遺跡の場合にも、ほぼ同じ年代が与えられている。

以上の結果から類推すると、南仙北遺跡の場合も、ほぼ同じくらいの10世紀代の年代が考え

られるであろう。このような結論は、同じ住居跡から出土した長胴カメをもとに推定された年代とも矛盾せず、ほぼ妥当と考えられる。ただし、以上の年代観については、資料的にまた不¹²⁾充分な点があるので、資料の増加を待って再度検討する余地がある。

(2) 遺跡と遺構の性格

今回の調査で発見された遺構は、住居跡1棟のみなので、遺跡全体の性格については、詳しくは解らない。おそらく、近辺の西鹿渡や百目木などの遺跡群と同様、北上川～雫石川沿いの低位段丘の辺縁部に営まれた古代の集落跡の1つであろう。時期的には、坏などの製作技法から見て、太田方八丁遺跡の住居跡群の創建年代よりかなり時代の下る遺跡と考えられる。

さらに、BE59住居跡の性格づけの問題であるが、この住居跡は、東西長2.2m、南北幅1.9mの竪穴部分を有し、住居跡としては非常に小さい規模に属するものである。しかも、同様な小竪穴住居跡は、今までも水沢市石田⁽¹³⁾、金ヶ崎町西根⁽¹⁴⁾、北上市尻引・相去⁽¹⁵⁾、花巻市八幡⁽¹⁶⁾など多くの集落跡で発見されている。これらの小竪穴住居跡には、それより大きな一般住居跡との間に何らかの機能上の差が見られないものであろうか。いずれ、興味のある問題である。しかし、南仙北遺跡の場合、比較すべき住居跡が他に検出されていないので、これ以上言及する事は避けた。したがって、その点については、他の遺跡での今後の研究成果に期待したい。

注 記

- (1) 盛岡市教育委員会 「太田方八丁遺跡、昭和52年度発掘調査概報」 1978
- (2) 太田方八丁遺跡の北東部に隣接する遺跡で、盛岡市教育委員会により1978年に調査されている。
- (3) 吉田義昭・庄司亮助編 「盛岡市埋蔵文化財遺物出土地名表」 1962
- (4) (3)と同じ文献による。
- (5) 岩手県教育委員会 「埋蔵文化財分布地図」 1974
- (6) (5)と同じ文献による。
都南村教育委員会ほか 「百目木遺跡第1～4次現地説明会資料」 1978
- (7) 南仙北遺跡の調査の際、分布調査で発見したものである。分布地図上には未だ記載されていない。
- (8) (5)と同じ文献による。
- (9) 岩手県教育委員会ほか 「昭和50年度 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」Ⅱ
- (10) 1974年に岩手県教育委員会により調査されている。調査の概要は「フィールドノート」16号に掲載されている。
岩手県教育委員会 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」Ⅰ 岩手県文化財調査報告書 第33集 1979
- (11) 1975年に岩手県教育委員会により調査されている。
岩手県教育委員会ほか 「上平沢新田遺跡、現地説明会資料」 1975
- (12) 例えば、落合Ⅰ遺跡の例では、坏の底部周辺にヘラケズリ調整が見られるのに対し、上平沢新田遺跡や南仙北遺跡の例ではそれが見られない、という技法上の違いがある。

- (13) 1974～1975年にかけて、岩手県教育委員会によって、4次にわたる調査が行なわれている。
 岩手県教育委員会 「石田遺跡現地説明会資料」 1976
- (14) 草間俊一 「金ヶ崎町西根遺跡」 金ヶ崎町教育委員会 1959
 同 金ヶ崎町西根遺跡—第四次調査を中心に—「岩手史学研究」第39号 1962
 同 第4章 原添下竪穴住居址 「岩手県金ヶ崎町、西根古墳と住居址」 1968
- (15) 北上市教育委員会 「尻引遺跡調査報告書」 1978
- (16) 岩手県教育委員会・北上市教育委員会により、1973～1974年にかけて調査が行なわれた。
 岩手県教育委員会ほか 「相去遺跡現地説明会資料」 1973
 同 上 「高前田遺跡現地説明会資料」 1974
- (17) 岩手県教育委員会により、1976年に調査されている。
 岩手県教育委員会ほか 「八幡遺跡現地説明会資料」 1976

第3表 南仙北遺跡出土遺物一覧表

			AG53 グリッド表土	AG59 グリッド表土	BB62 グリッド表土	BF62 グリッド表土	BE59 住居跡	総計							
土 師 器 類	カメ類	口縁部	1		1		1	3	22						
		胴部	1	2	3	3	5	7		2	2	5	8	16	
		底部				1				2			2	3	
	内黒 類	口縁部			1				1				2	6	
		胴部							1				1		2
		底部		0		1		1					1		1
		完形							1				1		1
	その他	口縁部		0	1	1								1	
	計			2	5	8	3	11	29						
	須 恵 器	カメ類	胴部		0	1	1	0	0	0	0	1	1		
坏類		口縁部		0	0	0	0	0	1	1	1	1			
計			0	1	0	0	1	2							
赤 焼 き 土 器 類	坏類	口縁部	1		1		1				3	8			
		胴部		1	2	5		1	1	1	0		3		
		底部			2								2		
総計			3	11	9	4	12	39							

参考文献

本報告では引用しなかったが、参考文献として下記のものがあげられよう。

- 岩手県教育委員会 「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」 1973
 同 「盛岡市上太田蝦夷森古墳」第2報 1971
 盛岡市教育委員会 「盛岡市上太田蝦夷森古墳」 1969
 盛岡市史編纂委員会 「盛岡市通史」 1970

- | | |
|----------------|---|
| 盛岡市史編纂委員会 | 「盛岡市史」第一分冊二 開拓期 1957 |
| 岩手県教育委員会ほか | 「竹鼻前遺跡現地説明会資料」 1976 |
| 〃 | 「下羽場遺跡現地説明会資料」 1976 |
| 板橋 源 | 方八丁名義考「奥羽史談」5巻2号 1954 |
| 岩手県教育委員会ほか | 「太田方八丁遺跡現地説明会資料」第1次～第4次 1977 |
| 宮城県教育委員会ほか | 「東北新幹線関係遺跡調査報告書」I
宮城県文化財調査報告書第35集 1974 |
| 杉原莊介・大塚初重 | 「土師式土器集成(4)」 1974 |
| 秋田考古学協会 | 「野形遺跡」 1977 |
| 岩手放送岩手百科事典発行本部 | 「岩手百科事典」 1978 |

盛岡地区北部の概観

1. 盛岡地区北部の地形と環境

盛岡地区北部は奥羽脊梁山地と北上山地にはさまれた北上川低地帯の北辺部に位置し、その地形は山地、丘陵地、段丘、河岸低地に四区分される。

本地区を北から南に流れる北上川は、蛇行しながら市街地中心部にかかり、そこから流路をや、東に転じ市街地の南東部付近で西の雫石川、東の中津川を合流してさらに南下を続ける。北部地区の北上川河谷部では沖積平野の発達不良であるがそれに比して西方の雫石川河谷部ではよく発達し帯状の低地がみられる。この地区の西方には沼森山、谷地山、石ヶ森など標高500m内外の山や丘陵地がある。諸葛川、木賊川、菓子川などの小河川はその東部を南流して雫石川に注ぎ、流域には小規模な扇状地が発達している。また周辺部には上下二段の段丘面の発達が見られる。一方東方には姫神山、鷹頭山、明神山、大倉山など標高600～1000m台の山地が広がっている。これらの山地西縁には黒石野段丘、高松段丘、上田段丘の三つの段丘面の発達が見られる。段丘堆積物については中川ら（1963）の研究があるが、それによれば高松段丘は青山町火山灰泥流堆積物からなり侵蝕段丘を形成している。この火山泥流堆積物上に分火山灰層、あるいは小岩井火山灰層がのり、黒石野段丘上には洩民火山灰層、分火山灰層がのっている。

なおこれらの火山灰層の層厚はいずれも10～15m内外である。

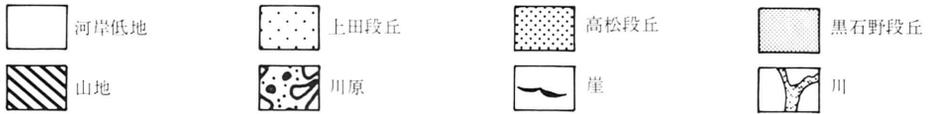
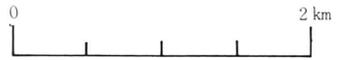
本地区内における東北新幹線ルートは北上川の西岸沿いに北上するが、地形的には雫石川、北上川の河岸低地や上田段丘、高松段丘上を通過するものである。

2. 周辺の遺跡

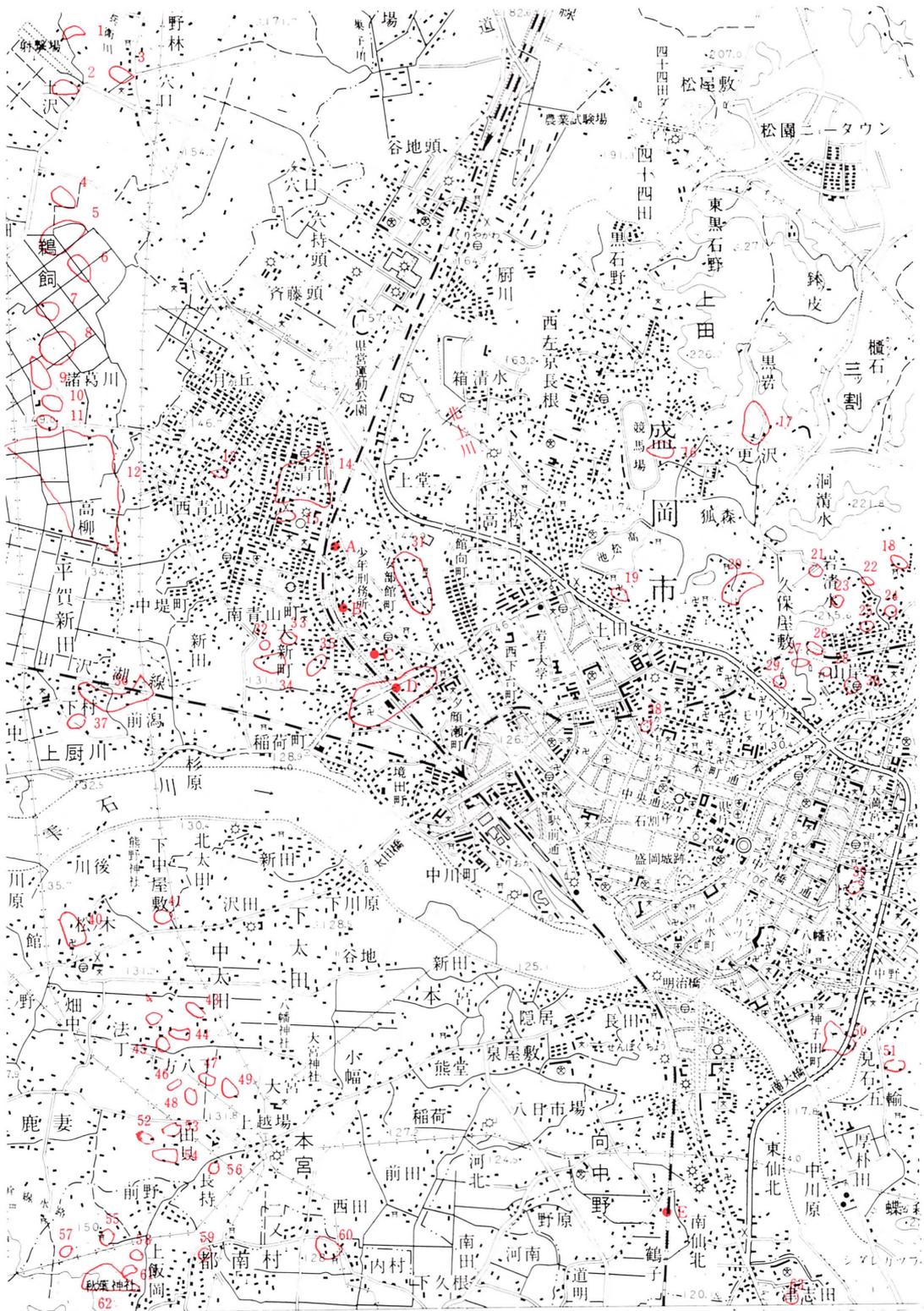
本地区の遺跡は第Ⅶ図の遺跡分布図に掲げただけでも約70ヶ所の多きを数える。しかし東北新幹線、東北縦貫自動車道関連の調査を除くと今までに調査されたことのある遺跡は小屋塚遺跡^{注1)}、大館町遺跡^{注2)}、太田方八丁遺跡^{注3)}、蝦夷森古墳群^{注4)}などである。小屋塚遺跡は昭和43年に調査され堅穴住居跡、石組炉およびフラスコ状ピットが発見されている。また大館町遺跡は昭和52年に岩手大学考古学研究会の手で行なわれている。太田方八丁遺跡は昭和51年～53年にかけて岩手県教育委員会、盛岡市教育委員会の手で調査されている。これらの遺跡はいずれも低、中位段丘の縁辺部に立地している。その他にも注目すべき遺跡として厨川柵擬定地や安倍館などがある。以上述べてきた各遺跡に混って東北新幹線ルートにかかる遺跡は第Ⅶ図に図示したごとく5遺跡である。南から北へ南仙北、厨川柵擬定地、前九年Ⅰ、前九年Ⅱ、長畑の順に並んでいる。



1. 長畑遺跡 2. 前九年II遺跡 3. 前九年I遺跡
4. 厨川柵擬定地 5. 南北仙遺跡



第VI図 盛岡地区地形分類概念図



第Ⅷ図 遺跡の位置と周辺の遺跡

- A. 長畑遺跡 B. 前九年Ⅱ遺跡 C. 前九年Ⅰ遺跡
- D. 厨川柵擬定地 E. 南仙北遺跡

そのうち厨川柵擬定地は旧雫石川河道の北、上田段丘の南辺部に立地している。また前九年Ⅰから長畑までは上田段丘上の上のっている。なおこの地区内では東北自動車道関連遺跡として12遺跡の調査が行なわれている。

第Ⅴ表 周辺の遺跡地名表

No.	名 称	時 期	No.	名 称	時 期
1	勘 助 館 跡	中 世	33	大 新 遺 跡	縄 文
2	土 沢 遺 跡	縄 文(後期)	34	大 館 町 遺 跡	縄 文(早・中期)
3	中 村 遺 跡	土 師	35	小 屋 塚 遺 跡	縄 文(中期)
4	小 鳥 沢 (A) 遺 跡	縄 文・弥 生	36	幅 塚 遺 跡	平 安
5	高 屋 敷 遺 跡	縄 文	37	前 湯 遺 跡	平 安
6	大 久 保 遺 跡	縄 文	38	四 ツ 家 遺 跡	平 安
7	白 石 遺 跡	縄 文(中期)	39	山 王 山 遺 跡	縄 文(中期)
8	大 緩 遺 跡	縄 文(晩期)奈良?	40	松 ノ 木 遺 跡	土 師
9	滝 沢 笹 森 遺 跡		41	八 卦 遺 跡	土 師
10	別 当 森 遺 跡	縄 文(後期)	42	太 田 方 八 丁 Ⅳ 遺 跡	平 安
11	笹 森 遺 跡	縄 文・土 師	43	吉 原 Ⅲ 遺 跡	土 師
12	高 柳 遺 跡	縄 文・平 安	44	吉 原 Ⅱ 遺 跡	土 師
13	境 橋 遺 跡	平 安	45	吉 原 Ⅰ 遺 跡	土 師
14	観 武 町 遺 跡	縄 文	46	中 太 田 遺 跡	平 安
15	青 山 遺 跡	平 安	47	太 田 方 八 丁 Ⅰ 遺 跡	平 安
16	上 堤 頭 遺 跡	縄 文(早期)	48	太 田 方 八 丁 Ⅲ 遺 跡	平 安
17	宇 登 坂 遺 跡	縄 文(中期)	49	太 田 方 八 丁 Ⅱ 遺 跡	土 師?
18	イ タ コ 塚	弥 生	50	新 山 館 遺 跡	平 安
19	上 田 山 遺 跡	縄 文(中期)	51	見 石 遺 跡	縄 文(中・後期)・土師
20	久 保 屋 敷 遺 跡	縄 文(中期)	52	田 貝 遺 跡	平 安
21	洞 清 水 遺 跡	縄 文(前期)	53	竹 鼻 前 Ⅰ 遺 跡	平 安
22	道 上 遺 跡	平 安	54	竹 鼻 前 Ⅱ 遺 跡	平 安
23	道 下 遺 跡	縄 文(早期)・平 安	55	石 仏 遺 跡	平 安?
24	蒼 前 遺 跡	縄 文(早期)	56	月 見 山 遺 跡	縄 文(早・後期)・土師・須恵
25	合 間 遺 跡	縄 文(早期)・平 安	57	山 中 遺 跡	縄 文(早・中期)・土師
26	日 向 遺 跡	縄 文(早期)・弥 生	58	高 館 古 墳	奈 良?
27	銭 神 沢 (A) 遺 跡	縄 文(後・晩期)・弥 生・平 安	59	下 洞 場 遺 跡	平 安
28	熾 硝 蔵 遺 跡	弥 生	60	内 村 遺 跡	鎌 倉?
29	寺 山 遺 跡	縄 文(前期)	61	高 館 遺 跡	縄 文(中期)
30	橋 山 田 遺 跡	縄 文(後期)	62	飯 岡 館 遺 跡	中 世
31	安 倍 館 遺 跡	平 安・中 世	63	破 堰 古 墳	奈 良?
32	大 館 遺 跡	縄 文(早・前・中期)			

- 注1. 草間 俊一 「盛岡市下厨川小屋塚遺跡調査略報」 岩手大学歴史学研究室 1968
 注2. 岩手大学考古学研究会 「大館町遺跡」 盛岡市教育委員会 1978
 注3. 岩手県教育委員会 盛岡市教育委員会 「太田方八丁遺跡」 1978
 注4. 岩手県教育委員会 「盛岡市上太田蝦夷森古墳 二報」 1970

参考文献

- 村井他 「ボーリング資料にもとづく北上低地帯の地下地質(その1)
 岩手大学工学部研究報告第30巻 (1977)
 岩手県 「土地分類基本調査」北上山系開発地域 1973
 中川他 「北上川中流沿岸の第四系および地形」 地質学雑誌
 第69巻第812号 日本地質学会 1963
 佐藤二郎 「考古学のための地質学」 (1978)
 盛岡市教育委員会 「埋蔵文化財包蔵所在地名表」 1974
 盛岡市教育委員会 「盛岡市埋蔵文化財地図」 1975

くりや がわの さく
厨川柵擬定地

遺跡記号：KS

所在地：盛岡市前九年一丁目14-2 他

調査期間：昭和51年5月17日～10月16日

調査対象面積：4600m²

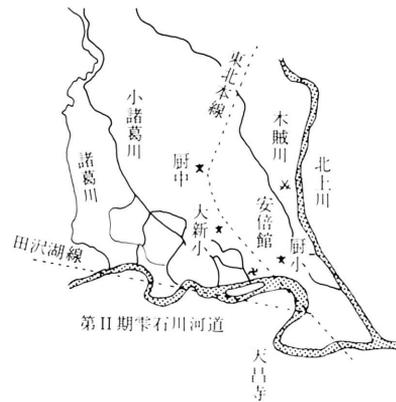
平面実測基準点：東京基点495.260km (DA50)

基準高：海拔132.50m

1. 遺跡の位置と環境 (第Ⅵ図P 350、第Ⅶ図P 351)

厨川柵擬定地は盛岡市前九年1丁目14-2に所在する。本遺跡は国鉄盛岡駅から北へ1.7kmの地点にあり、東北本線東側の段丘上に位置する。また西側前面には盛岡客貨車区がある。現地形は宅地の造成や道路の新設及び盛岡客貨車区建設工事などにより台地上の剝崩が著しく旧地形は大きく変貌している。旧地形では天昌寺を中心に東に権現坂台地と西の里館台地は一連の台地として東西方向に長く連結していた。台地の南側は雫石川の旧河床で低湿地を形成し、水田及び宅地として一部が利用されている。

^{注1)} 雫石川の旧河道の変遷については佐嶋氏の論考がある。これによれば河道は過去何回かの変遷を繰り返し本遺跡南辺直下を流れたものを第三期河道(記述上の区分)としている(第1図)。北は国道46号線が館坂橋から大館町方面へ横断し前九年Ⅰ遺跡と境している。西側は客貨車区と東北本線によって段丘が分断され天昌寺の台地へ続いている。東は緩斜地となり雑木林及び宅地として利用されている。したがって本遺跡は西に緩斜する傾斜面が一担平坦地化する部



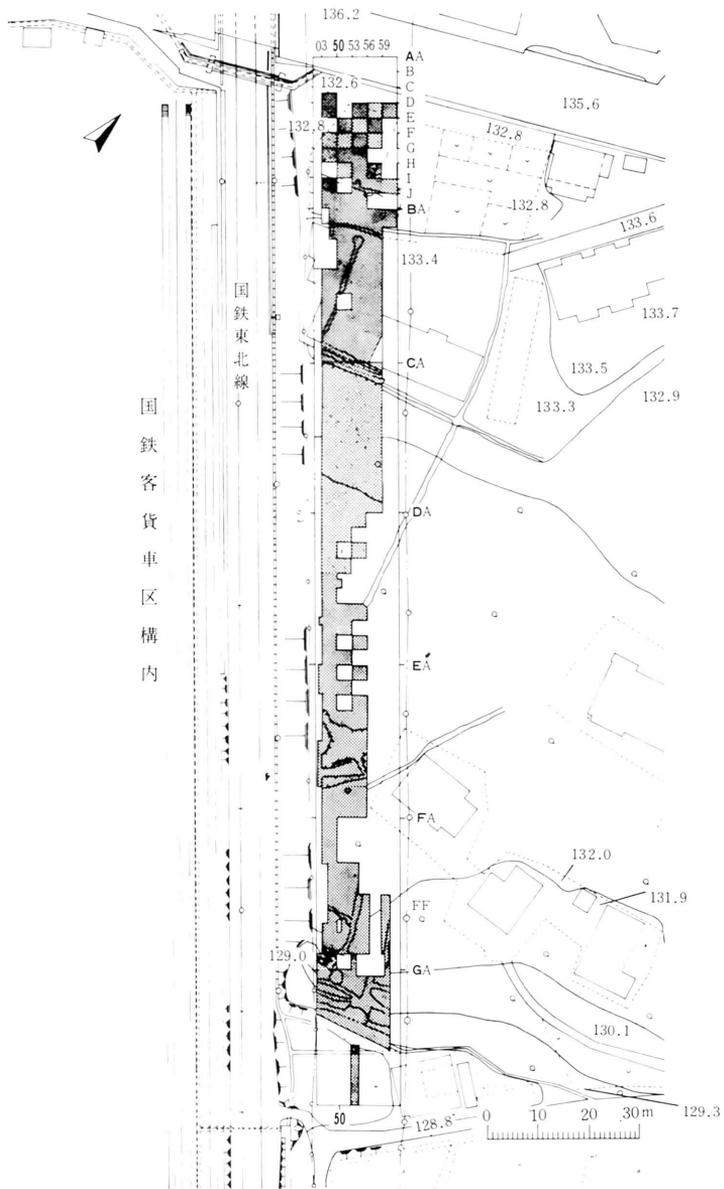
第1図 雫石川の旧河道

分であり、南面は土塁を境に南に急傾斜し湿地帯へなだれる範囲である。

また周辺の遺跡分布をみると北に前九年Ⅰ遺跡、前九年Ⅱ遺跡、長畑遺跡と点状に連続し、西方には^{注2)} 姫戸柵擬定地があり、1kmを隔てて縄文時代中期の大集落址である大館町遺跡がある。また北東約1kmに安倍館が、南西方向には太田方八丁遺跡等がある。

2. 調査の方法と経過

本遺跡は、東北新幹線の中心杭を基準とし、東京起点495.260kmを遺跡の基準点としてDA50と呼称した。基準点での方向角はN-40°00'-Wである。調査はDA50の基準点をもとに3×3mのグリッド方式で行ない、遺構の検出がなされた段階で随時拡張していった。遺跡の現況は北を国道46号線が東西に走り、調査範囲内は北側に畑地、建物跡、雑木林などで部分的な掘



第2図 厨川棚擬定地グリッド配置図

乱が随所にみられた。

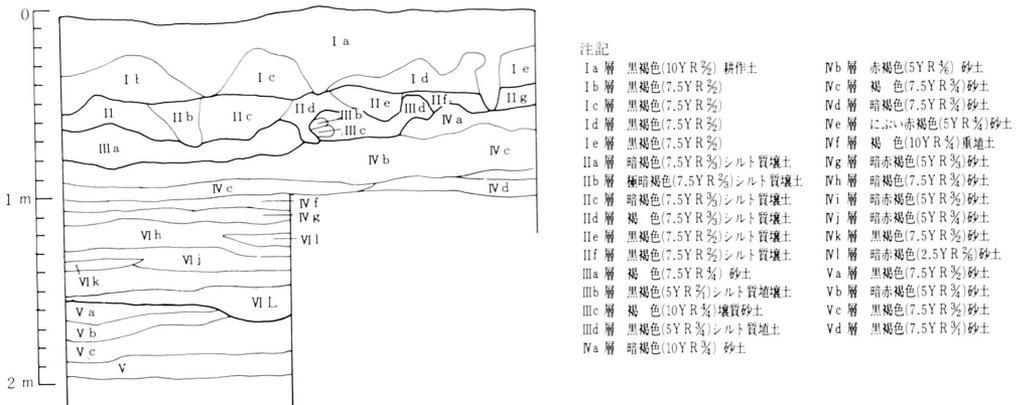
今回の調査は東北新幹線建設予定地としてその範囲が対象とされたが、本遺跡は過去において厨川柵擬定地として従来から唱導されてきた。昭和32年盛岡客貨車区の建設に伴い当時岩手大学教授板橋源氏により緊急発掘調査が行なわれた。その結果①南縁から北に54m隔たって南北巾54mの隍跡の存在を確認、②隍底部から鉄片6点、土師器破片の散在を確認、③隍の深さは現畑地面から1.2~1.8mのものである。④台地南縁に沿い外柵の外に設けられた簡易排水溝を検出、⑤溝跡から北へ6.6m地点の溝に平行して方壙(柱木を掘立た)が直線上に並んで検出、⑥⑤の西端付近に楼櫓を思わせる方壙が検出された。その他に炭化粃粒、鉄滓、古銭、鉄片などの出土遺物があった。調査結果の要約として、遺跡の四至や全貌を究明することは不可能であったとしながらも「厨川柵跡は天昌寺、里館、権現坂を含む地域であったと想定できるようになった」と報告している。

以上の発掘調査成果をもとに本遺跡も当然擬定地の一部として包含される可能性が濃く、したがって今回の調査は以上のことを重視し、その関連遺構の検出にねらいをおき実施したものである。

3. 調査の結果

[1] 遺跡の基本層位 (第3図)

本遺跡は前段で若干触れたごとく、北側A~Cブロックは建造物、及びコンクリートのたたき等によって著しい攪乱を受けていた。また、南側E Fブロックはごみ捨て場として利用され、



第3図 基本層位図

特にFブロックは土墨状の土盛がなされていた。

基本的層位は遺跡北地区（Aブロック）に入れた深掘りによると、Ⅰ層は黒褐色土で耕作土、Ⅱ層は黒褐色ないし褐色で砂土を主体とするもの、Ⅲ層はⅡ層に準ずるが粘土質である。Ⅳ層は褐色土を主体とし砂質土壌、Ⅴ層は黒褐色ないし暗赤褐色を基調としている。しかし本遺跡は南北に長く堆積状況は一様ではない。特にEブロックより南側は攪乱、盛土、流水の影響を受け、またGブロックは流水による砂質土が大量に堆積し、建物の移転による盛土もみられ堆積状況を異にする。

遺構検出面はこのうち、Ⅲ層およびⅣ層を中心に掘り込まれていた。

〔2〕 発見された遺構と遺物

調査の結果発見された遺構は縄文時代の竪穴住居跡1棟、大小の溝状遺構26条及びピット4個である。

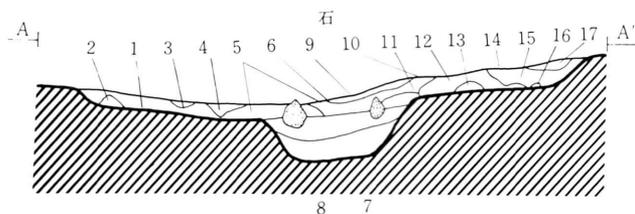
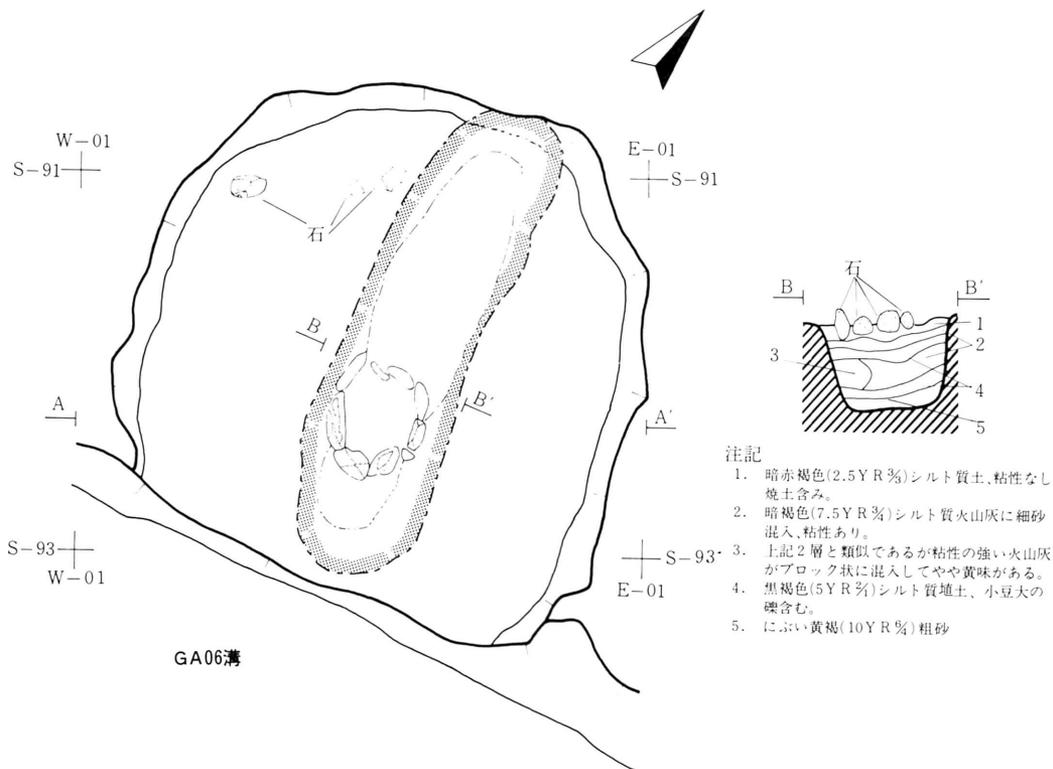
(1) 竪穴住居跡

GA03竪穴住居跡（第4図、図版2）

DA50から南へ90mの段丘崖に検出されたものである。検出面はⅢ層の上面である。住居跡の規模は径3mを測り円形状を呈している。南側約 $\frac{1}{3}$ はGA06溝によって削られているが残存部分での壁高は、北側で7.5cm、東側で13cm、西側は7.5cmを夫々測るものであり壁の傾斜角は大きく極めて緩やかである。住居跡中心部に石囲の炉跡を付設している。炉の構築方法は床面を約50cmほど舟底状に掘りくぼめている。埋土は人工的に粘土質の土壌を埋めこみ、最下層から6層に分層され、最上層は暗赤褐色を呈しシルト質土で粘性がなく、焼土を含んでいる。第2層以下は暗褐色、黒褐色、にぶい黄褐色で上層ほど粘性が強く最下層は粗砂となっている。第1層の上面で川原石を用い炉石としていた。石囲炉はほぼ円形で長径30cm、短径25cmを測る。柱穴の検出はできなかった。また床面の断面では東に高く、西にやや低く、全体に中央部がややへこむ形状を呈し、貼床は認められない。一方住居跡北壁付近より南方向に巾60cm、長さ2.5m、深さ10～20cmの長方形の掘込みが伸びているが、石囲炉はこの掘り込みが埋った後に築かれている。埋土は暗褐色ないし黒褐色を呈しシルト質埴土、下層はシルト質壤土が基本となっている。床面直上にブロック状に木炭の堆積が認められた。住居跡内出土遺物は縄文土器2片が出土しているが細片であり時期決定の資料価値に乏しい。

(2) 溝状遺構

大小26条に及ぶ溝状遺構を検出したが、これら溝群は概ね北側と南側に検出され中央部は稀薄であった。溝はいずれも小規模であるが東西方向に走るものについては調査区域外に伸びるものが多くその全貌を検出、確認することが出来なかった。また溝の検出面は第Ⅲ層の上面、



- 注記
- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 暗褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)シルト質埴土 | 9. 黒褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)シルト質壤土 |
| 2. 褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)シルト質埴土 | 10. 黒褐色(10YR $\frac{3}{4}$)シルト質埴土 |
| 3. 黒色(7.5YR1.7/1)シルト質埴土 | 11. 黒褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)シルト質壤土 |
| 4. 黒色(7.5YR1.7/1)シルト質埴土 | 12. 暗褐色(10YR $\frac{3}{4}$)シルト質壤土 |
| 5. 黒褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)シルト質壤土 | 13. 黒褐色(10YR $\frac{3}{4}$)シルト質壤土 |
| 6. 黒褐色(10YR $\frac{3}{4}$)シルト質埴土 | 14. 黒褐色(10YR $\frac{3}{4}$)壤土 |
| 7. 暗赤褐色(2.5YR $\frac{3}{4}$)シルト質土 | 15. 暗褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)シルト質壤土 |
| 8. 暗褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)シルト質火山灰 | 16. 黒色(Hue N1.5/0)木炭 |
| | 17. 黒褐色(10YR $\frac{3}{4}$)壤土 |

第4図 GA03竪穴住居跡平断面図

褐色土中である。以下調査区北側のAブロックから順に南端Gブロックまでに検出された溝類についてその形状、規模等を記述する。なお、これら小溝群はそのほとんどに伴出遺物あるいは時期、性格を証明するものがなく、これらについては不明といわざるをえない。

CA03大溝 (第5図)

DA50から北へ約6mの地点で本溝の南縁部を検出した。溝は上面で約18m、底部の巾は南側が底部へ緩斜し判然としないが推測で約16m内外を測るものと思われる。溝の深さは1~1.1mで全長は調査区域外に伸びているため不明である。溝の断面はほぼ逆台形状を呈し、層群は3層に大きく分層されるが各層群は更に細分され全体で80に分層される。第Ⅰ層群は黒褐色シルト質植土、第Ⅱ層群は黒色シルト質植壤土(粘土も若干混入する)第Ⅲ層群は黒褐色土で重植土に近いものである。特にⅡ・Ⅲ層群は粘性が強く植物の腐蝕根が多く含まれている。溝断面の観察から人工的な掘り込みは認められず流水等の作用で、粘土、砂が互層に堆積し、しだいに低い溝状の地形が形成されたものと考えられる。

〈出土遺物〉(図版6-16) 鉄製品2個が出土している。出土層位は埋土第Ⅲ層の最下層で泥質の褐灰色土中である。大溝の底部にトレンチを入れ土層観察した結果第Ⅲ層以下は砂層となっていることを確認した。したがって遺物はこの砂層と褐灰色土中の境界面で検出面から約1mの地点と考えられる。鉄製品は菱形の鉄板を2枚ほぼ直角に交叉させ、先端を直角に折り曲げ4本の爪状突起としたものである。2枚の鉄板は中心部を鋏でとめている。爪の長さは2cm強を測るもので先端を鋭く尖らせているが腐蝕が目立つ、鉄板の厚さは0.5cm内外で、爪部分を除いた長さは凡そ6cmを測るものである。また他の1点は上部だけを残し他を欠損している。残存長の一辺は4.5cmを測る。

以上から本溝は人工によるものではなく、低湿地にあった溝状の自然地形と考えたい。

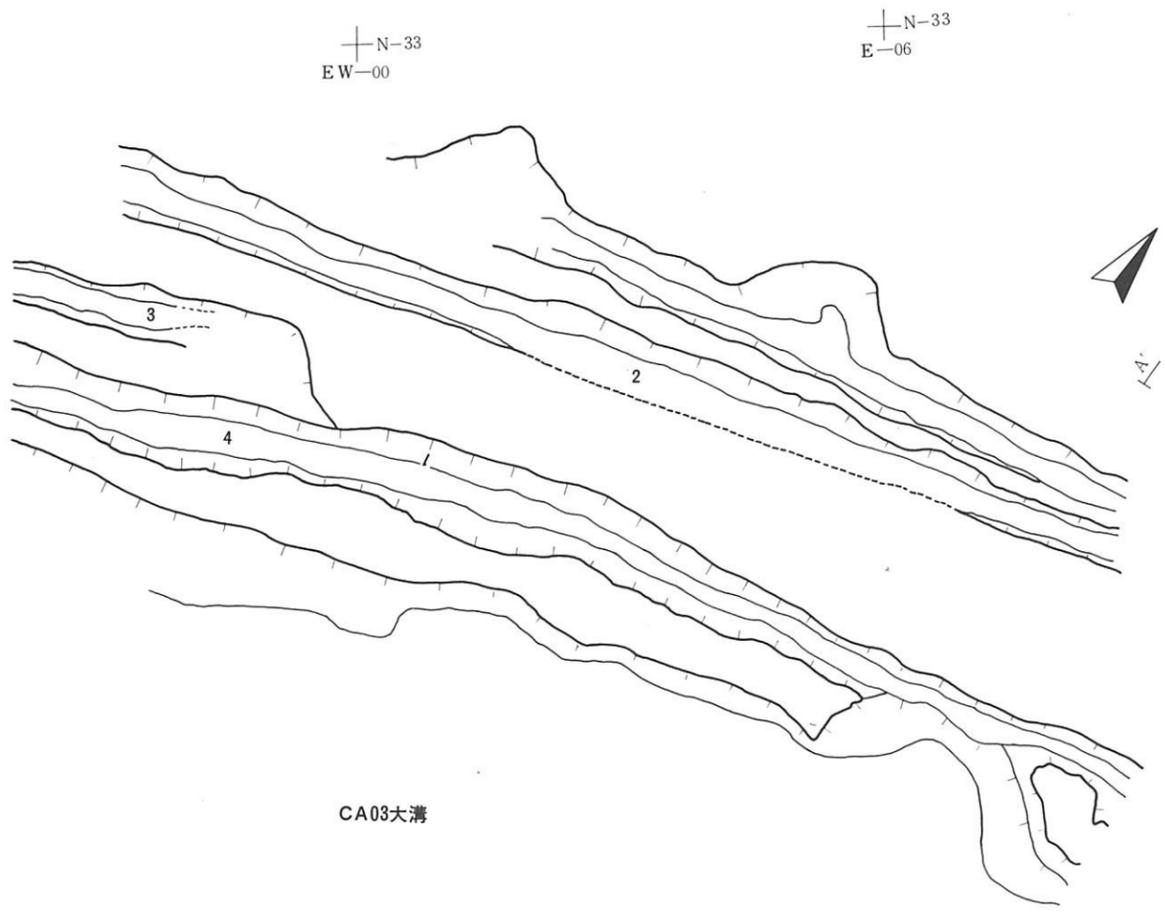
AH03溝 (第6図) DA50から北63mの地点で検出された東西方向に伸びる溝である。上面での巾約80cm、底部巾30cm、深さ約10cm内外で全長約15mを計測する。本溝は中央付近で3個の小型不定形ピットと切り合っている。

BA03溝 (第7図) AH03溝から南へ約6mの地点で検出された。AH03溝とほぼ平行するものである。規模は上面で約80cm、底部巾約20cm、深さは10cm前後である。

BB53溝 (第7図) BA03溝に隣接しほぼ平行して東西に走る。規模は上面約80cm、底部巾50cm、深さ約5cmを測り極端に浅い。全長は12.5mを測る。なお先端は円形状を呈している。

BI03溝 (第7図) BB03溝の南端から南に1.5m隔てて本溝が前者の延長状を呈して検出された。規模は上面での巾約60cm、底部巾30cm、深さは9cm内外で全長約7.2mを測るが、北側の端は攪乱によって一部を消滅するものである。

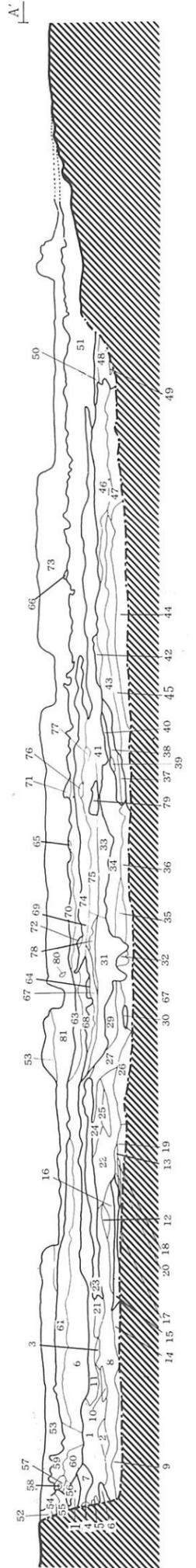
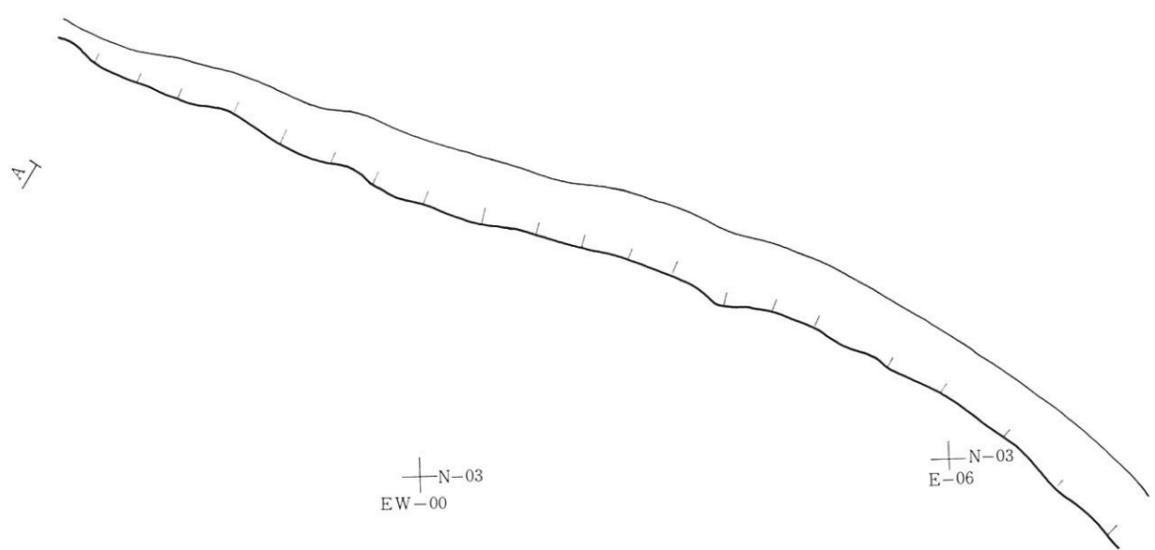
BJ03溝 (1) (第5図) CA03大溝の北側に4条の小溝が大溝の縁辺にはほぼ平行する形



注記

1. 黒褐色(7.5YR $\frac{2}{6}$)	26. 褐灰色(7.5YR $\frac{4}{6}$)	55. 黒褐色(7.5YR $\frac{2}{6}$)
1'. 褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)	27. にぶい褐色(7.5YR $\frac{5}{6}$)	56. 極暗褐色(7.5YR $\frac{2}{6}$)
2. 暗褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)	28. 褐色(10YR $\frac{4}{6}$)	57. 黒褐色(10YR $\frac{2}{6}$)
3. 黒褐色(7.5YR $\frac{2}{6}$)	29. 黒褐色(7.5YR $\frac{2}{6}$)	58. 黒褐色(2.5YR $\frac{3}{4}$)
4. 赤褐色(5YR $\frac{3}{4}$)	30. 褐灰色(5YR $\frac{3}{4}$)	59. 黒褐色(10YR $\frac{2}{6}$)
5. 赤褐色(5YR $\frac{3}{4}$)	31. 黒色(7.5YR $\frac{2}{6}$)	60. 黒褐色(7.5YR $\frac{2}{6}$)
6. 暗褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)	32. にぶい黄褐色(7.5YR $\frac{5}{6}$)	61. 黒色(N1.5/0)
7. 暗褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)	33. 27と同じ	62. 黒褐色(7.5YR $\frac{2}{6}$)
8. 褐色の砂、明黄褐色の粘土、にぶい赤褐色の細砂、粗砂、灰白色の粘土、乳白色の岩石の風化したもの、パミス、黒褐色の細砂砂が不規則に混入	34. 8と同じ	63. 黒褐色(7.5YR $\frac{2}{6}$)
9. 暗灰黄色(2.5YR $\frac{3}{4}$)	35. 16と同じ	64. 黒褐色(2.5YR $\frac{3}{4}$)
10. 暗褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)	36. 35と同じ	65. 黒褐色(7.5YR $\frac{2}{6}$)
11. 暗褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)	37. 35と同じ	66. 暗褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)
12. 8と同じ	38. 黒味の強い砂	67. 暗褐色(10YR $\frac{2}{6}$)
13. 黒褐色	39. 38と同じ	68. 黒色(7.5YR $\frac{2}{6}$)
14. 褐灰白(7.5YR $\frac{3}{4}$)	40. 黒褐色(7.5YR $\frac{2}{6}$)	69. 黒色(7.5YR $\frac{2}{6}$)
15. 灰褐色(7.5YR $\frac{5}{6}$)	41. 33と同じ	70. 暗褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)
16. にぶい褐色(7.5YR $\frac{5}{6}$)	42. 黒褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)	71. 黒褐色(10YR $\frac{2}{6}$)
17. にぶい褐色(7.5YR $\frac{5}{6}$)	43. 34と同じ	72. 黒褐色(10YR $\frac{2}{6}$)
18. にぶい褐色(7.5YR $\frac{5}{6}$)	44. 褐灰色(7.5YR $\frac{3}{4}$)	73. にぶい黄褐色(10YR $\frac{4}{6}$)
19. 褐灰色(7.5YR $\frac{3}{4}$)	45. にぶい黄褐色(7.5YR $\frac{5}{6}$)	74. 黒色(10YR1.7/1)
20. 8と同じ	46. 黒っぽい砂層	75. 黒色(7.5YR $\frac{2}{6}$)
21. 黒っぽい砂	47. 46と同じ	76. 黒褐色(7.5YR $\frac{2}{6}$)
22. 黒褐色(7.5YR $\frac{2}{6}$)	48. 褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)	77. 黒褐色(10YR $\frac{2}{6}$)
23. 黒褐色(7.5YR $\frac{2}{6}$)	49. にぶい赤褐色(5YR $\frac{3}{4}$)	78. 黒褐色(10YR $\frac{2}{6}$)
24. 褐色(7.5YR $\frac{3}{4}$)	50. 灰黒色の細砂層	79. 暗褐色(10YR $\frac{2}{6}$)
25. 黒褐色(7.5YR $\frac{2}{6}$)	51. にぶい褐色(7.5YR $\frac{5}{6}$)	80. 黒褐色(10YR $\frac{2}{6}$)
	52. 黒褐色(10YR $\frac{2}{6}$)	81. 黒色(5YR 1.7/1)
	53. 黒褐色(7.5YR $\frac{2}{6}$)	
	54. 黒褐色(10YR $\frac{2}{6}$)	

- 1. BJ 03溝(1)
- 2. BJ 03溝(2)
- 3. CA03溝(1)
- 4. CA03溝(2)



第5図 Cブロック溝状遺構断面図

で伸びている。本溝はこれらの溝のうちもっとも北側を走るものである。規模は上面の巾約60cm、底部巾は約20cm、深さは12cm内外で全長9.2mを測り西側で自然消滅する。

BJ03溝 (2) (第5図・図版3) BJ03溝の南側に接する溝で上面は約60cmと前者に類似する。底部巾は約30cm、深さ18cm内外、延長12mを測り、細長く直線状に伸びるものである。

CA03溝 (1) (第5図1) BJ03溝の南約1.2mの地点で前者に平行し直線状に走る溝である。規模は上面で巾約50cm、底部で30cm、深さ10cm内外、全長0.4mで東端部が自然消滅する。本溝は極端に短かい溝となる。

CA03溝 (2) (第5図2) BJ03溝の南約1.2m隔てて東西に走る。上面の巾は約90cm、底部で30cm、深さは20cm内外、全長は約13.6mを測るものである。形状はほぼ直線状を呈するが、中央部付近でわずかに北に張り出す。

ED03溝 (第8図) DA50から南39m地点で溝の北西端を検出した。上面の巾1.5m前後、底部巾は約70cm、深さは30cm内外、延長約4mで東端はEF03溝と合流する。

EF03溝 (1) (第8図) ED03溝の南約2.5mで南西から、北東に走る溝である。上面の巾約1.5m、底部巾0.8m、深さは約60cmとやや深い。延長5.5mを測る。

EF03溝 (2) (第8図) EF03溝の南縁部に接続する樹枝状に伸びる小溝である。上面の巾35cm、底部巾は10cm内外、深さは12cm前後と浅い。全長約3mを測る。

EH03溝 (第8図) EF03溝の南約1mで検出された。上面の巾約1m、底部巾50cm、深さ15cm内外、延長5mを計測した。溝の方向はほぼ東西に走り東端でEG53溝と接する。

EG53溝 (第8図) EF03溝とEH03溝の間にはさまれた溝で上面の巾約70cm、底部巾15cm、深さ40cm内外を測り延長は約4.5mである。

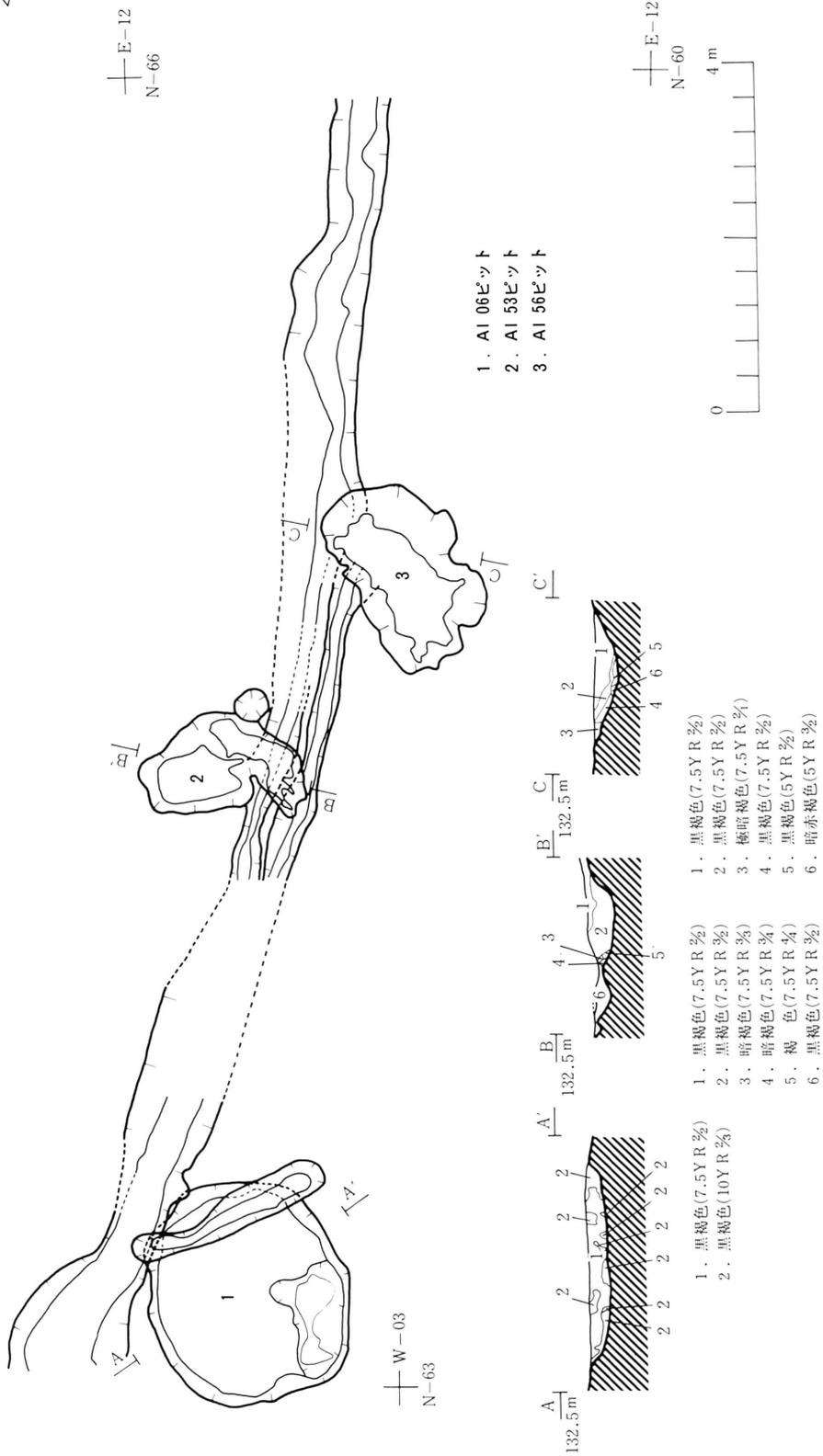
EE53溝 (第8図) ED03溝の東端に接続する形で検出された小形溝で、上面の巾60cm、底部巾約20cm、深さ約30cmを計り、延長1mで東北端は区域外のため全体は把握できない。

FF03溝 (第9図) DA50から南約77mの地点で検出した溝で上面の巾約1.1m、底部巾0.5m、深さ約20cm、全長約5mを測り北西から南東に走る。

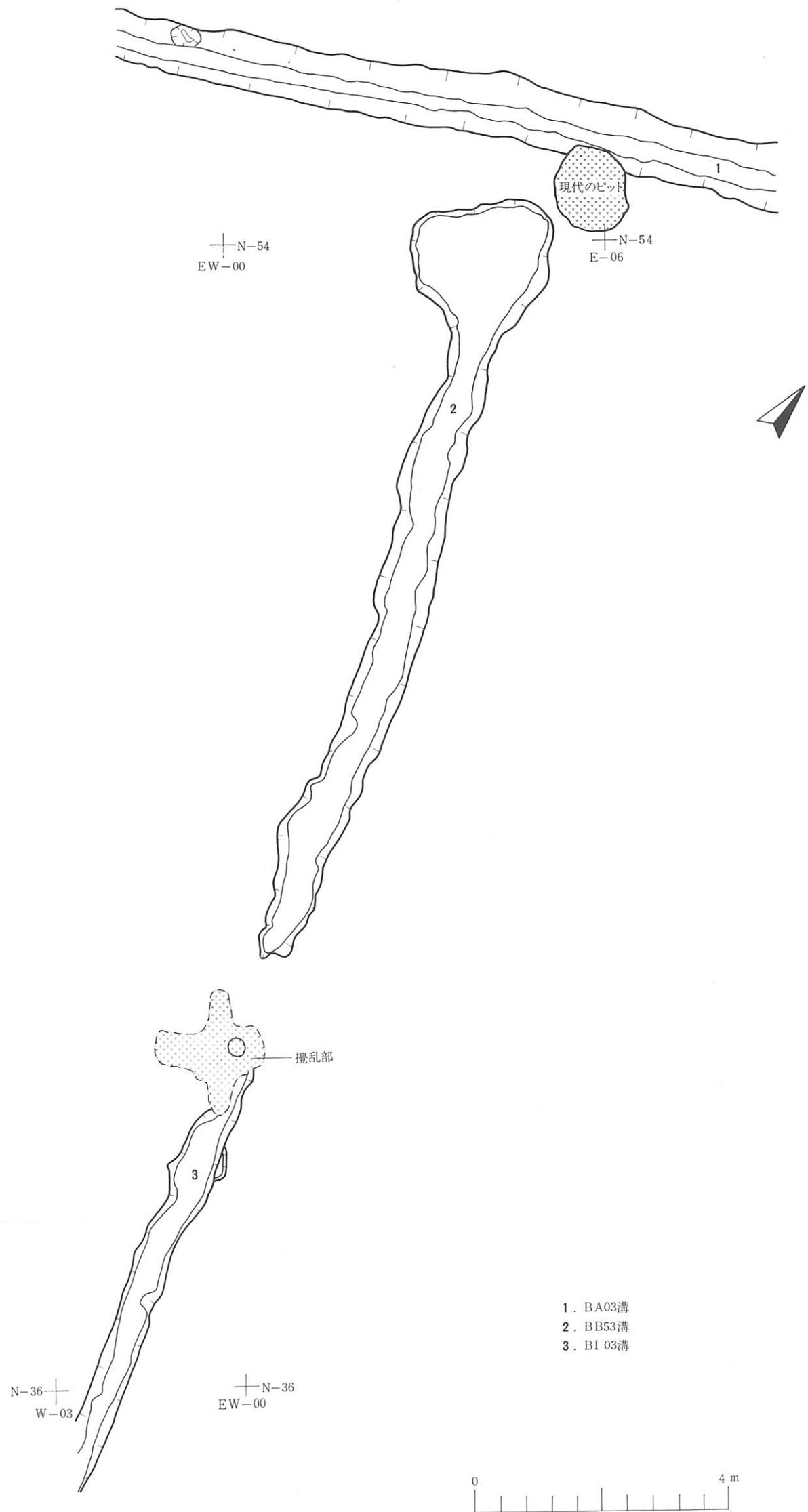
FI03溝 (第9図、図版4) FF03溝から南約8mで検出されたもので、地形的には緩斜面の上部に位置するものである。規模は上面の巾で約1.6m、底部巾約50cm、深さ約40cm、全長約6mを計測する。

FJ03溝 (1) (第9図、図版3) FI03溝の南約1mを隔てて検出された小形溝で上面の巾約50cm、底部巾20cm、深さ11cm前後、全長約5mを計測した。本溝の東端は木根の攪乱により遺構の検出ができなかったが推測では、東側でFI03溝と一体となるものと思われる。

FI50溝 (第9図・図版5) FI50溝はほぼ南北に伸びるものでFF03溝、FI03溝の東端を切っている。これは本溝がFI03溝、FF03溝よりも新しい溝であることをものがる。

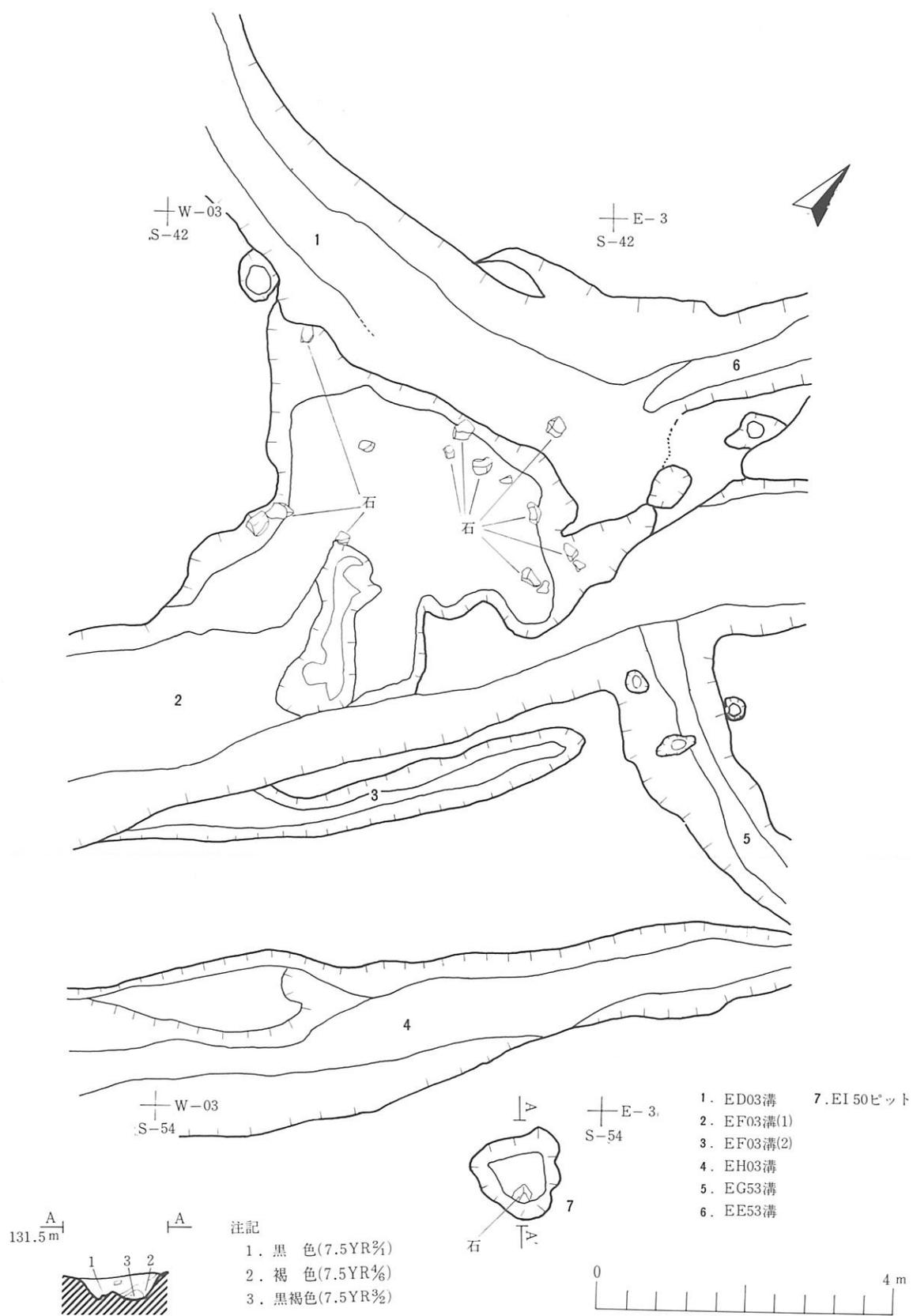


第6図 AH03溝、およびその他のピット平面図

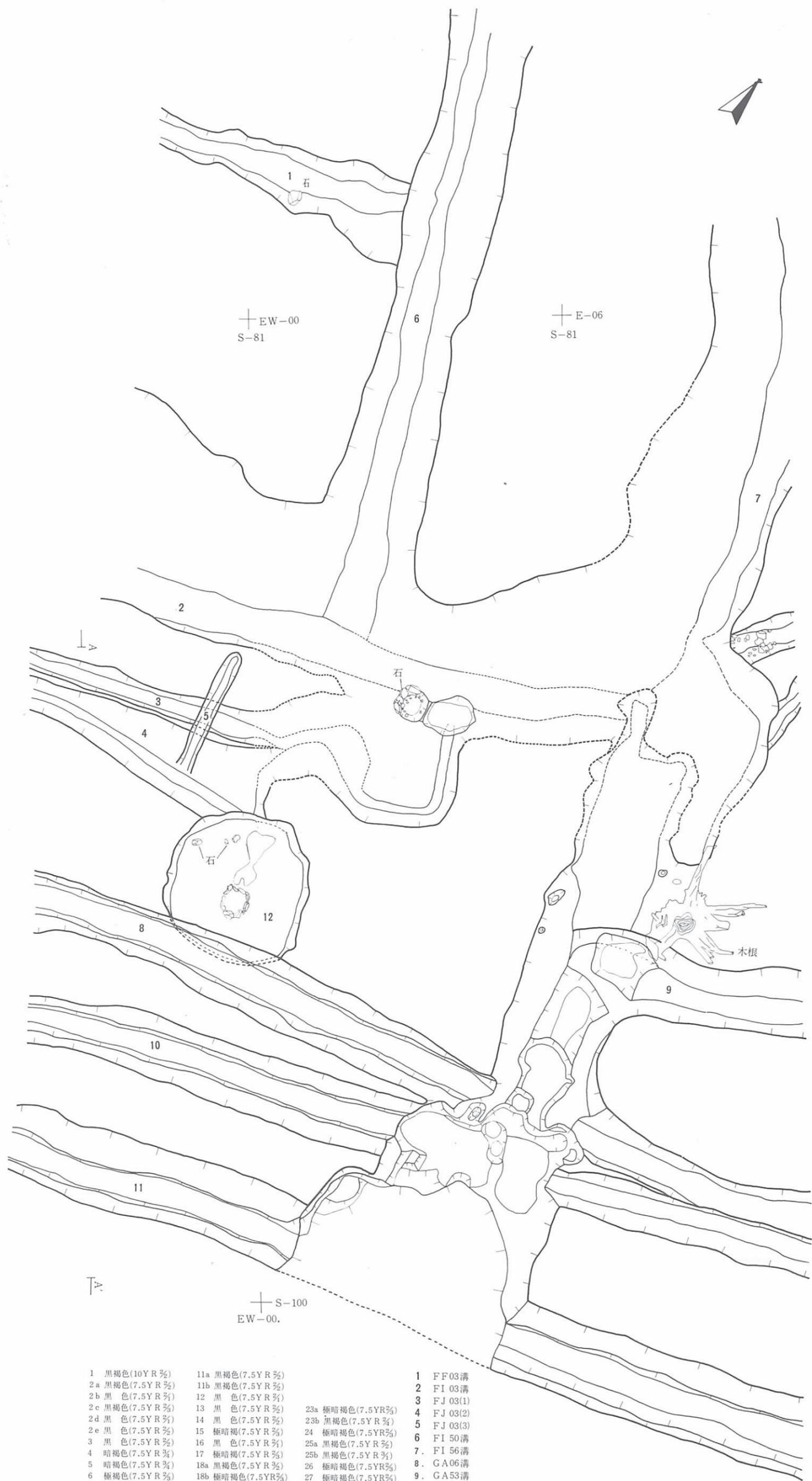


- 1. BA03溝
- 2. BB53溝
- 3. BI 03溝

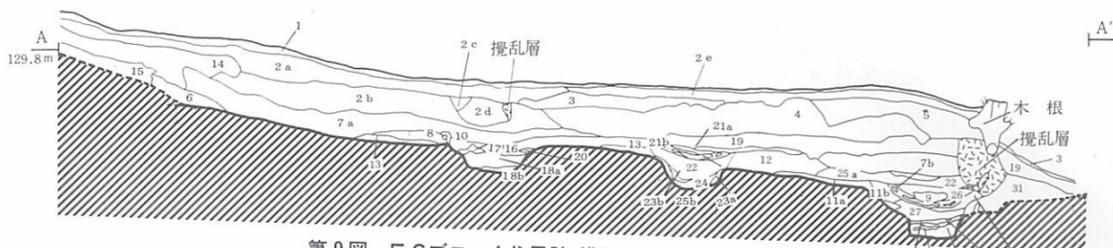
第7図 Bブロック小溝状遺構



第8図 Eブロック小溝状遺構、ピット平断面図



- | | | |
|------------------|--------------------|--------------------|
| 1 黒褐色(10YR 5%) | 11a 黒褐色(7.5YR 5%) | 1 FF03溝 |
| 2a 黒褐色(7.5YR 5%) | 11b 黒褐色(7.5YR 5%) | 2 FI 03溝 |
| 2b 黒色(7.5YR 3%) | 12 黒色(7.5YR 3%) | 3 FJ 03(1) |
| 2c 黒褐色(7.5YR 5%) | 13 黒色(7.5YR 3%) | 4 FJ 03(2) |
| 2d 黒色(7.5YR 3%) | 14 黒色(7.5YR 3%) | 5 FJ 03(3) |
| 2e 黒色(7.5YR 3%) | 15 極暗褐色(7.5YR 3%) | 6 FI 50溝 |
| 3 黒色(7.5YR 3%) | 16 黒色(7.5YR 3%) | 7 FI 56溝 |
| 4 暗褐色(7.5YR 3%) | 17 極暗褐色(7.5YR 3%) | 8 GA06溝 |
| 5 暗褐色(7.5YR 3%) | 18a 黒褐色(7.5YR 5%) | 9 GA53溝 |
| 6 極褐色(7.5YR 5%) | 18b 極暗褐色(7.5YR 3%) | 10. GB06溝 |
| 7a 黒色(7.5YR 3%) | 19 黒褐色(7.5YR 3%) | 11. GC06溝 |
| 7b 黒色(7.5YR 3%) | 20 極暗褐色(7.5YR 3%) | 12. GA03住居跡 |
| 8 黒色(7.5YR 3%) | 21a 黒褐色(7.5YR 5%) | |
| 9 黒色(7.5YR 3%) | 21b 黒褐色(7.5YR 5%) | |
| 10 濃い黄橙(10YR 5%) | 22 黒色(7.5YR 3%) | |
| | | 23a 極暗褐色(7.5YR 3%) |
| | | 23b 黒褐色(7.5YR 5%) |
| | | 24 極暗褐色(7.5YR 3%) |
| | | 25a 黒褐色(7.5YR 5%) |
| | | 25b 黒褐色(7.5YR 5%) |
| | | 26 極暗褐色(7.5YR 3%) |
| | | 27 極暗褐色(7.5YR 3%) |
| | | 28 極暗褐色(7.5YR 3%) |
| | | 29 暗褐色(7.5YR 3%) |
| | | 29 暗褐色(7.5YR 3%) |
| | | 30 極暗褐色(7.5YR 3%) |
| | | 31 黒褐色(7.5YR 5%) |



第9図 F.Gブロック住居跡 遺構遺物等分布断面図

FJ03溝 (2) (第9図・図版3) FJ03溝の南に隣接して検出された。規模は上面で1.2m、底部で20cm、深さ約40cm、全長約4.5mを測るもので、西にせまく、東に巾広の形状を呈している。なお本溝は東側でFJ03溝(1)と合流するものと判断した。

FJ03溝 (3) (第9図・図版3) FJ03溝(1)を検出する中で発見された溝で、FJ03溝(1)と南北方向に直角に交叉する。北端は丸くおさまり南側はFJ03溝の底部付近で消滅している。規模は上面での巾約30cm、底部巾10cm、深さ約10cmで全長2.5mを測る極く小規模の溝である。しかし本溝の切り合いで、FJ03溝(1)を切っていることからこれよりも新しい時期に形成されたものである。

GA53溝 (第9図) DA50から南に83m付近で検出されたほぼ東西に伸びる溝である。規模は上面で巾1.1m、底部で約40cm、深さ33cm、全長4.5mを測る。

FI56溝 (第9図) GA53溝の北に接続するものでほぼ南北方向に走るが東北端は調査区域外に伸び確認はできない。北から南へ3mほど伸びた地点で方向を西に変え約3m西進して再び南進する。いわば屈曲をみせる溝である。規模は上面の巾で約2m、底部で約20cmを計測し東壁が急傾斜で落ち込んでいる。

GA06、GB06、GC06溝 (第9図・図版3) Gブロックの溝の中で比較的性格のわかる溝群である。GA06溝上巾1m、深さ約0.4mで埋土は暗褐色土が大部分を占めるが、最下層に暗褐色の粘質土があることからある時期において水が溜ったものと思われる。

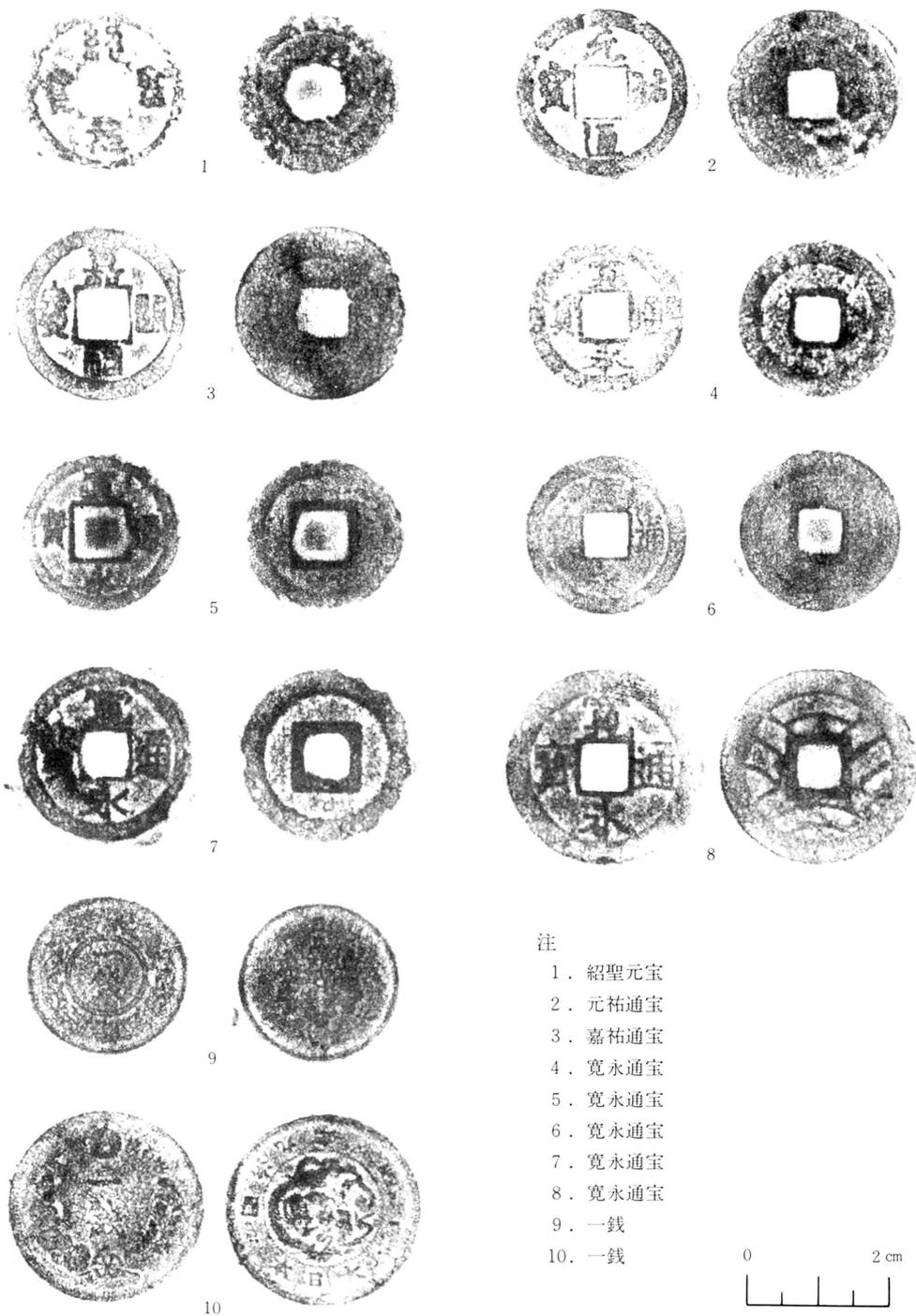
GB06溝の規模はGA06溝とほぼ同規模で、東端でGA06溝と交わりこれに切られている。埋土は自然堆積で上方に黄灰白色の粉状パミスがレンズ状に入る。その下層は底部までほぼ単一の暗褐色土が入り、水の流れた形跡はない。

GC06溝は上巾1.5m、深さ0.6m内外を測り、壁は斜めに掘り込まれ、下方でほぼ垂直に落ち込む、埋土にはGB06溝と同じくレンズ状に粉状パミスが入り自然堆積を示す。下部から底にかけては粘土質と砂質土が互層となっていて水の流れた形跡がみられる。

〈出土遺物〉 (第10図・古銭拓影) 以上の溝状遺構からの出土遺物は、GC06溝の粘質土中から、縄文時代晩期の土器破片と粉状パミスの上面、暗黒色土中より赤褐色の回転糸切り非再調整の内黒環の破片が出土している。

また13点の古銭の出土があったがそのうち溝遺構群と関連するものは次の3点である。このうちEF03(1)溝から「紹聖元宝」1枚が検出面下約20cmの黒褐色土から発見されている。FI56溝の東側底部から寛永通宝1枚と宗銭1枚、これは腐蝕が著しく銭銘文字の判読が困難である。

陶磁器類(図版4)で溝状遺構から伴出したものは3点で、湯呑茶碗の口縁部破片2点、摺鉢の口縁部破片1点の合計3点である。これはいずれも近世のものである。



- 注
1. 紹聖元寶
 2. 元祐通寶
 3. 嘉祐通寶
 4. 寬永通寶
 5. 寬永通寶
 6. 寬永通寶
 7. 寬永通寶
 8. 寬永通寶
 9. 一錢
 10. 一錢



第10圖 古 錢 拓 影 圖

(3) 土塁状遺構 (第11図・図版5)

本遺跡の南側、Fブロック内に東西に走る土塁状遺構を確認した。DA50から南68m地点と更に南へ84m地点の2点を基準としDA50から東へ3.25m寄った位置で南北にトレンチを入れた。その結果、本土塁は地山褐色土の上に人工的に盛土したことが判明した。北に緩く、南に急傾斜をなす凸状の断面形をみせ、地山面から頂上部までの高さ約2.3mを測り、基底部巾は約12mに達するものである。また土層は4層に分層されるが全て黒褐色土を基本としているが若干の色調の変化もみられる。一方、性格及び時期決定の資料として、頂上部直下約1m付近で大形の鉄片1枚とコンクリート製瓦の破片が検出された。この結果、本土塁は最近の宅地造成に伴う土塁と判明するに至った。

(4) ピット (第6図)

ピットは総数で4基検出されAブロックに3基、Eブロックに1基である。

Aブロックの3基は全てAH03溝を切って掘り込まれている。

AI 06ピット AH03溝の西端付近で検出されたもので平面形はほぼ円形である。長径1.3m、短径1.1mを測り、深さは20cm前後である。埋土は単層で黒褐色のシルト質埴土である。比較的粘性をもつ黒褐色土をベースに塊状の黒褐色、砂壤土が不規則に混入する。層位の堆積状況から本ピットは自然堆積に遠く、攪乱を受けたものと思われる。なお埋土内からの遺物はなかった。

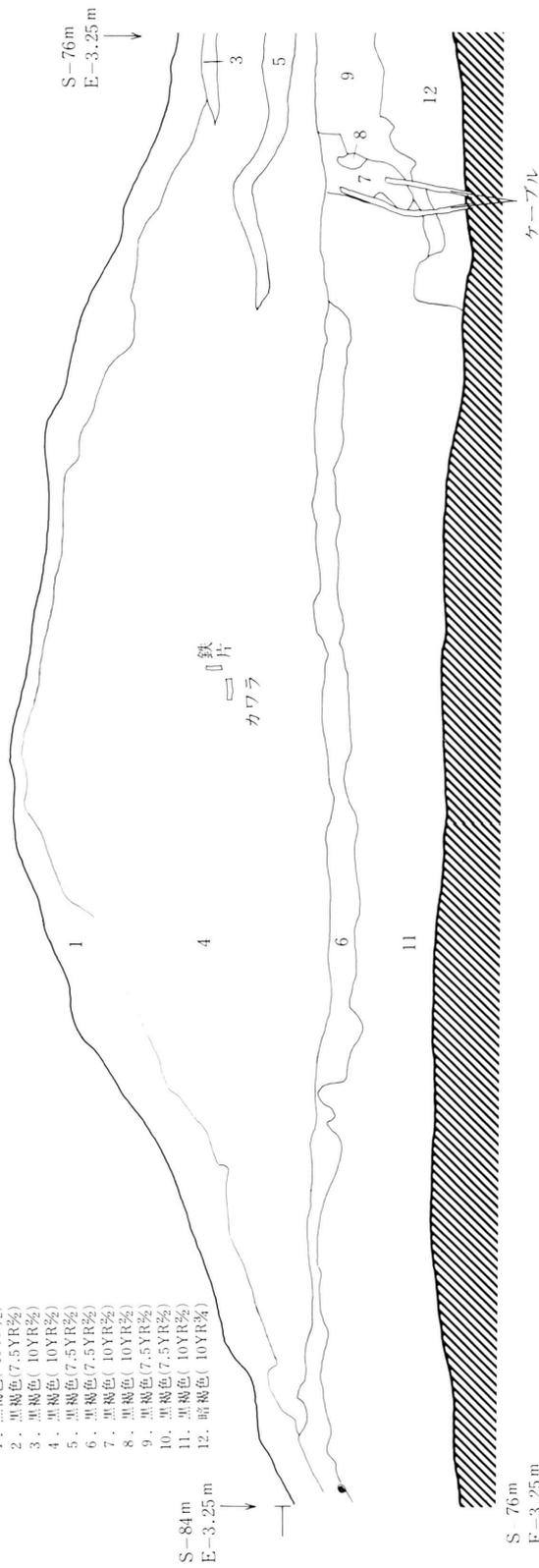
AI 53ピット AI 06ピットから東へ約2mの地点で検出され、不正円形状のピットで長径約1m、短径約0.5m、深さ30cmを測るが壙底部は2分されている。埋土は6層からなるが、全て黒褐色を基本土色とするものである。これらの埋土は自然堆積によるものである。なお本土壙からも遺物の検出はなかった。

AI 56ピット AI 53ピットの東、約1mで検出された平面形が楕円に近い形状を呈するものである。長径1.1m、短径0.7m、深さ30cmを測る皿状の断面形を呈する。埋土は6層からなるが1～5層までは黒褐色で最下層のみ暗赤褐色を呈し砂壤土である。このピットは概ね自然堆積を思わせるもので埋土はレンズ状である。埋土内からの遺物はなかった。

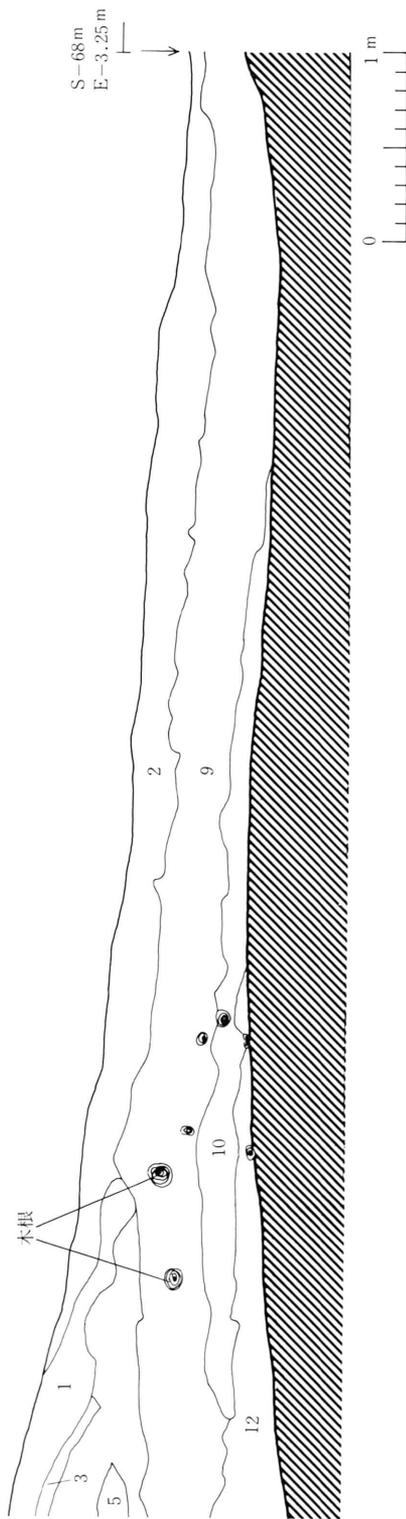
EI 50ピット (第8図) EH03溝の南約0.5mの地点で検出された小形ピットである。平面形は三角形状を呈し、規模は長径1.3m、短径1.25mを測り、深さは25cm内外である。南側壙底部に三角形状の石1個が埋れている。石の一辺は約30cm、高さ8cmほどである。他に伴出遺物はなく、本土壙の性格、時期は不明である。

注記

- 1. 黒褐色(10YR%)
- 2. 黒褐色(7.5YR%)
- 3. 黒褐色(10YR%)
- 4. 黒褐色(10YR%)
- 5. 黒褐色(7.5YR%)
- 6. 黒褐色(7.5YR%)
- 7. 黒褐色(10YR%)
- 8. 黒褐色(10YR%)
- 9. 黒褐色(7.5YR%)
- 10. 黒褐色(7.5YR%)
- 11. 黒褐色(10YR%)
- 12. 暗褐色(10YR%)



S 76m
E-3.25m



第11図 土塁状遺構断面図

4. 考 察

本遺跡の調査は「調査の方法と経過」の項で述べたごとく、前九年の役の古戦場、厨川柵擬定地説を重視し、その擬定地の一部に包含される可能性を求め、先の調査をもとに関連遺構の検出をねらったものである。

厨川柵の擬定地は安倍館説と天昌寺一帯を含む地域の二説があり、現在まで厨川柵と断定するまでに至っていない。特に後者は明治以降唱導されたものであり、過去二回の調査がなされている。その一つは大正13年、菅野義之助氏による天昌寺西方の里館(注4)の調査である。結果は焼土、土器片の出土をみたが決定的な遺構、遺物の発見とはならなかった。そして戦後、昭32年3月と5月に盛岡客貨車区建設に伴う緊急発掘調査(注5)が行なわれた。調査は岩手大学教授坂橋源岩手県史編纂主任田中喜多美の両氏によった。その結果、

1. 史上に著名な厨川柵跡は、天昌寺、里館、権現坂を含む地域であったと想定できるようになった。
2. 外柵の建て方についてもほぼ知ることができた。(注6)
3. 外柵の外側に巾3尺の排水溝があり、外柵の内側に巾30間の障がある。

以上の3点が調査の主な成果として上げられている。

この調査結果を重視し、今回の調査について以下詳述したい。

発見遺構と遺物

今次調査において発見された遺構は竪穴住居跡1棟、大溝1条、小溝25条、小形ピット4基、土壘状遺構等である。

竪穴住居跡は調査区南端の南面する段丘裾の緩斜面に検出されたものである。形状は円形状を呈し、径約3m内外のやや小形のものである。床面中央部に石囲い炉を付設するもので、焼土の痕跡をとどめていた。また柱穴の確認はできなかった。住居跡出土遺物として縄文土器の細片2点を発見したが、時期決定の資料とはなりえなかった。一方、周辺遺跡の中に本遺構と類似するものを求めると、大館町遺跡のA3-1炉跡遺構(注7)が最も酷似するものである。共伴遺物が皆無に近いことから断定は困難であるが、構造、形状において共通性が認められる。そこで本住居跡は縄文中期の一大集落跡である大館町遺跡の分村的関係にあったとも見なうることができる。

大溝遺構、C区で検出された大溝で、上面の巾約18m、底部の巾約16m、深さ約1m内外を測るものである。方向は中軸線に対し北東から南西方向に若干斜めに走るものである。埋土は大きく3層に分層され、第1層は黒褐色シルト質埴土がベースとなっており、第2層は黒色シル

土質埴壤土を基調とする。第3層は黒褐色土で重埴土である。このうち2、3層は粘性が強く、植物の腐蝕根を多く含み、したがって、本層は泥質のどろどろした土層となっている。第3層の下が砂質土壌で、過去において流水の可能性が考えられる。本遺構を昭和32年の権現坂発掘調査と対応してみる時、巾30間の隕との関連性が考えられる。本遺構の位置関係では南北にずれが認められ、想像延長線を想定（但し直線）した場合、両者は結合することはない。次に溝と隕の巾は18m対54mで前者は約1/3となる。また深さでは溝に対し隕は4尺乃至6尺（但し現地表面から）でほぼ共通する。しかし、本遺構は形状埋土の堆積状況などから人工的な溝とはみなしがたく、低湿地にあった自然地形とみるのが妥当と考えられる。ただ、これを厨川柵の一部とみれば自然地形の溝を隕として利用したとする考えも成り立つし、且つまた自然地形の溝であれば、途中屈曲をみせながら隕に接続する可能性もまた考えられないこともない。

一方、埋土内出土遺物についてみると、大溝第3層と地山（砂質土壌）の境界面上から4本の爪状突起をもつ方形状の鉄製品(図版4)が出土している。これは陸奥話記に「河ト柵トノ間、亦隕ヲ掘リ、隕ノ底ニ刀ヲ地上ニ倒立テ、鉄ヲ蒔キ……」^{注8)}の叙述に思い当たる。爪の長さは現存長で2cmを測るものから防戦上の「鉄ヲ蒔キ」の鉄に比定されるものでなかろうか。反面、当時の鉄製品が今日までその原型を保持できるかどうかについて落合Ⅱ遺跡出土の鉄鏃^{注9)}の例がある。両者は埋土条件において極めて類似するものであり、時期的にもそう隔りのないものであることから、泥質土壌の中では腐蝕の進行が鈍化するものではなかろうか。いずれにしろ、これを「マキビシ」とみるか否かについては即断できない。

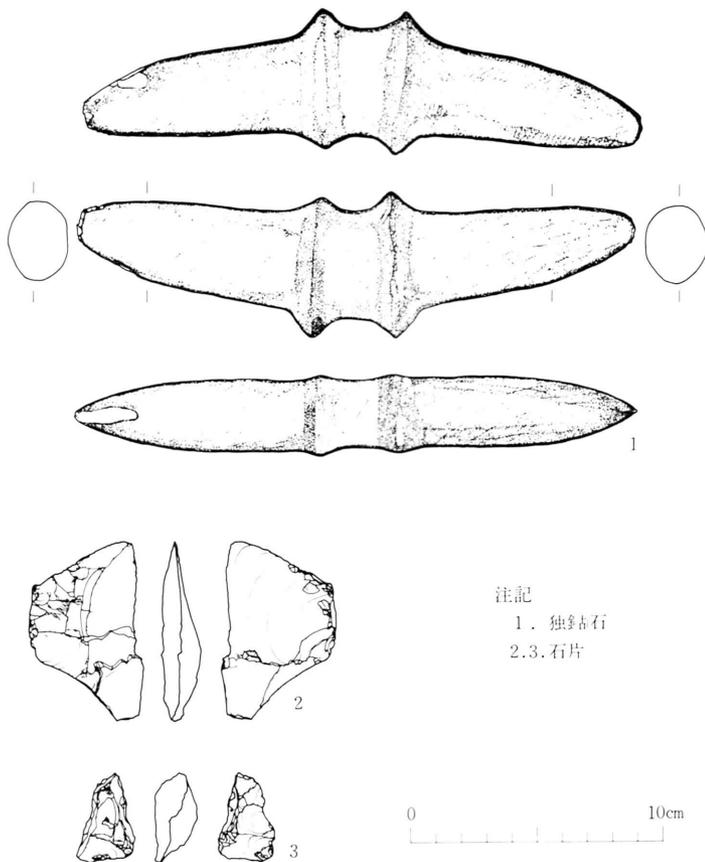
小溝状遺構については時期、性格など明瞭なものではなく、わずかに南側緩斜面に検出されたGA06溝がGA03竪穴住居跡の南側を切っていることから両者の新旧関係はGA06溝が住居跡より新しいことを証明している。なおG区にほぼ平行して三条の溝遺構が検出されているが他の小溝遺構と比較し、巾、深さともに一段と規模が大きく、人工的な溝としての性格を強めるものである。

土塁状遺構については盛土の中位層から瓦片等の出土があり、現代の遺構として受けとめざるを得ない。また、4基の小ピットは小形、不正形で、且つ伴出遺物がなく時期、性格とも不明である。

その他の出土遺物として、EI 53攪乱土層中から出土した独銛石^{注10)}（輝石安山岩）がある。これはGA03住居跡と関連する遺物であろうと思われる。また若干のチップも出土している。また、攪乱土中より土師器内黒環1点を出土している。

今回の調査で多くの古銭の出土例をみたが、それらを大別すると、宋銭、寛永通宝、新貨幣、不明の4種となり、このうち最古のものは嘉祐通宝で（1056～1063）に鑄造した宋銭である。次いで紹聖元宝（1094～1097）の宋銭がEF 03溝(1)の検出面下20cmの砂土と黒褐色の攪乱土中で

発見されている。第3は熙寧元宝（1068）がFCグリッドの表土攪乱土中から2枚出土した。第4は元祐通宝（1093）がEE56グリッドの表土中から採取されている。以上4枚が1050年代から1090年代に鑄造されたものである。そこで前九年の役とのかかわりから、出土古銭をみると、1056年源頼義に安倍頼時追討の宣旨が下され、翌57年頼義、安倍頼時を誅し、その子貞任、宗任がこれに抗戦する。1062年に至り頼義は出羽の清原武則の援けを得、安倍貞任、宗任を衣川、鳥海、厨川柵に破っている。ここで古銭の鑄造年代と前九年の役を対比すると、年代的には符合することになる。しかし、宋銭の鑄造と日本への移入そして流通の間にどれほどの時間的差があったかはわからないが少なくともこの前後に陸奥国にも流通したものであれば厨川柵との関連性はないとは言いきれない。なお他の古銭は近世の寛永通宝、明治、大正期のものであった。



5. まとめ

盛岡客貨車区建設に伴う発掘調査の成果をうけて、厨川柵擬定地の一部を成す遺構、遺物の検出に努めたが結果的にそれを確証できるまでの好資料を得ることができなかった。

1. 南側緩斜面の裾で縄文時代の円形竪穴住居跡の遺構を発見した。
2. 北側において巾約18m、深さ1mの大溝遺構を検出し、且つ溝底面において「マキビシ」と思われる鉄製品1個を検出した。
3. 宋銭5枚を発見し、内、嘉祐通宝は地山直上でまた紹聖元宝はEF03溝(1)の検出面下20cmで発見できた。
4. 小溝状遺構25条を検出したがいずれも性格、年代等は不明である。
5. 縄文時代遺構にかかわる遺物として石器（独鈷石）チップ若干を出土した。
6. 攪乱土中から土師器の内黒坏1点が発見された。

以上から、本遺跡は縄文時代及び平安時代にまたがる遺跡であることが判明したが、厨川柵との関連は決定的資料が得られず推測の域にとどまった。なお今回の調査は広大な厨川柵擬定地からみる時ごく狭少な範囲の調査におわり十分な成果を上げることができなかった。

- 注1 岩手史学研究「北上川の蛇行と雫石川の影響」佐嶋興四右衛門 No.52
岩手史学研究「厨川柵をめぐる堀・川」佐嶋興四右衛門 No.54
- 注2. 4 奥羽史談「厨川柵」菅野義之助、及川大溪補訂 1925
- 注3. 5. 6 岩手大学学芸学部研究年報「厨川柵擬定地盛岡市権現坂発掘調査概報」板橋 源 1958
- 注7 盛岡市「大館町遺跡」岩手大学考古学研究会 1976
- 注8 盛岡市「盛岡市史第二分冊」
- 注9 岩手県教育委員会「東北新幹線発掘調査略報」 1974
- 注10 北上市史第一巻「相去町平林遺跡」 1968

参考文献

- 岩手県史 第1巻（上代・古代編） 岩手県 1960
- 北上市史 第1巻（原始編） 北上市 1968
- 水沢市史 第1巻（原始・古代） 水沢市 1974
- 大船渡市史 第1巻（地質考古編） 大船渡市 1979
- 盛岡市史 （第2分冊）
- 盛岡市通史 盛岡市 1970
- 歴史学研究会「日本史年表」 岩波書店 1977

前九^{せん}年^くI^{ねん}遺跡

遺跡記号：ZK I

所在地：盛岡市前九年二丁目18—22他

調査期間：昭和51年4月23日～6月3日

調査対象面積：5150m²

平面実測基準点：東京起点495.520km (IA50)

基準高：海拔136.00m

1. 遺跡の位置と環境 (第Ⅵ図P 350、第Ⅶ図P 351)

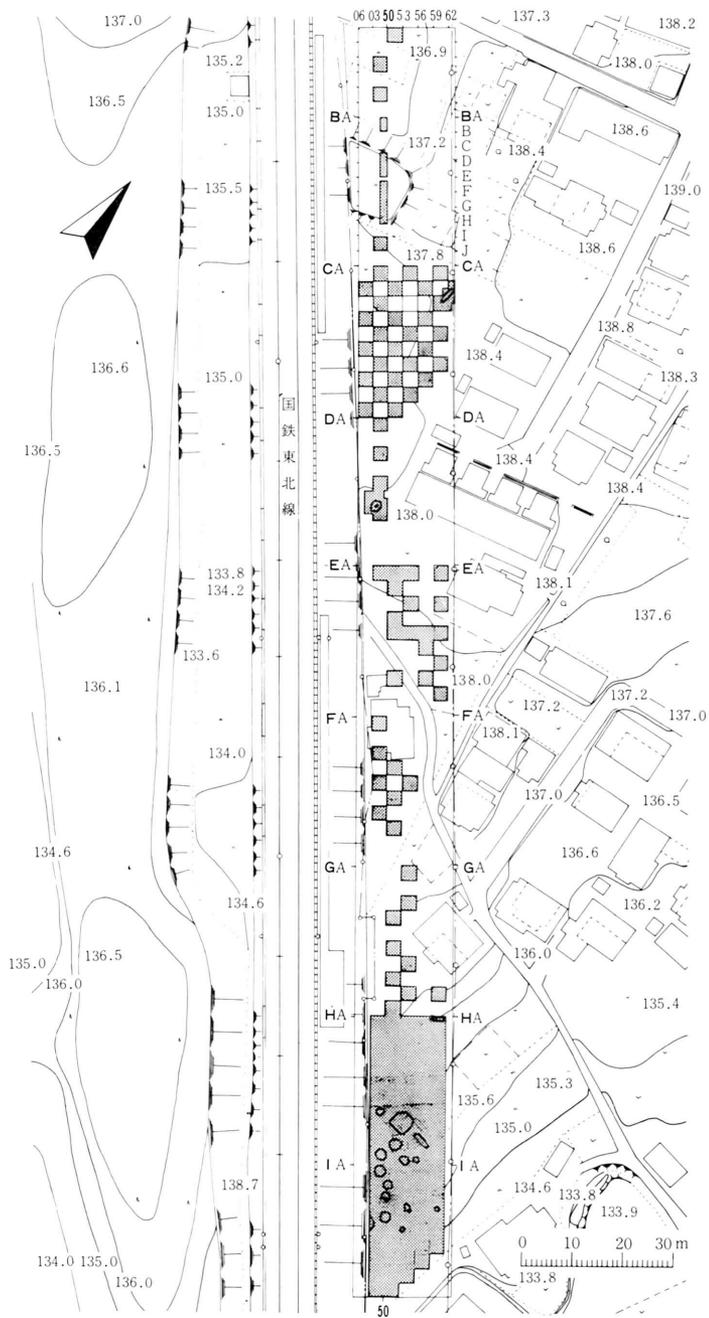
前九年Ⅰ遺跡は、盛岡市前九年2丁目18-22に所在し、国鉄盛岡駅より北約2kmの本線東側に位置する。標高は135m～138m測り、雫石川による河岸段丘面との比高は約10m内外である。

遺跡の立地形は、奥羽脊梁山地からなだれる丘陵の端に広がる段丘上に位置するもので、この段丘は高位、中位、低位の段丘からなる。本遺跡はこのうちの中位段丘（高松段丘）上にあるものである。この段丘面を侵蝕しながら小河川が南流し、木賊川、諸葛川などによる開折がすすみ、侵蝕作用に伴う小起伏が発達している。本遺跡はこの小起伏の南東緩斜面に占地したものである。

次に本遺跡の周辺には多くの周知された遺跡があるが、他に未発見のものも未だ残されているようである。ここでは、周知遺跡の中で調査された時期、性格等の一応明らかにされたものについて若干触れてみたい。本遺跡を中心に厨川柵擬定地、前九年Ⅱ遺跡、長畑遺跡などがあり、いずれも東北新幹線工事に伴う緊急発掘調査の対象遺跡である。また、北東方向に安倍館、西方に大新遺跡、大館町遺跡、小屋塚遺跡等がある。このうち大館町遺跡は縄文時代の一大集落跡として若干の遺構と多くの遺物を出土している。厨川柵擬定地については明治以来二説が唱導され、一つは安倍館をもって、擬定地とし、他の一つは天昌寺を中心とするもので、里館、天昌寺、権現坂一帯を指すが、その四至は明確にされていなかった。しかし、昭和32年の盛岡客貨車区建設に伴う緊急発掘調査が元岩手大学教授坂橋源氏^{注1)}によって隍跡、柵木の柱穴及び方壙を発見し、天昌寺付近一帯を含む地域が有力視されるに至った。安倍館は中世の居館とされるも未だ厨川柵擬定地として残る。以上、二、三の遺跡について略述したが、近年宅地化やその他の開発の進行に伴い、現状保存が極めて困難とされるに至っている。

2. 調査の方法と経過 (第1図)

本遺跡は東北新幹線建設事業に伴って昭和47年に実施した遺跡分布調査の際発見された遺跡である。調査は、東京起点495,520kmを遺跡の基準点として、IA50と呼称した。基準点での方向角はN-40°00'-Wである。調査はIA50の基準点をもとに3×3mのグリッド方式で行ない。遺構の検出段階で随時拡張していった。調査は北側から開始し、順次南に移った。



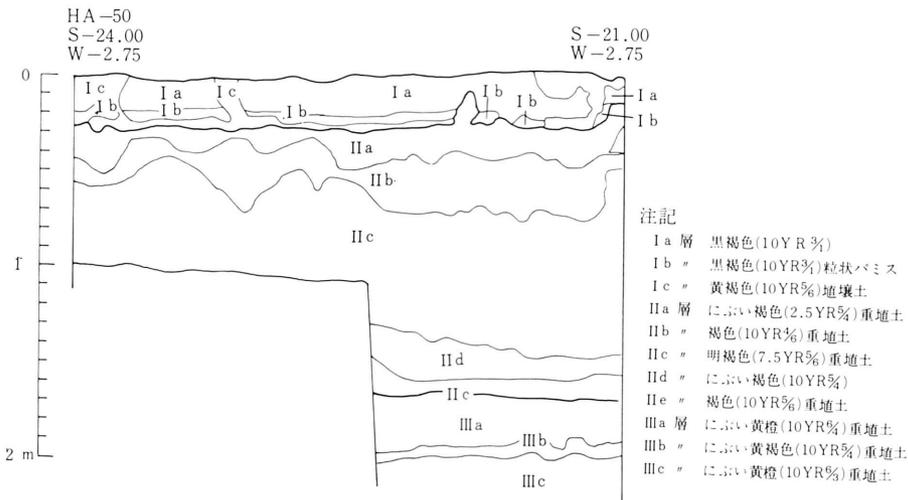
第1図 グリッド配置図

3. 調査の結果

〔1〕 遺跡の基本層位 (第2図)

本遺跡は遺跡中央付近が宅地として利用される以外は概ね自然地形を残していた。北側の一部に東北本線施設の際の盛土がみられ、また南側で表土の削平があり地山面を露出する場所があったが、他は畑地として利用されていた。

基本層位の観察はIA 50から北へ9m～6m、西へ2.75mの地点に深掘りを行なった。地表面下約2mの層位は大きく3層に分層され、夫々をI、II、III層とし、各層はさらに細分されるものである。第I層はa～cの3層に、第II層はa～eの5層、第III層はa～cの3層に分層される。第I層は黒褐色を主体とした耕作土である。土性は粒状パミスとスコリアの混合土で、しまりはあるがもろくくずれやすい。c層は黄褐色土で、しまりがあり固い。第II層は褐色または明褐色の層で重植土を主体とする層相を呈している。第III層はにぶい黄橙かにぶい黄褐色で重植土である。本遺跡における遺構検出面は第II層群のa層、にぶい褐色の重植土面である。



第2図 基本層位図

〔2〕 発見された遺構と遺物

本遺跡の調査は東北本線に並行し、巾15m～20mで長さは南北に250mの範囲で行なわれた。遺跡の北からAブロック、Bブロックとし、南端はIブロックまでである。調査は北側Cブロックから粗掘りを開始し、次いでBブロックの小丘陵状を呈した盛土部分に深掘りを行ない、層位の観察に努めた。この調査区域の地形はBブロックの小丘陵を境に北側Aブロックは急傾斜し畑地へ落ち込み、南側は丘陵裾部からほぼ平坦になりGブロック辺に至る。Gブロックからは徐々に緩斜し、特にI区はやや傾斜角が強まり日通車庫北側の側溝に落ち込んでいる。したがって粗掘りは北の平坦地から順に南へ移動していった。またHブロックの南で表土が削平され遺構の露出が確認された。

調査の結果、遺構は南側H、Iブロックに集中的に検出され、北側は極めて稀薄であった。本遺跡で発見された遺構は、竪穴住居跡1棟、フラスコ状ピット7基、その他のピット6基、V字状土城4基である。また出土遺物は、縄文土器片200片弱、石器、石製品、チップ、植物種子等であった。

(1) 竪穴住居跡

HG50住居跡（第3図、図版1）

本住居跡はIA50から北6m地点で検出されたものである。

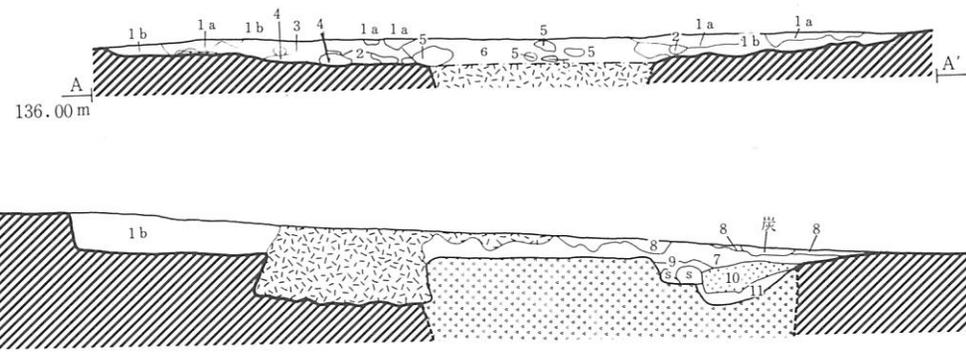
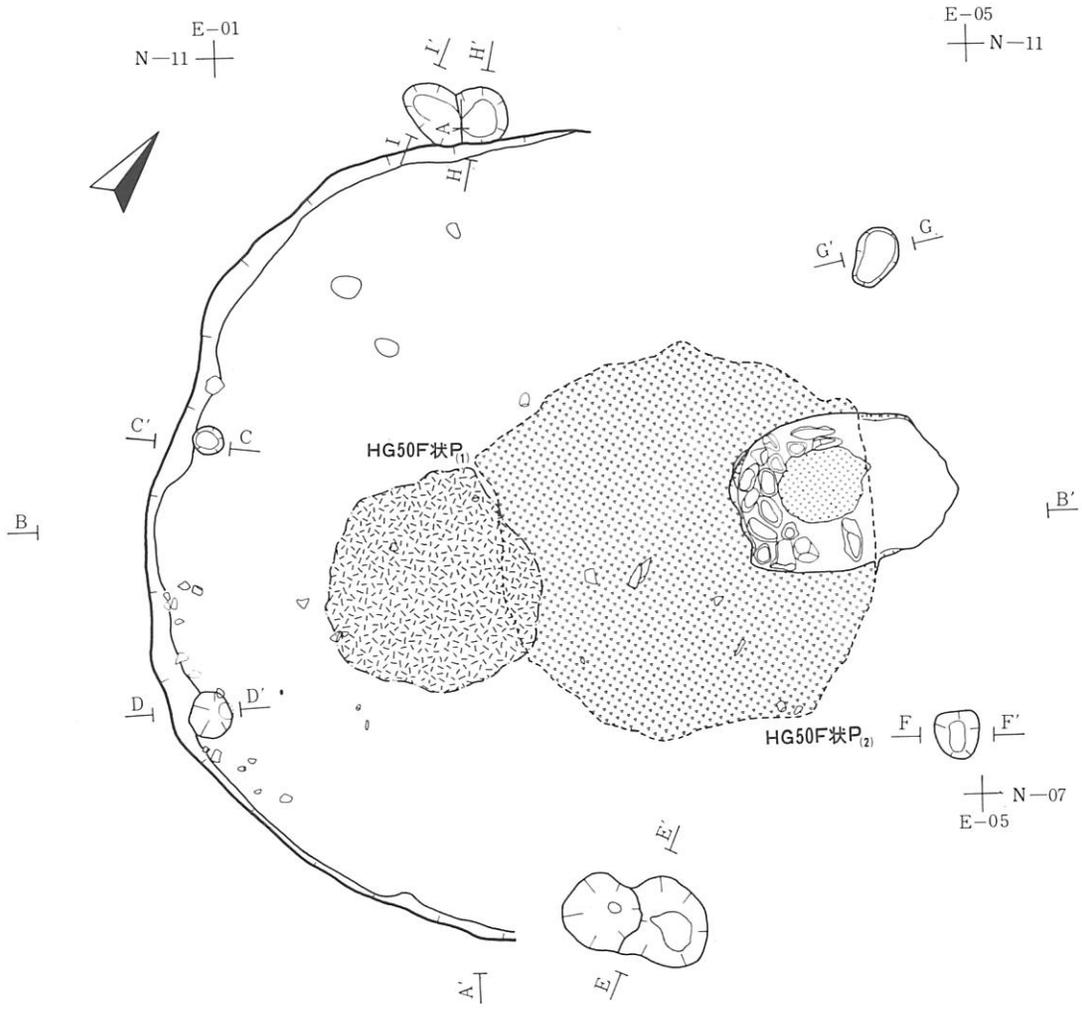
〈遺構の確認〉 H地区の南側、HG03グリッド内のⅡa層上面で確認された。

〈平面形〉 本住居跡は東側の約半分を削割され、壁の確認はできなかった。したがって残存部をもとに計測を試みた。長軸は約5m、短軸は約4.2mほどとなり、楕円形状を呈するものである。また長軸方向はN-45°-Eであり、床面積は約16.6m²である。

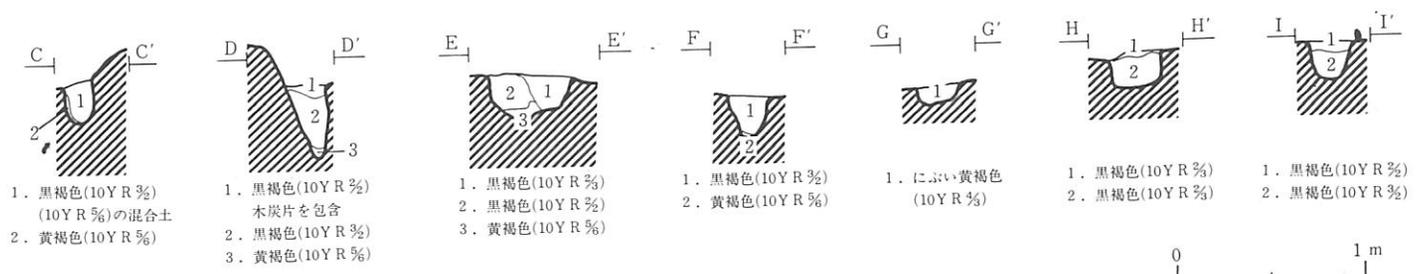
〈埋土〉 埋土は2層からなり、第1層は黒褐色土で全面を覆うことがなく、第2層に分散的にのっている。第2層は床面の全面に堆積し、色調は黒褐色を呈している。また黒褐色土内には炭化物の粒子を混入する。本土層にはブロック状の埋土が多く包含され、褐色、黒色、赤褐色等の色調を呈し、それらの中に炭化粒子を混入するものがある。

〈床面〉 住居跡床面はほぼ平坦であるが、住居内中央部にHG50F状ピットがあり、本ピットは住居跡構築前の遺構で、これが埋没した段階で住居跡が構築されたものである。なお他の小ピットは住居内埋土上面から掘り込んであり、住居跡が廃棄され一応埋没した段階で掘り込まれている。したがって本住居跡の床面は小ピットによって一部攪乱を受けている。なお床面構築に際し貼床などは認められなかった。

〈壁〉 南北線でわずかに壁の確認ができ、壁高約5cmを測り、東西では東壁は削平を受け壁の検出はできないが、西壁は約20cmで壁の立ち上がりは強く垂直に近い。



- 注記
- 1 a 黒褐色(10Y R 2/6)
 - 1 b 黒褐色(10Y R 2/6)炭化物を含む
 - 2 明黄褐色(10Y R 6/6)
 - 3 黒色(10Y R L 7/1)炭化ブロック混入
 - 4 褐色(10Y R 5/6)
 - 5 黒褐色(10Y R 2/6)スコリアを含む
 - 6 黒褐色(10Y R 2/6)
 - 7 暗褐色(10Y R 2/6)炭化粒子含
 - 8 黒色(7.5Y R 2/6)炭化粒子を含む
 - 9 黒色(10Y R 2/6)黄褐色土混入
 - 10 焼土、赤褐色(2.5Y R 2/6)
 - 11 暗赤褐色(5Y R 2/6)



第3図 HG50住居跡平・断面図

〈柱穴〉 住居跡床面及び壁外を含め8個を検出した。このうち4個は壁直下に位置し、他の4個は2個づつ接し他と様相を異にする。これは一方をそえ柱として使用したものと考えられる。柱穴P₁～P₈までの形状は平面形で円形もしくは楕円形状を呈し、底部の中心はやや内側に位置する傾向をみせている。また断面形は逆三角形形状のものとピーカー状の二形態に大別される。P₃、P₄、P₇・P₈のピットはピーカー状を呈し他と異なる。埋土は単層または3層に分層されるものがあり、黒褐色及び黄褐色が主体をなし、P₂の第1層は木炭片を混入していた。埋土の堆積状況は概ね自然堆積の層相を示すものである。

〈炉〉 位置と方向、本住居跡内やや東寄りに付設され、およそ西側 $\frac{1}{2}$ はHG50F状ピットの埋土上に乗っている。炉は楕円形状を呈し、長軸は1.25m、短軸0.8mで方向は住居跡に準じる。

構造、炉は床面(HG50F状ピット埋土上面)を約30cmほど掘りくぼめ、周囲を長径20cm内外の川原石で囲んでいる。

使用痕跡、炉の埋土は3層から構成され、燃烧部は焼土及び赤褐色土で層厚15cmを測る。その下層は暗褐色を呈している。なお焼土範囲は炉の中心部に径50cm大の円形状を呈して広がっていた。

〈出土遺物〉 住居跡内出土の遺物は量的に少なく、土器類、土製品、石器類等、数十点を数える。これらの遺物は床面、柱穴などから出土したものがほとんどである。

土器 土器は全て小破片で21点を数え、口縁部破片、胴部破片類である。これらの破片は全て大木8a式に相当するものである。器形は深鉢型の形状を呈するものとみられるが、小破片のため判然としない。口縁部が平縁となっているものが若干みられる。地文は単筋LRで連弧状文及びその垂下するものがみられる。色調は褐色を呈し、一部カーボンの付着するものなどもみられる。胎土中に砂粒の混入が少なく、焼成は良好で硬い。

石器 (第11図14、図版5・25) 磨製石斧1点、有孔石製品1点の計2点のみである。磨製石斧は北側柱穴ピット6の埋土内から出土したものである。ほぼ完形に近いが刃部を欠損している。全長約12cm、最大巾約5cmを測る。材質は閃緑岩である。平面形は、胴部上半より胴部下半の巾が大きく、頭部は丸味をもち、胴部側縁に明瞭な境をもたない。刃部は欠損により不明。断面形は胴部がわずかにふくらみ、刃部は中心線が刃縁を通るものである。

有孔石製品^(注3) (第11図13、図版5・18) 住居跡床面から出土したものである。形状はほぼ長方形形状を呈しているが、半分を欠損し、穿孔が対になるものかどうか不明である。現存長は長さ5.8cm、巾4.2cm、厚さ1cmで頭部が若干薄くなっている。断面形は台形の稜が幾分丸味を帯びた形で、孔の位置は頭部端より2.5cmに位置し、径は約0.7cmを測る。なお孔の断面形は「つづみ」型を呈し、中央部がせばまっている。材質は石英安山岩である。

(2) 土 壙

本遺跡内で発見された土壙は13基を数えるが、これらは規模、形状において、その様相を異にするものである。ここでは便宜上この土壙類をⅢ類に類別した。

第Ⅰ類 大形で平面形が円形状を呈し、開口部の下方において張り出しをもって「ハ」の字状に底部へ至る。また底部径が開口部径を上まわるものであり径2m内外を測る。

埋土はⅤ層に大別されいづれも層相に共通性がみられる。この類に含まれる土壙を断面の形状からフラスコ状土壙と呼称し、以下F状土壙と表記する。

第Ⅱ類 小形土壙で、平面形は円形状を呈するが、浅形で断面の形状が逆台形状もしくは円筒状をみせる一群の土壙である。本土壙も断面の形状がピーカー状を呈するため、ピーカー状土壙と呼称し、以下B状土壙と表記する。

第Ⅲ類 本類は平面形が棒状もしくは溝状を呈し、長軸と短軸の差の著しいものである。断面形状がV字状を呈することから、V字状土壙と呼称することにする。

以下上記の類別にしたがって各土壙を記述する。

HI 50F 状土壙（第4図、図版2）

本遺構はIA50から北3mの地点で検出されたものである。開口部径約2.2m、頸部径約1.6m、底部径約2.4m、深さ2.15mを測る。断面は頸部の張り出しが壁中央のやや上方で弧状を描いて底部に至る。埋土は5層に区分され、Ⅲ層を除く4層群はレンズ状の層相を呈し、Ⅰ、Ⅱ群とⅣ、Ⅴ層群は向きを逆転するものである。第Ⅰ層群は、黒褐色のシルトをベースに褐色のシルト質埴土が斑点状に混入する。第Ⅱ層群は、黒褐色のシルト質埴土が鍋底状に堆積しており、壁周辺付近は褐色のシルト質埴土が混入している。褐色シルトは、明褐色土にパミス状の礫を混入するもので壁の崩落による堆積と考えられる。第Ⅲ層は、レンズ状の堆積で、褐色シルト質埴土を基調とし、壁周辺より中央部になだれ込んでいる。このなだれ込みの土壌は明褐色のシルト質埴土を基調とし、また一部に明褐色土に若干の黒褐色土を混入した埋土を包含するものである。第Ⅳ層は、黒褐色シルト質埴土が中央部に厚く、周壁に向けて入り込んでいる。また、この層群中にパミス状の礫の混入をみ、明褐色のシルト質埴土が互層をなして周辺になだれ込んでいる。第Ⅴ層は、黒褐色のシルト質埴土とシルト質壤土を主体とし、砂及び礫を若干混入している。一般に湿り気が強く、粘性もわずかに認められる。

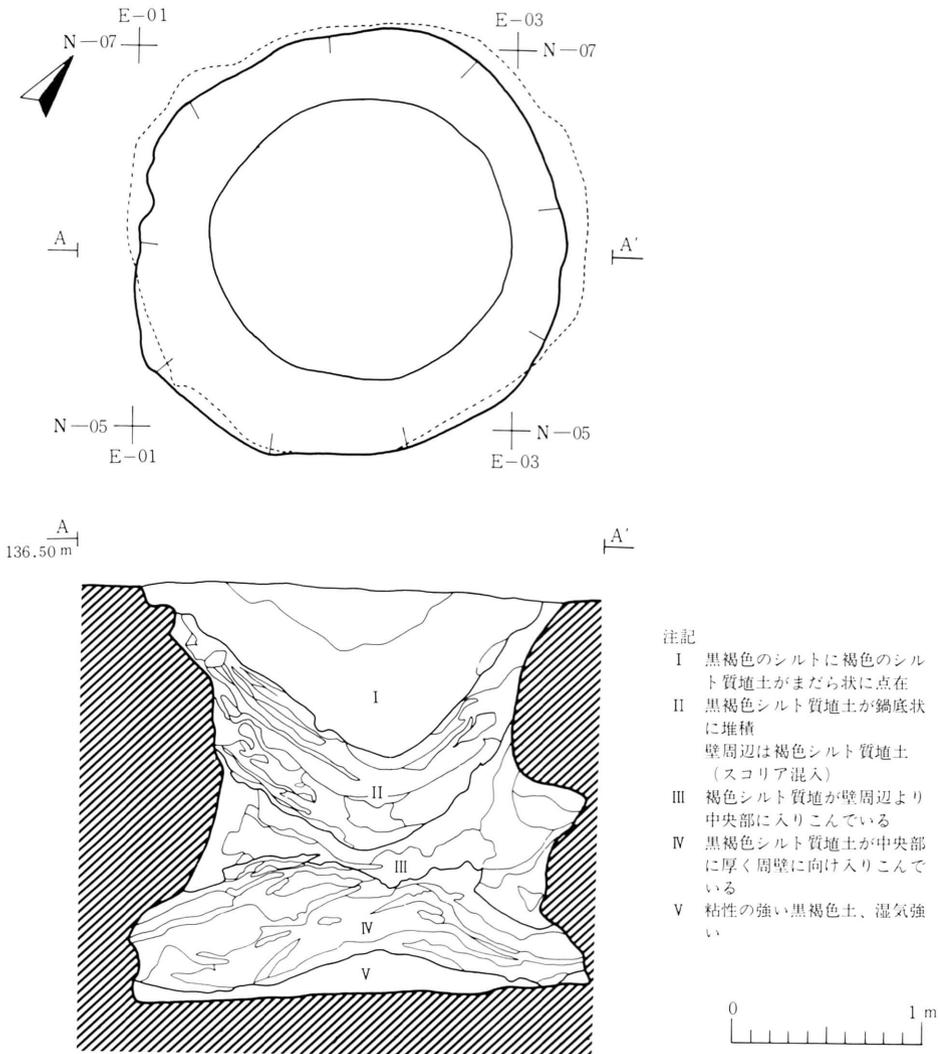
〈出土遺物〉（第9図・8～10）

本遺構出土の遺物は縄文土器片75片、チップ8点である。これらの遺物を層群別で観察すると、第Ⅰ層群で85.3%、以下Ⅱ層群からⅤ層群まではそれぞれ2～3片の出土となり、一方、チップは第Ⅰ層群で1点、第Ⅴ層群で2点、出土層位不明が5点である。以上から、遺物包含層は各層群にわたるが、第Ⅰ層群に集中しているといえる。

土器片の個々については、そのほとんどが不整燃糸文の施文があり、胎土中に多くの繊維を含んでいる。焼成は良好なものから、やや脆弱なものまでまちまちである。これらは縄文前期初頭から未葉にかけての土器片と考えられる。

石器 (第10図1、図版5・32) ポイントの未完成品、尖頭部は未加工のままで終わり、側縁部は第1次剥離面に若干の二次剥離が認められる。また裏面は自然面を残し、わずかに第一次剥離を認める。石材は脂岩である。

石鏃 (10図、図版5・19~23) 住居ピット内出土のものである。基部を欠損し、全体の器



第4図 HI 50F状ピット 平・断面図

形は不明である。表裏とも入念に加工されている。材質は硬質頁岩を用いている。

チップは住居ピット内出土、硬質頁岩の剥片である。

I D06F 状土壌 （第5図 図版4）

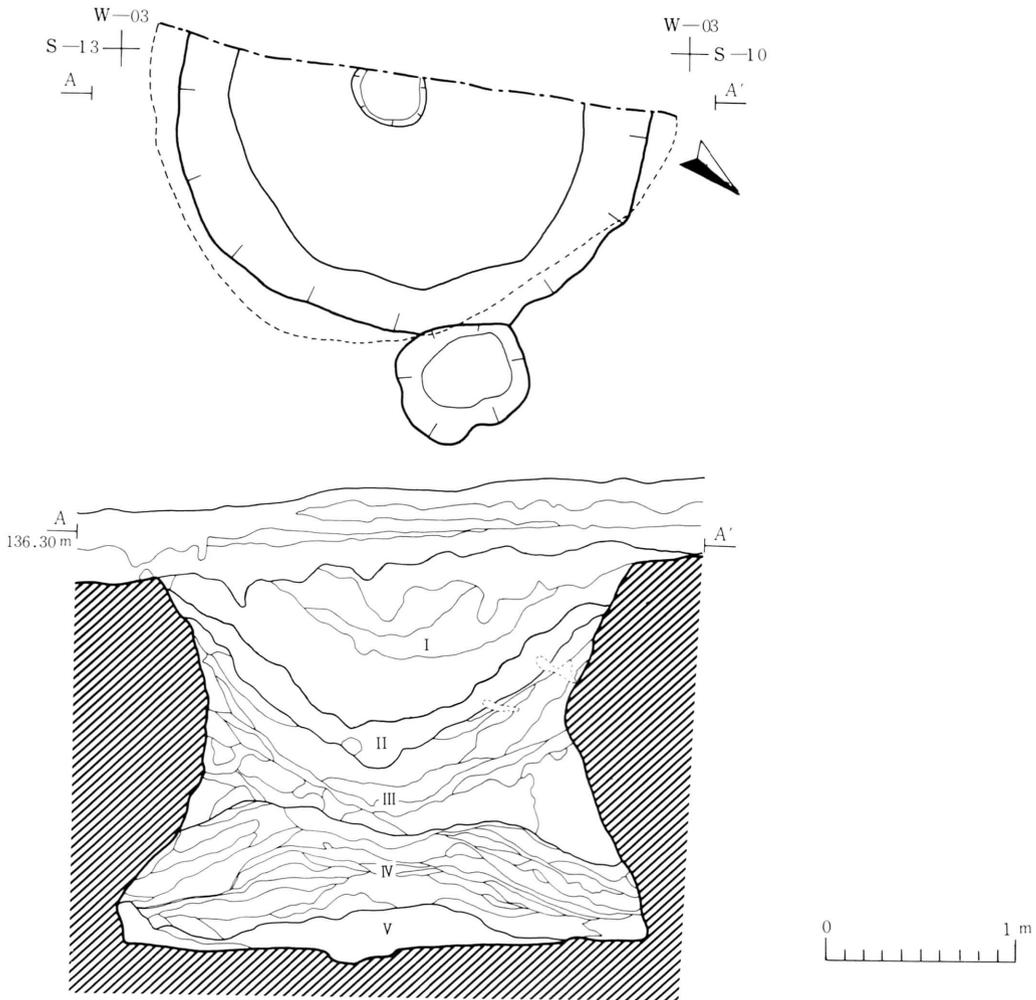
本遺構はIA50から南10mのⅡa層上面で検出されたものである。平面形は円形状を呈するものと思われるが西側の約 $\frac{1}{2}$ は調査区域外のため調査はできなかった。開口部径2.5m、頸部径1.9m、底部径2.8mを計測する。また壙底部の中央に小穴を有し、規模は上端径約35cm、下端径約30cm、深さ8cmである。断面の形状はフラスコ状を呈しているが、開口部から下へ80cmまで徐々にしぼまって、張り出しが最高となり以下壙底部に向けて「ハ」の字状に開き壙底面で最大大となる。なお本遺跡内のフラスコ状ピットで壙底部に小穴を有する例は本例にみるだけである。

埋土はHI50F状ピットに準じ5層に大別される。Ⅰ・Ⅱ層群は鍋底状の断面をみせ中央部が落ち込み周辺部が盛り上がる形状を示すのに対し、Ⅳ・Ⅴ層群はこれと全く逆向きの堆積をみせている。第Ⅲ層群は上層、下層が中央部で夫々逆向きにくぼみ周辺部が層厚を厚くするものである。第Ⅲ・第Ⅳ層群は壁の崩壊による堆積が認められ、これらは互層をなしている。第Ⅲ層は褐色シルト質埴土が基調であり、第Ⅳ層は黒褐色シルト質埴土を基調とするものであるが、これらは薄層をなし、明褐色シルト、褐色シルト及び砂礫などが入り込んでいる。

〈出土遺物〉 遺物は縄文土器片6点、チップ5点の計11点である。出土層位は第Ⅰ層で土器片5点、最下層で1点、またチップは第Ⅰ層で1点、第Ⅴ層で4点となり、最上層と最下層に偏在する。且つ土器片とチップに層位の逆転がみられる。土器破片6点中地文の明瞭に残るのが1点だけで他は細片もしくは表面が剥離し資料価値が薄い。口縁部破片は地文がLR単節縄文で胎土中に繊維を含み、破片からの形状は口縁が平縁でやや外反傾向をみせる。器厚は薄手の作りとなっている。なお焼成は良好で堅緻である。時期的には縄文早期末葉頃に位置づけられるものであろう。一方チップの材質は硬質頁岩、珪質頁岩などである。

I D03F 状土壌 （第6図1、図版4）

IA50から南9mのⅡa層上面で検出された遺構である。平面図は東西にやや長い楕円形状を呈している。規模は開口部で2.1m、頸部径2.0m、底部径2.25m深さ2.0mを計測する。張出し部の位置がやや上方に作り出されている。埋土はⅤ層に分層され堆積する層相は前者に近似している。埋土内からの出土遺物は縄文土器片31点、チップ5点である。土器片包含層は第Ⅰ層で25片、第Ⅱ層で6片、チップは第Ⅰ層だけである。土器片のほとんどは繊維土器で、地文は不整撚糸文とみられる。二片の口縁部破片は平縁で口縁端がやや肥厚し、断面形が逆U字形を呈する。色調は褐色ないし茶褐色を呈し、焼成はやや堅緻である。以上の土器片は大木1式に比定されるものと大木8a式の渦状文のものである。またチップは硬質頁岩である。



第5図 ID06F状ピット 平・断面図

IA03F状土壌 (第6図2、図版3)

IA50から西1mの地点で検出されたピットで、平面形は卵形を呈し底部は円形状となる。開口部径2.5m、頸部径2.0m、底部径2.35m、深さ1.95mを測り断面形は前者等に類似するが、張り出し部は水平とはならず西に高く東に低い。埋土の層相は前者に近いが第V層は壙底面に対しほぼ水平となり前者と異なる。また第I、第II層群の層厚が極端に厚く約1.5mほどに達している。本遺構の伴出遺物は縄文土器片10点だけですべて第1層群のみとなっている。このうちの1点は口縁部から体部までの破片で、口縁は平縁をなし内弯気味に外傾するもので浅鉢形の器型を呈するものと思われる。口唇部に隆帯を貼布し肥厚させた複合口縁である。施文は口唇

部の肥厚帯、及び体部に認められる。内面はヘラ状工具によるミガキが丹念に横方向に認められる。編年上からは大木7 a式に比定される。他は細片または地文が磨滅し判然としない。

HJ50F 状土壙 （第6図、図版3）

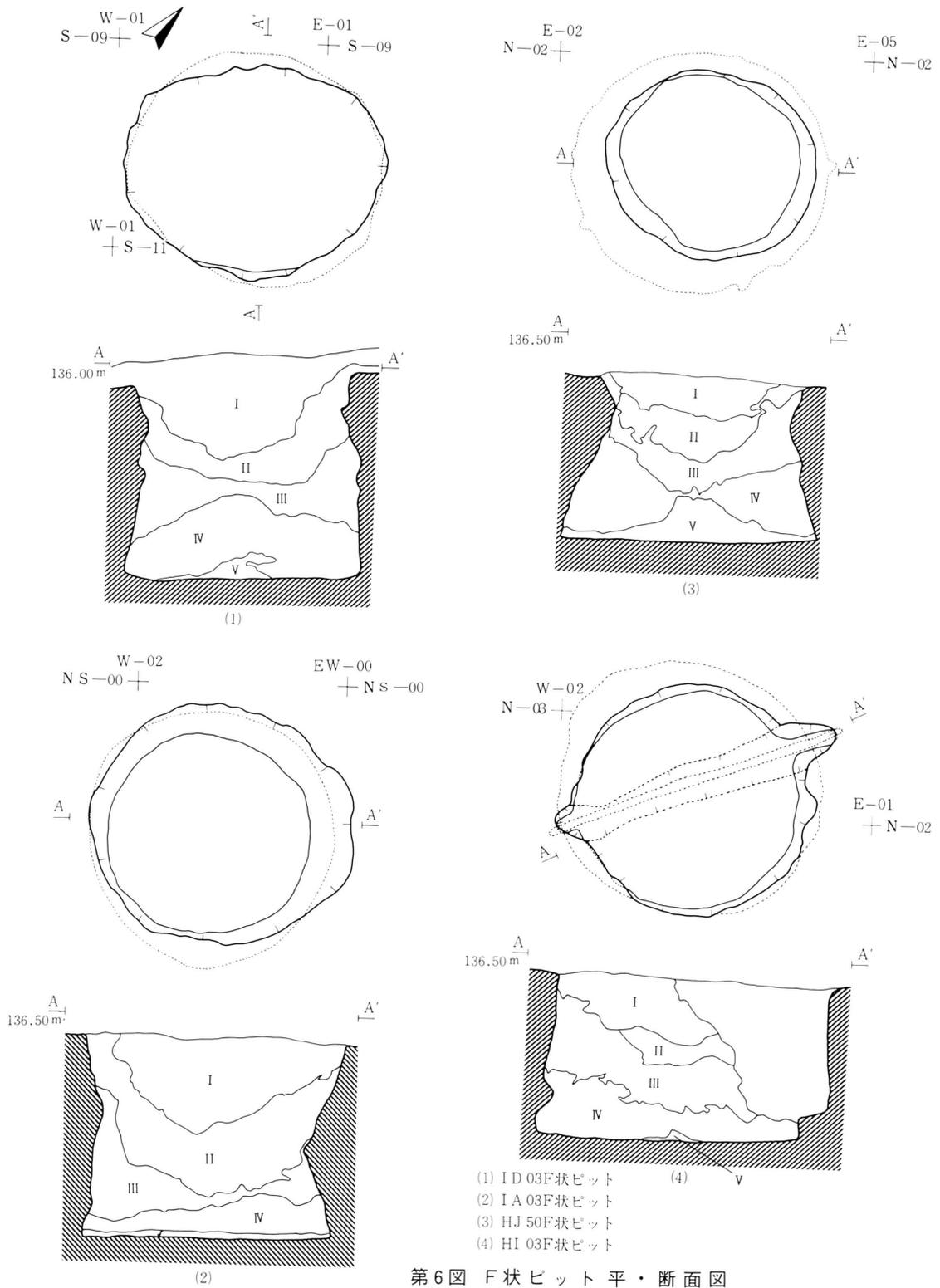
本遺構はI A50から東3 m地点で検出されたものである。平面形は円形状で壙底部に3ケの凹状部分をもち底部形態で前者とやや形状を異にする。規模は開口部径1.95m、頸部径1.7m、底部径2.5m、深さ1.95mを測り開口部に比べ壙底部の開きが大きい。埋土はF状ピットの一般的な層相を呈している。出土遺物は縄文土器片14点、チップ9点である。土器片は二種類に分けられ一つは胴部破片と思われるもの6点で、器形については不明である。地文は不整撚糸文で内面は無文である。胎土中に多量の繊維を含み粗砂、石英細砂を含んでいる。焼成はやや良好で堅緻である。色調は黄褐色乃至茶褐色を呈している。これらは大木1式期に比定される。また他の1つは5片の胴部破片で同一個体とみなされる。地文は単節RLの縄文がみられ、胎土中に多量の砂粒を混入している。内面はミガキ痕がみられ丁寧で、焼成も良好である。时期的には縄文中期頃に相当するものであろう。この他底部破片1点を出土している。平底で内外面とも無文且つ器厚の厚い作りである。なお出土層位は第I層群で6点、第II層群で3点、第III層群で5点で底部付近からの出土はなかった。チップは第I層と第III層で他の2点は出土層位が不明である。

HI03F 状土壙 （第6図4、図版3）

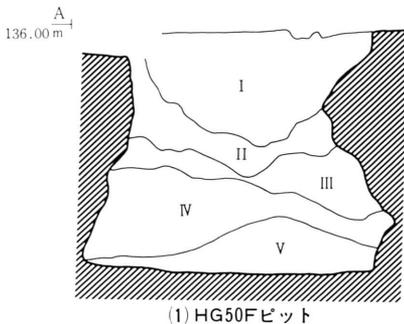
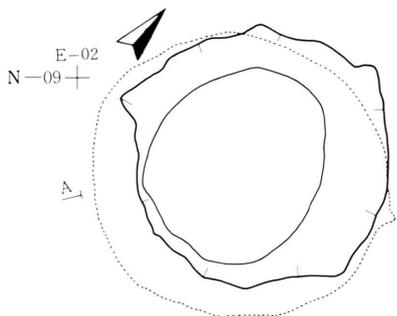
本遺構はHJ 53F状ピットの西方約2 mの位置で検出された。平面形は円形であるが、ほぼ南北方向にHJ 03V字状土壙が切り合い、開口部端にV字状土壙の両端の掘込み面をとどている。規模は開口部径が2.7m、頸部径2.4m、底部径が2.5m、深さ1.6mを測る。形状及び埋土の堆積状況はいずれも前者に酷似するものである。F状ピットとV字状土壙の新旧関係は切り合いの関係からF状ピットの埋没が完了した時点でV字状土壙が構築されたものである。出土遺物は縄文土器片16点を数え、石器類の共伴はみられなかった。縄文土器片は大木1式に比定されるものが12点でこれらはいずれも胎土中に繊維を混入、また口縁部破片では平縁のものが1点出土している。他の1点は上記の範疇に含まれず、大木7 a式に相当するものと思われる。一方本遺構の第V層群の壙底部付近の面から植物種子が出土している。出土位置はピット中央寄りのやや南側と、北西部の底面近くからでブロック状を呈して出土したものである。この植物種子について昭和52年に種子鑑定を受けた結果「赤シソ」に似るが、遺構の構築年代と期を同じにするかについては明解な答えは得られなかった。

HG50F 状土壙 （第7図1、図版2）

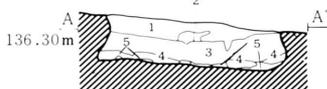
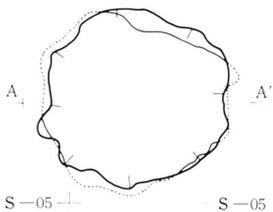
本遺構はHG50住居跡内の底面下に検出されたF状ピットである。規模は開口部径1.9m、頸部径1.65m、底径2.3m、深さ1.9m、を測る。埋土の層相は自然堆積を示しV層群に分層される。



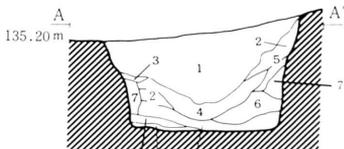
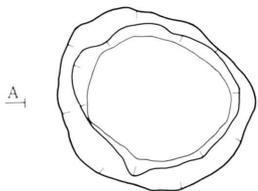
第6図 F状ビット平・断面図



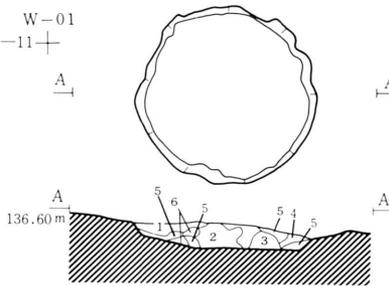
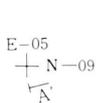
(1) HG50Fピット



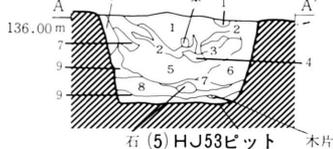
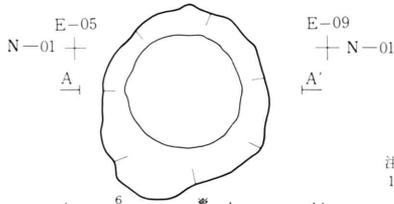
(2) IB50ピット



(3) IE53ピット



(4) HG03ピット



(5) HJ53ピット

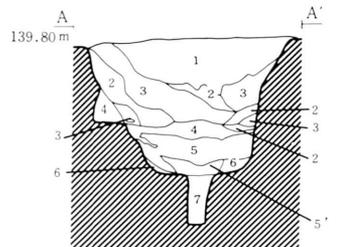
注記

1. 暗褐色シルト
2. 褐色のシルトに1が混入
3. スコリア、火山砂、黒褐色土が混入
4. 粗砂
5. 暗褐色のシルト、スコリア、砂混合

E-5
S-13

注記

1. 黒褐色、褐色土が混じる
2. 明褐色土+パミス
3. よこれ土
4. 1と似ているが褐色土が少ない
5. 2に黒褐色土が多く混じる
6. 明褐色シルト質粘土
7. 黒褐色+パミス
8. 黒褐色、明褐色土混入
9. 黒褐色土+褐色土



(6) DG03ピット

注記

1. 暗褐色 シルト質壤土
2. 黒褐色、シルト質壤土
3. 褐色、砂含む
4. 暗褐色、砂含む
5. 黒褐色、砂含む
6. 褐色、粘土
7. 黒褐色、シルト質壤土
8. 黒褐色、シルト湿気多い
9. 褐色、重粘土
- * 空洞

注記

1. 黒褐色、耕土と類似
2. 暗褐色
3. 黒褐色、火山砂含む
4. 褐色粘土
5. 褐色、黒褐色土混合スコリアを含む
6. 褐色粘土、火山砂、礫を含む
7. 黒褐色、湿気が多い

注記

1. 黒褐色シルト
2. 黒褐色のシルトに少量のスコリア混入
3. 暗褐色シルト
4. 暗褐色、褐色のシルト+黒褐色のシルト
5. 褐色、軽粘土
6. 暗褐色壤土、スコリア多く含む
7. 黒褐色シルト、スコリア多い
8. 暗褐色、スコリア多い

第7図 F状・B状ピット 平・断面図



平面形は不正円形状を呈し南側が急角度で落ち込み検出面下80cmほどで角度を変え外方に開く。壙底部の形状は円形となる。出土遺物は縄文土器片17点、チップ9点を数える。層群毎の包含は第Ⅰ、第Ⅱ層群とも各3点で出土層位不明のものが11点にのぼる。チップの出土層位は不明である。土器片は大木8 a式の7点を除き、他は大木1式の繊維土器である。

I B50B状土壙 (第7図2)

平面形は大略円形状を呈し、壙底部は北側を除き開口部よりも内側にえぐり込まれている。規模は第1表に示した通りであるが浅形である。埋土は5層に分層され、壙底部付近で4層と5層が交錯し判然としない。なお埋土内からの伴出遺物はなかった。

I E53B状土壙 (第7図3)

本類の典型的なピットである。平面形はやや楕円形状を呈するが壁の落ち込みが途中で一担すぼまり、次いで垂直に近い角度で壙底に至るものである。規模は第1表の通りである。埋土は9層に分層されるが、2、3、5、7の各層は壁の崩剝による埋土と考えられる。層相は自然堆積とみなされる。本ピットも遺物の判出はみられなかった。

HG03B状土壙 (第7図4)

本類中最も浅いピットでほとんど皿状を呈するものである。形状は円形で壙底部は西に高く東に低くなっている。壁の傾斜角は極めてゆるく、また埋土は6層に分層されるが攪乱の感をうける。本ピットも埋土内からの遺物は発見されない。

HJ53B状土壙 (第7図5)

壙底部は円形状を呈するが開口部はやや西南に伸びる不正円形を呈するものである。埋土は9層に細分され上層は暗褐色、褐色のシルト質壤土であり、中位はこれに砂を包含する。また壙底部付近は褐色のシルト質壤土となり概ね自然堆積の層相を呈している。本ピットからチップ52片の出土をみている。

DG03B状土壙 (第7図6)

本ピットは壙底中央部に小穴を有する特異な形態をみるもので、平面形はほぼ円形であるが上端径と下端径の差が著しく壙底部がすぼむ。底部小穴は中央部に位置し、ほぼ円筒状に掘り込まれており、深さ約40cmを測る。埋土は7層に分層される。小穴の埋土は単層で黒褐色土である。

I C50B状土壙 (第7図7)

断面形がシャーレー状の浅いピットである。開口部と壙底部がほぼ垂直に位置し壁が直立するものである。埋土は自然堆積と思われる。一方埋土内第1層から縄文土器の細片2点が出土しているが、本ピットに伴ったものかどうか疑わしい。

CB62V字状土壇 （第8図1、図版4）

調査区の北東端で検出された遺構で長軸3.4m、短軸0.9m、深さ1.2mを測る。長軸方向は、N-10°-Wである。埋土は4層から構成され、1、2、3層の順に層厚が薄くなる。埋土内かの遺物は発見されなかった。

HA59V字状土壇 （第8図2、図版4）

H区北東隅で検出した遺構で長軸2.8m、短軸0.8m、深さ約0.9mを計測する。長軸方向は、N-51°-Eである。平面形は細長い楕円形状を呈し、壁は上面から35cmほど下で一担ふくらみをもち以下垂直に壙底に至る。埋土は8層に分かれ自然堆積の層相をみせるものである。埋土の色調は上層から黒色土、明褐色、褐色の順で土性はシルト質壤土ないしはシルトである。埋土内からの遺物は発見されない。

HI 56V字状土壇 （第8図3、図版4）

平面形は西側にややふくらむが前者等に類似するものである。長軸は2.8m、短軸は0.6m深さは0.8mないし0.9mを測る。壙底部は西にやや傾斜し深くなっている。長軸方向はN-80°-Wである。壁の立ち上がりは西壁がやや傾斜をもつが東壁はほぼ垂直に近く立ち上がるものである。また埋土は4層に分層され、3層、4層に礫及び砂の混入が認められる。一方出土遺物は第4層から縄文土器片4点が出土している。なお出土層位不明の縄文土器片が6点、チップ4点となっている。このうち2片は口縁部破片で大木8 a式である。

HJ03V字状土壇 （第6図4、図版3）

本土壇はHI03F状ピットと切り合い関係にあるもので、長軸2.8m、短軸は推定0.5m内外、深さ1.2mを測り、長軸方向はN-32°-Eである。上面縁辺部に対し壙底部が長く伸び他の土壇と形状をやや異にする。また遺物の出土はみられない。

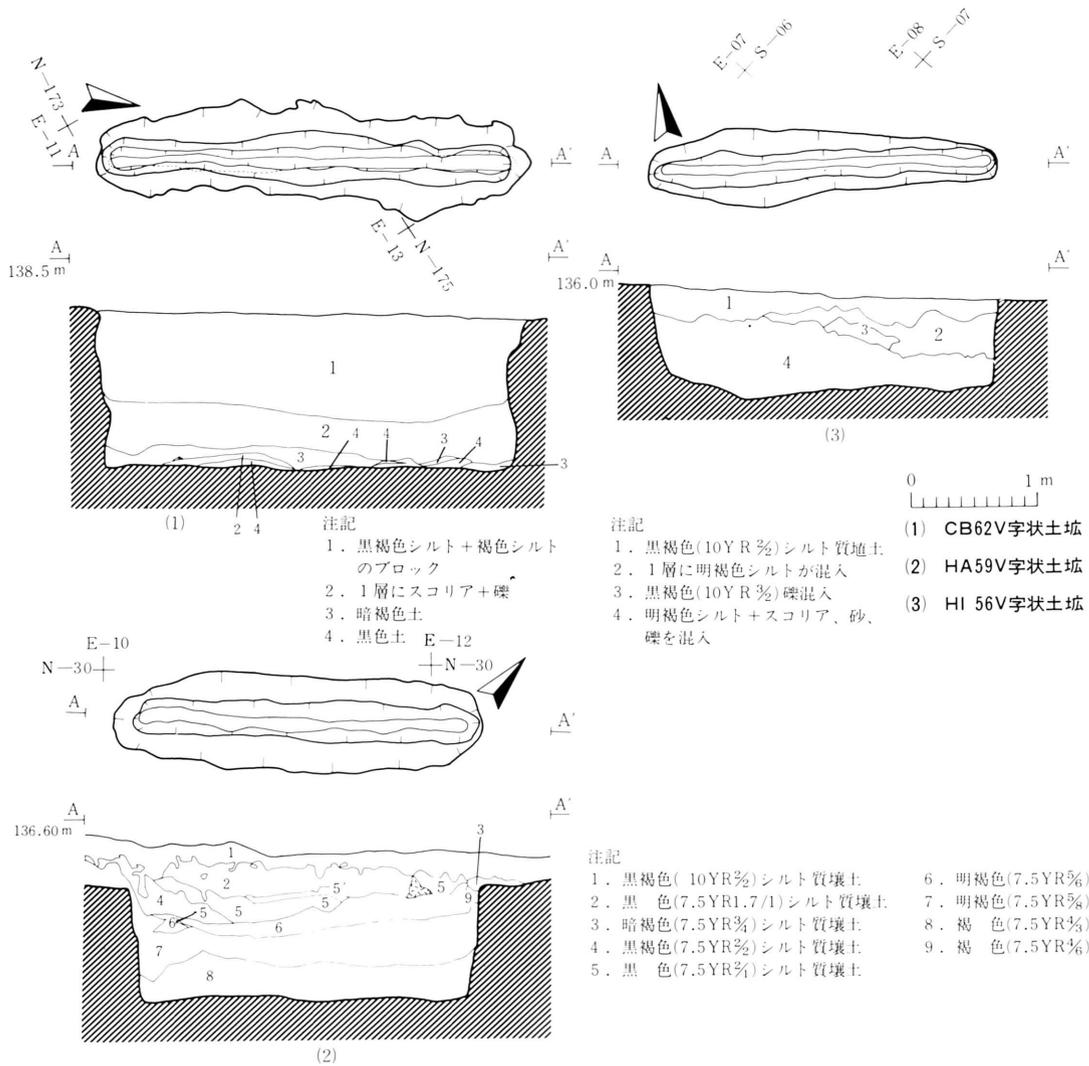
4. 考 察

調査の結果、竪穴住居跡1棟、F状ピット7基、B状ピット6基、V字状土壇4基を発見した。出土遺物は土器類、石器類、チップなどであった。

遺構

竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区南側の緩斜面上で発見されたが、住居跡の東部約 $\frac{1}{2}$ が削平を受け消滅していた。したがって壁も削平を受け西側の約 $\frac{1}{2}$ が残るのみでプランの全貌は推測に待つ以外なかった。形状は楕円形状を呈し、中央東寄りに石囲い炉を伴っている。柱穴は壁直下かあるい

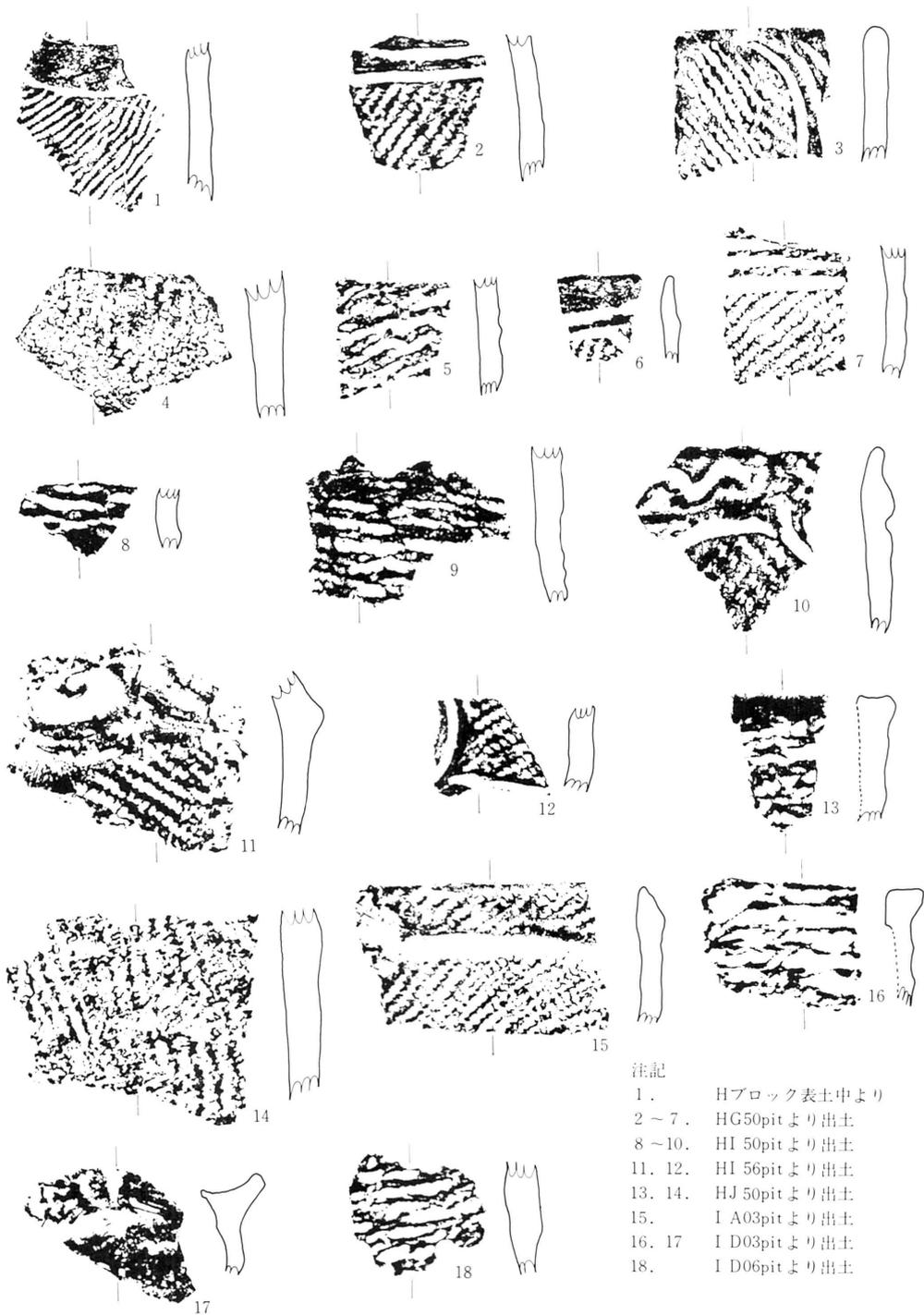


第8図 V字状土壇平・断面図

は壁外に設けられ配置は夫々対応関係にある。また8個の柱穴中、4個は2本ずつ接し「そえ柱」の様相をみせている。この例は盛岡市大館町遺跡のA4-3住居跡(注3)に求められる。また炉は床面を浅くほりくぼめその部分を直接炉床として使用したことが埋土セクションからうかがえる。炉床周囲は偏平な川原石を並べた地床炉である。本住居跡の伴出遺物は縄文土器片、石器などでありこれから縄文中期の遺構と考えられる。

土壌類

本遺跡における土壌は三大別される。1類はフラスコ状ピット、2類はピーカー状ピット、3類はV字状土壌である。第1表はこれらの土壌の計測一覧表である。これで見るとF状ピットは開口部が2m前後、底径が2.5m前後、深さが2m前後となり本遺跡においては最も大形のピットである。また断面形はいずれもフラスコ状を呈し開口部よりも底部径が大きく、開口部の下で一担張り出しをもつのが特色である。このピットの埋土は層相において共通性がみられ層群は5層に分層されるものである。各層群の断面形は第Ⅰ、第Ⅱ層群は鍋底状の堆積を示し、第Ⅳ、第Ⅴ層はそれと逆向きの形状を呈するものである。一方これらのピット埋土内に包含される遺物は縄文土器片、石器、チップ等となり、大半は第Ⅰ、第Ⅱ層群に集中している。このようなF状ピットの発見例は近年とみに増加し、県内での代表的な遺跡を列記すると、卯遠坂遺跡(注4)、湯沢遺跡(注5)、西田遺跡(注6)、塩ヶ森遺跡(注7)などがあげられる。このF状ピットの性格については貯蔵穴説が最も一般的である。ピーカー状ピットはいわゆる断面形がピーカーに類似することから呼称されたものであるが規模は前者に比べ小さく、また埋土内からの遺物の伴出が少ない。したがって性格、時期等については不明である。V字状土壌は4基発見されているが、形状、規模等は大同小異である。また長軸線における主軸方向、及び配列についての規則性は考えられない。このうち1基はF状ピットと切り合っており両者の新旧関係は、F状ピットの方が古いことを確認している。したがって本遺跡ではF状ピットの後にV字状土壌が構築されたものとみられる。本土壌の類例もF状ピット同様に県内での出土例の増加がみられる。県内にその例を探すと膨大な遺跡数にのぼるが、ここではその著名遺跡について若干ふれておきたい。南矢巾遺跡29基、宮手遺跡29基、高柳遺跡18基、藤沢B遺跡(注8)60基であり、類例は他地方にもみられ、北海道「厚真Ⅰ遺跡」(注9)などにも好例が見られる。次にV字状土壌の性格について獣類捕獲の「陥し穴」説を説いた今村啓爾氏(注10)の論考、宮沢、今井両氏による「いわゆる落し穴について」(注11)の研究がある。本土壌が果して「落し穴」であるかどうかについては、占地地形、配列、構造、住居跡との相関、原始時代の狩猟法等々についての総合的研究を待ちたい。いずれ今日の見解は「落し穴」説が有力である。一方伴出遺物は縄文土器片が若干とチップ類であり、土器片は縄文時代中期の大木8a式である。



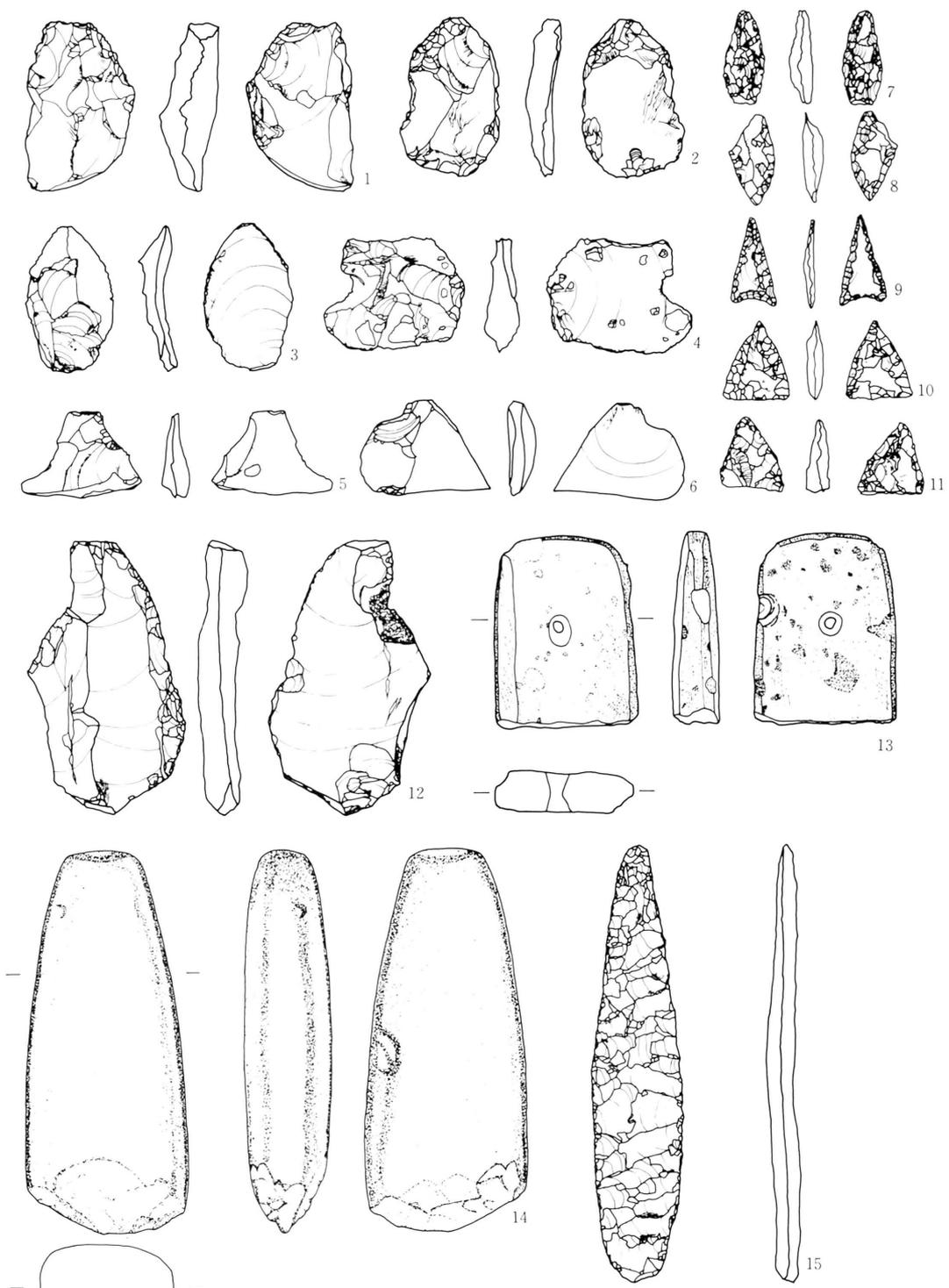
注記

- 1. Hブロック表土中より
- 2～7. HG50pitより出土
- 8～10. HI 50pitより出土
- 11. 12. HI 56pitより出土
- 13. 14. HJ 50pitより出土
- 15. I A03pitより出土
- 16. 17. I D03pitより出土
- 18. I D06pitより出土



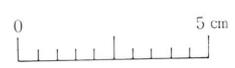
第9図

土器片拓影図



第10图

石器实测图



遺物

本遺跡の調査で出土した遺物は縄文土器片、石器、チップ類等である。土器片は全て細片で復元可能なものはなく部位は胴部破片が最も多く、若干の口縁部と数点の底部の破片が出土している。これらの土器片は時期的に巾があり縄文早期末葉から晩期前葉に相当するものである。早期破片は数点にとどまり、数的に多いものは前期初頭に比定される大木1式期の繊維土器である。F状ピット内出土の土器片はほとんどこの型式のものである。また住居跡内とV字状土壌出土の土器片は大木8a式の隆起渦状文を口縁部にもつものとなっている。この他に大木7式の土器片が若干含まれている。石器、石鏃、石槍、磨製石斧、有孔石製品などの若干を出土しておりこのうち石斧と有孔石製品は住居跡床面出土のもので、石槍は表土中から出ている。以上の出土遺物をもとに本遺跡の遺構をみると、当初F状ピットが構築され、これの埋没が終了した段階で住居跡がその後V字状土壌が掘られたと順序だてられそうである。また埋土内の出土遺物を層位ごとに表にしたものが第2表である。本表から言えることはF状ピットの埋

第1表 土 壌 計 測 一 覧 表

F状ピット

ピット名	H I 50	H G 50	H I 03	H J 50	I A 03	I D 03	I D 06
開口部径(m)	2.20	1.90	2.70	1.95	2.50	2.10	2.50
頸部径(m)	1.60	1.65	2.40	1.70	2.00	2.00	1.90
底部径(m)	2.40	2.30	2.50	2.50	2.35	2.25	2.75
深 さ(m)	2.15	1.90	1.60	1.60	1.95	2.00	2.00
土 器 片	75	17	16	14	10	31	6
石 器	—	—	—	—	—	—	—
チ ッ プ	8	9	—	9	—	5	5

B状ピット

ピット名	H J 53	I E 53	I C 50	I B 50	H G 03	D G 03
開口部径(m)	1.25	1.55	1.20	1.40	1.40	1.60
頸部径(m)	—	—	—	—	—	—
底部径(m)	0.90	1.15	1.15	1.35	1.25	0.50
深 さ(m)	0.70	0.75	0.35	0.35	0.20	1.00
土 器 片	—	3	2	—	—	—
石 器	—	—	—	—	—	—
チ ッ プ	53	2	—	—	—	—

V字状土壌

ピット名	C B 62	H A 59	H I 56
開口部径(m)	3.40	2.80	2.75
頸部径(m)	—	—	—
底部径(m)	3.20	2.55	2.55
深 さ(m)	1.25	1.00	0.85
土 器 片	—	—	10
石 器	—	—	—
チ ッ プ	—	—	4

第2表

土壌層群、層位別出土遺物一覧表

F状ピット

ピット名 層群 種類	H I 50			H G 50			H I 03			H J 50		
	土器片	石器	チップ									
I	64	—	1	3	—	—	13	—	—	6	—	5
II	3	—	—	3	—	—	1	—	—	3	—	2
III	3	—	—	—	—	—	2	—	—	5	—	2
IV	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
V	3	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明	—	—	5	11	—	9	—	—	—	—	—	2
計	75	—	8	17	—	9	16	—	—	14	—	9

ピット名 層群 種類	I A 03			I D 03			I D 06			計		
	土器片	石器	チップ	土器片	石器	チップ	土器片	石器	チップ	土器片	石器	チップ
I	10	—	—	25	—	2	5	—	1	126	—	9
II	—	—	—	6	—	—	—	—	—	16	—	—
III	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	—	2
IV	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—
V	—	—	—	—	—	—	1	—	4	4	—	6
不明	—	—	—	—	—	3	—	—	—	11	—	19
計	10	—	—	31	—	5	6	—	5	169	—	36

B状ピット

ピット名 層位 種類	H J 53			I E 53			I C 50			計		
	土器片	石器	チップ	土器片	石器	チップ	土器片	石器	チップ	土器片	石器	チップ
1	—	—	1	—	—	—	2	—	—	2	—	1
2	—	—	—	3	—	2	—	—	—	3	—	2
3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明	—	—	52	—	—	—	—	—	—	—	—	52
計	—	—	53	3	—	2	2	—	—	5	—	55

V字状土壌

ピット名 層群 種類	H I 56			H J 03			計		
	土器片	石器	チップ	土器片	石器	チップ	土器片	石器	チップ
I	—	—	—	—	—	—	—	—	—
II	—	—	—	—	—	—	—	—	—
III	—	—	—	1	—	1	1	—	1
IV	4	—	—	—	—	—	4	—	—
V	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明	6	—	4	1	—	—	7	—	4
計	10	—	4	2	—	1	12	—	5

土上面に土器片が集中していることと、各層に小数ではあるが包含されていることなどから土器片は流れ込みと考えられる。なお本遺跡の近隣に早期、前期、中期の集落跡として大館町遺跡、大新遺跡などがあり、本遺跡と時期的には差がなく一連の遺跡ともとらえられる。

5. まとめ

本遺跡の調査で発見された遺構は竪穴住居跡1棟、土壙類17基と遺物若干である。

1. 竪穴住居は縄文時代中期の遺構である。
2. 土壙類は三類に大別され①フラスコ状ピット②ビーカー状ピット③V字状土壙である。
3. 出土遺物は全て縄文土器で細片のみであった。
4. 土器片は縄文早期末葉、前期、中期、後期、晩期前葉のもので前期から後期のものは大木式土器である。
5. 石器は数点のみで器種は磨製石斧1点、石槍1点、石鏃5点、有孔石製品1点、その他チップ類である。

注1. 岩手大学学芸学部研究年報 「厨川柵擬定地盛岡市権現坂発掘調査概報」 板橋 源 1958

注2. 盛岡市 「盛岡市史」(第二分冊) 板橋 源、佐々木博康

注3. 盛岡市 「大館町遺跡発掘調査報告」 岩手大学考古学研究会 1978

注4. 岩手県教育委員会 「東北自動車道発掘調査略報」 1978

注5. 岩手県埋蔵文化財センター 「都南村湯沢遺跡」 1977

注6. 岩手県教育委員会 「東北新幹線発掘調査略報」 1978

注7. 雫石町 「雫石町史」 1979

注8. 岩手県教育委員会文化課調査班 「岩手県溝状ピット検出遺跡」(一覧表) 1979

注9. 郷土の研究第4号 「厚真I遺跡のTピットについて」 渡辺俊一 1978

注10. 物質文化 「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」 今村啓爾 1976

注11. 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 「調査研究集録」第一冊 1976

参考文献

岩手県史 (第一巻、上古編、上代編)

盛岡市史 (第二分冊)

盛岡市通史

北上市史 (第一巻、原始、古代編)

大船渡市史 (第一巻、地質、考古編)

雫石町史

盛岡市教育委員会 「太田方八丁遺跡」 1978

岩手県 「岩手県文化財発掘調査略報」 岩手県埋蔵文化財センター 1977

岩手県 「都南村湯沢遺跡」 岩手県埋蔵文化財センター 1977

奥羽史談 (第54号) 「盛岡市大新遺跡」 吉田義昭、武田良夫 1970

前九^{ぜん}年^くⅡ^{ねん}遺跡

遺跡記号：ZK Ⅱ

所在地：盛岡市前九年三丁目2-1-217他

調査期間：昭和51年4月19日～6月2日

調査対象面積：3400m²

平面実測基準点：東京起点496.000km (DA50)

基準高：海拔139.40m

1. 遺跡の位置と立地 (第Ⅵ図P 350、第Ⅶ図P 351)

〈位置と立地〉

前九年Ⅱ遺跡は、盛岡前九年三丁目地内に位置している。

盛岡駅の北西方向に延びる東北本線は、駅から約2.4km地点付近で、その向きを北々東方向に大きく変える。前九年Ⅱ遺跡は、ちょうど、この弯曲部の東側隣接地一帯に広がっている。遺跡所在地付近は、現在、畑地と宅地になっている。そして、その南側を前九年Ⅰ丁目方面と大新町方面を結ぶ市道が東西に走っている。

遺跡の立地形を見ると、この遺跡が、盛岡市の北部一帯に広がる台地上に乗っている事が知られる。遺跡の乗っている台地は、北上川・雫石川しずくいし両河川の流域に発達する3段の河岸段丘のうち、中位の高松段丘に相当するものである。この段丘は、南流する諸葛川もろくず・木賊川とくきなどの小河川とその支流によって侵食され、段丘上の各所に浅い谷が発達し、緩い起伏が見られる。前九年Ⅱ遺跡は、その様な起伏の微高地部分に位置しており、その西側は、東北本線の切り通し部分を挟んで緩く下り、大新町方面の低地に続いている。それ以外の周辺部の地形は比較的平坦であるが、南東部のやや離れた場所には、南方部に開口する浅い谷が一条走っており、その方向に、西側同様、幾分緩い傾斜が見られる。なお、遺跡付近の海拔高度は139～140mを測る。

〈周辺の遺跡〉

前九年Ⅱ遺跡の周辺部の半径1km以内の範囲内には、長畑・前九年Ⅰ・厨川柵擬定地・安倍館・大新・小屋塚・大館町など多くの遺跡が散らばっている。そのうち、長畑から厨川柵擬定地までの3遺跡は、東北新幹線ルートに関わる遺跡として調査が行なわれた遺跡である。その距離は、前九年Ⅱ遺跡から長畑遺跡までは北へ約0.4km、前九年Ⅰ遺跡までは南に約0.6km、厨川柵擬定地までは、南に約0.88kmを、それぞれ測る。

以上の各遺跡のうち、長畑・前九年Ⅰ・大新・小屋塚・大館町などの遺跡は縄文時代の遺物を主体とする遺跡である。特に大館町遺跡は、大集落跡として古くから調査の行なわれている遺跡である。また、厨川柵は「前九年の役」との関連で有名な史跡であるが、その所在地については未だ確定していない。現在のところ、天昌寺一帯の国鉄の洗車場を中心とした付近一帯が、そと有力擬定地とされている。また、安倍館は中世に岩手郡一帯を支配した工藤氏の居館として有名であるが、それ以外にも厨川柵との関連から、古代城柵関連遺構の存在が予想されている遺跡である。

これらの遺跡は、それぞれの時期に於けるこの地方の歴史を解明する上で、非常に貴重な遺



第1図 前九年II遺跡グリッド配置図

跡である。しかし、いずれの遺跡も、近年著しく膨張を続ける盛岡市の市街地の中に取り込まれ、その現状保存は、年々難しいものになってきている。

2. 調査の方法と経過

〈方法〉

前九年Ⅱ遺跡の調査は、全て序文2で述べた方法に準じて行なった。その際、調査区全体の測量原点を東北新幹線の中軸線上の東京起点496km地点上に置き、CA50と名付けた。このCA50と同じ中軸線上の東京起点496.08km地点を結ぶ直線を想定し、調査区全体の基準経線とした。次に、CA50を通り、先の基準経線に直角に交わる直線を想定し、基準緯線とした。以下、これらの基準線に平行直角になる様、調査区全体を3m×3m単位の方眼で被い、地割り区分し、さらに経線方向に30m単位毎の地割りを設定した。

また、調査区内の高度測量に当たっては、その基準高を海拔139.40mに統一する様に努力した。

〈経過〉

前九年Ⅱ遺跡の調査は、昭和51(1976)年の4月19日から6月2日まで行なった。その間、長畑・前九年Ⅱの2遺跡の調査が一部併行して行なわれていたため、人手の都合がつかず、5月7日から16日までは調査を一時中断した。そのほかの日も、前記の2遺跡の調査との兼ね合わせで、人手の調整が難しく、作業は全体的に渋滞しがちであった。ともかく、そういった状況の中で、4月20日から5月18日までは、遺構検出のために粗掘りを行なったが、これと併行して4月29・30日の両日に土層観察用トレンチを設け、土層調査を行なった。以上の様な作業を経て、5月18日から25日まではC区で検出されたピット群の調査を行なった。また、それと併行して5月19日から6月2日まではD区で検出された溝状ピットの調査を行なった。そして、6月2日で全予定を完了し、前九年Ⅱ遺跡の調査を終えた。

3. 調査の結果

〔1〕 基本層序

遺跡付近の土層は、宅地造成や住宅建築工事のため、著しく攪乱されている。その中で、比較的保存状態の良好なCF50グリッド内の土層観察用トレンチの所見によると、概そ、次の通りである。地下1.3m付近まで行なった深掘りの結果、遺跡付近の土層は、地下1.3までの間で、

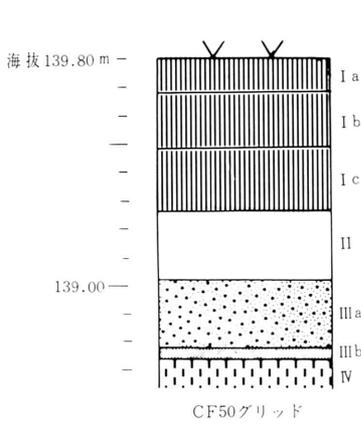
第1図に見られる様に大きく4層に分かれる事が解った。

最上層は黒褐色～黒色のクロボク質の火山灰土層であるが、この層はさらに3層に細分される。そのうち、最上部のI a層は耕作によって攪乱された表土層で、宅地化された部分では、この層の上にさらに各種の盛土土層が載っている。I b層は、比較的攪乱の少ない黒色土層で、I a層と比べて、やや粘りが少ない。I c層は黒色土層であるが、II層との漸移層で、その色調は下部に行くほど明るさを増している。

以上のI層の下には、褐色の壤土質の火山灰土層IIが広がっている。III層の下には、スコリアや火山砂からなるIII層が続いている。IV層のうち、上層のIII a層は極暗赤褐色のスコリアの層である。その下には、灰色の火山砂よりなるIII b層の薄層が続いている。このIII層の火山噴出物の堆積層は、一般に「分火山灰」などと呼ばれ、盛岡北部～滝沢・玉山村方面の土層中に広い分布を示している。この層の下には明褐色の埴土層が続いているが、この層の下限は、遺跡付近で行なわれたボーリング調査の結果、地下約4.8m付近に位置している事が解った。

以上の様な土層堆積状況は、大体、長畑遺跡の場合と同様である。

名層の層厚は、それぞれ第1表に示す通りである。なお、今回発見された各遺構の検出は、I c層下部からII層上面で行なわれたが、その実際の掘り込み面はI b層の下部からI c層上面にあったものと推定される。



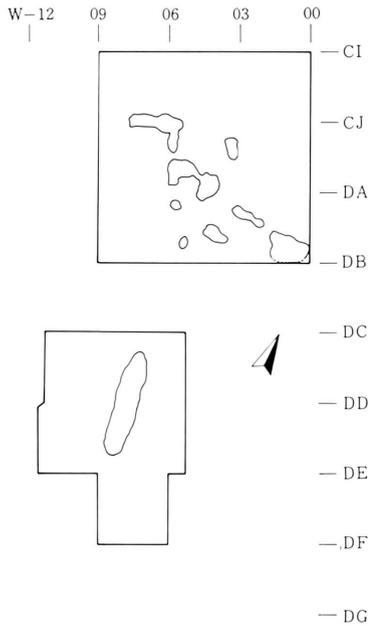
第2図 土層模式柱状図

層位	色	調	土性	層厚(m)
I a	黒褐色	7.5YR $\frac{2}{2}$	耕作土	0.1内外
I b	黒色	7.5YR $\frac{3}{1}$	クロボク質 火山灰土層	0.2内外
I c	黒褐色	7.5YR $\frac{2}{2}$	I bとIIの 漸移層	0.25内外
II	褐色	7.5YR $\frac{4}{6}$	火山灰土層	0.25内外
III a	暗赤褐色	5YR $\frac{3}{6}$	スコリア	0.25内外
III b	灰色	5YR $\frac{3}{1}$	火山砂	0.05内外
IV	明褐色	7.5YR $\frac{5}{6}$	埴土	0.1以上

第1表 土層注記

[2] 発見された遺構と遺物

調査の結果、調査区内からは調査実施前に取り壊された現代の住居跡に伴う各種の廃棄物以外の人工遺物は全く発見されなかった。しかし、時期不明であるが、ピット類が調査区中央部



第3図 前九年Ⅱ遺跡 遺構配置図

のC～D区内で発見された。

不整形のピット類（第3・4図、第2表、写真2-1）

〈位置〉 いずれも調査区の中央の住宅部分に位置している。

〈規模・形状〉 第2表でも解るように、DC091ピット以外のピットは、いずれも検出面で最大長2.4m以下、最大巾0.8m以下の規模を有する平面が不整な楕円形ないし隅丸四角形の浅いピットである。

〈検出面〉 各ピットの検出面は基準層序のⅡ層下部であるが、CJ063ピットの土層図にも見られるように、他のピットもⅠb層中から振り込まれていた可能性が強い。

〈埋土〉 各ピットの埋土は、第4図にも示した様に黒褐色～褐色系の土を主体とした各種の土層よりなるが、いずれの層からも人工遺物は発見されていない。また、層中への木炭などの混入も見られなかった。

第2表

前九年Ⅰ遺跡ピット一覧表

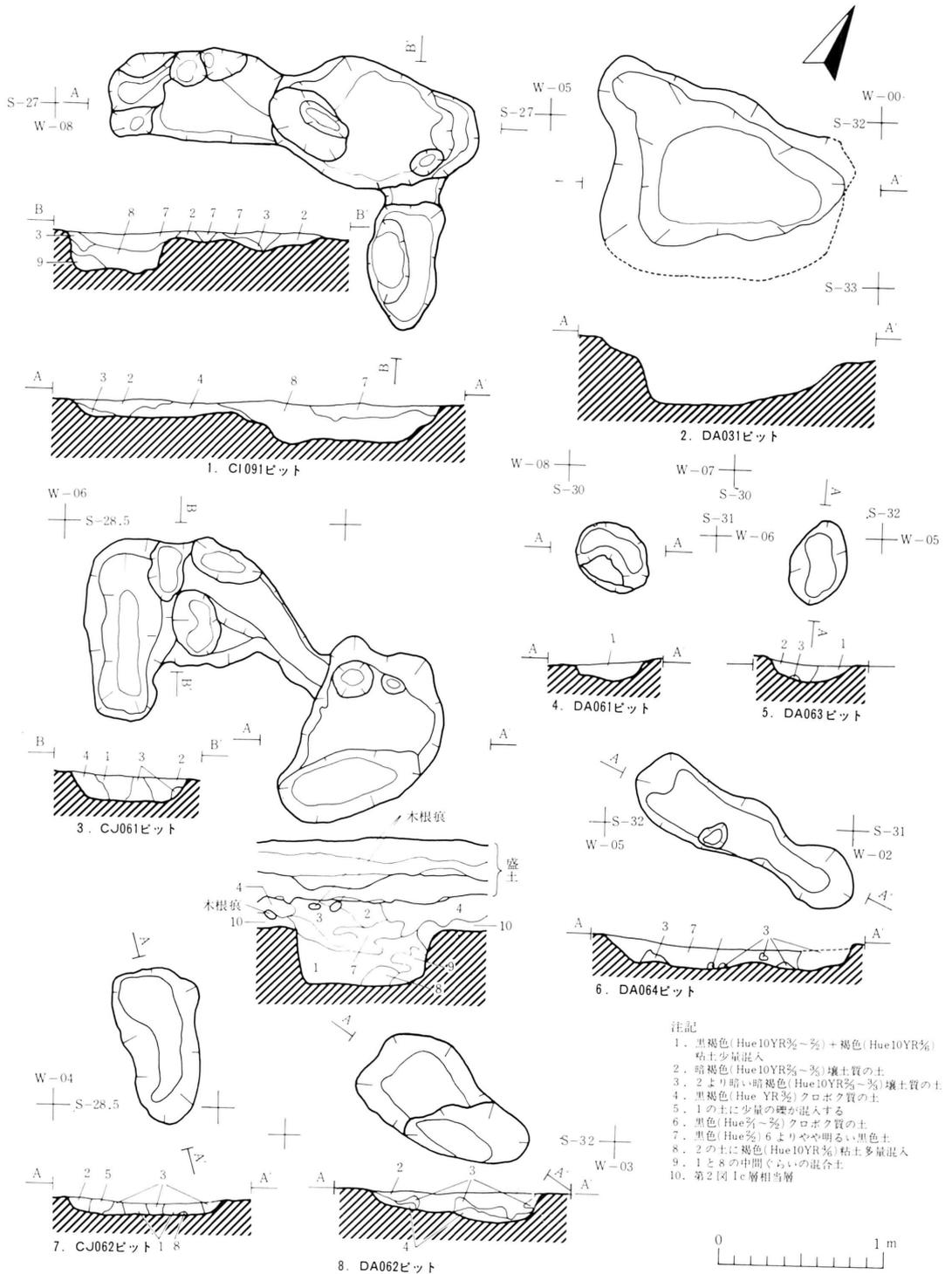
図版番号	ピット名	形態	長さ(長径) (m)	幅(短径) (m)	最大深 (m)	埋土層	出土遺物
4-1	C I 091	不整楕円～円形に皿状ないし鍋底状ピットの集合よりなる「L」字形ピット	2.24	0.4～0.76	0.08～0.25	5層よりなる。一部自然堆積的な様相を呈している。	なし
4-3	CJ 061	不整形の皿状ピットの集合よりなる平面「C」字形のピット	2.38	1.26	0.09～0.36	Ⅱc層の下層部相当層から切り込まれている。主要埋土はb層であるが不整合な堆積状況。	なし
4-7	CJ 062	不整楕円形の皿状ピット	0.96	0.54	0.07	3層よりなる。不整合堆積。	なし
4-4	DA 061	底部に凹凸のある不整楕円形の浅い皿状のピット	0.50	0.38	0.09	単層よりなる。	なし
4-8	DA 062	底部に凹凸のある不整楕円形の鍋底状のピット	11.08	0.62	0.09～0.15	暗褐色土層を主体とするが、それにやや整合な形で2つの層が下に重なっている。	なし
4-5	DA 063	不整楕円形の皿状ピット	0.52	0.34	0.09	3層よりなるが、不整合な堆積を示す。	なし
4-6	DA 064	底部に凹凸のある不整楕円形の鍋底状ピット	1.48	0.22～0.44	0.13～0.19	黒色土を主体とするが、その中に2つの土層が点在している。	なし
4-2	DA 031	不整隅丸四角形の鍋底状のピット	1.44	1.22	0.38	黒色土を主体とするが、その下部には地山層の土と黒色～暗褐色土の混合土がやや整合に重なる。	なし
5	DC 091	細長く深い溝状のピット	上 4.70 中 4.32 底 4.30	0.55 0.36 0.06～0.08	— 0.3～0.55 1.01～1.09	8層よりなるが全体的に自然堆積した状況を呈している。	なし

※A

※B

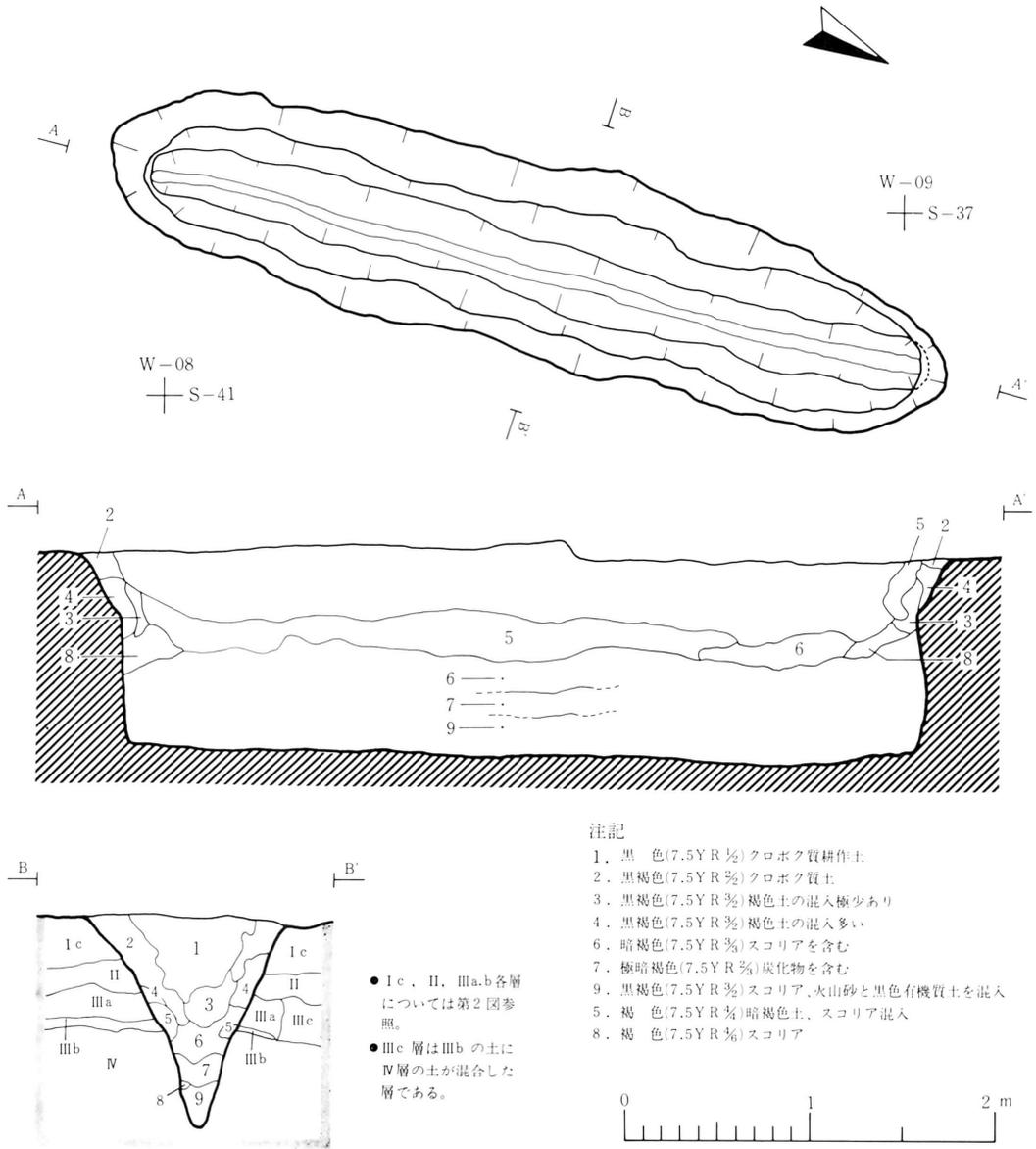
※C

(注) A・B…長さ・幅はいずれも検出面上での規模 C…深さは検出面からの深さ



- 注記
1. 黒褐色(Hue10YR%~%) + 褐色(Hue10YR%) 粘土少量混入
 2. 暗褐色(Hue10YR%~%) 壤土質の土
 3. 2より暗い暗褐色(Hue10YR%~%) 壤土質の土
 4. 黒褐色(Hue YR%) クロボク質の土
 5. 1の土に少量の礫が混入する
 6. 黒色(Hue%~%) クロボク質の土
 7. 黒色(Hue%) 6よりやや明るい黒色土
 8. 2の土に褐色(Hue10YR%) 粘土多量混入
 9. 1と8の間ぐらいの混合土
 10. 第2図1c層相当層

第4図 不整形ピット類の平・断面実測図



第5図 DC091ピット平・断面図

〈配置状況〉 各ピットの位置関係は、第3図に示した通りであるが、その中には東南東一西北西方向に列をなして並んでいる様に見受けられるものもある。この並列関係が偶然の所産であるか、人為的な配列の結果なのか、発掘範囲の中では十分な確認ができなかった。

DC091ピット（第5図、第2表、写真2-2・3）

〈位置〉 調査区中央部の西辺部に位置している。

〈形状〉 このピットは、第5図にも示した様に、南北方向に細長く深い溝状のピットである。その長軸方向は、北に対して約12°30′西に振れている。

ピットの縦断面の形を見ると、その両壁は上端近くでやや外開きになっているが、その他の部分では直立しており、ごくわずかに下膨れ気味になっている箇所も見られる。また、横断面の形は、いわゆる「V」字状を呈しており、口巾に対し、底巾が著しく狭くなっている。

〈規模〉 第2表に示した通りである。

〈検出面〉 遺構の検出された層は、基準土層図のI c相当層上面であるが、第4図からも分かる様に、遺構の掘り込みは基準土層図のI b相当層から行なわれている。

〈埋土〉 ピット中の埋土は9層よりなるが、全体的に自然堆積の状況を呈している。各層毎の特徴は、第4図の土層注記で示した通りであるが、6層を除いて、全て無遺物層である。6層には、少量の微粒状の炭化物が混入している。しかし、人工遺物は全く混入していない。

層の堆積状況をさらに詳しく見ると、ピットの上半部は1・2・3・4で示される黒色～黒褐色系のクロボク質の軽埴土層で埋められている。特にその中心部分は、ほとんど黒色土によって埋められている。これらの層の下には、5・8で示される褐色～暗褐色のスコリアが多く混入した土層が堆積しており、さらにその下には、極暗褐色の6層が広がっている。そして、最下部にはスコリアや火山砂を主体とする褐色の7・9層がつまっている。

4. まとめ

今回の調査で知られた事実は以上の通りであるが、次にこれらの発見された各遺構の性格や時期について、若干の考えを述べてまとめにしたい。

(1) 不整形のピットの時期と性格

CI 091ピット以下8つの不整形のピットの時期は伴出遺物が無いので、いずれも不明である。また、これらのピットが同時に存在したかどうか不明である。

ピットの性格としては、その形状や埋土の状況から見て、何らかの使用目的を持った、人為的な遺構というより、木根の貫入などの自然的な営為の「痕跡」である可能性が強い。

その場合、一定方向に並ぶものがある事から、これらのピットが地境のための生垣状の施設に関連した遺構である可能性も考えられる。いずれ、この点に関しては、今回の調査では明らかにできなかったもので、今後の研究成果に期待したい。

(2) DC091ピットの性格と時期

A. 発見遺跡

DC091ピットに類似した人工の溝状のピットは「Tピット」^{注01}、「V字状ピット」などと呼ばれ、関東以北の各地で発見されている。特に北海道や東北北部で、その発見例が多い。ちなみに、管見の及ぶ限りで調べた、溝状ピットの発見遺跡は、第3表に示した通りである。

B. 立地と分布形態

これらの遺跡の例から、この溝状ピットの立地条件を見ると、必ずしも一定しないが、多くの場合、台地辺縁部や丘陵緩斜面に立地する傾向が認められる。さらにその発見数をみると、前九年I遺跡などの様に、発掘範囲が比較的狭い所では1～2例しか検出されていないが、函館空港第4地点遺跡^{注02}や湯沢遺跡^{注03}などの様に広い範囲が発掘された遺跡では、100基以上も検出されている。しかも後者の場合、多数の溝状ピットが無方向に散在するのではなくて、高度差や地形変化の状況に対応する形で一定の方向と間隔を保ちながら、幾つかの群に別れて存在する傾向が認められる。この様な例は先に述べた2遺跡のみでなく、他にも岩手県内の安代町荒屋Ⅱ^{注04}、雫石町下平^{注05}・紫波町宮手^{注06}・栗田Ⅲ^{注07}・北上市藤沢Ⅰd^{注08}・水沢市南矢中^{注09}など、多くの遺跡に見ることができる。以上の事実から類推すると、前九年I遺跡などの様に溝状ピットの発見数の少ない遺跡の場合でも、周辺の未調査区域内に同種の遺構の存在する可能性が極めて大きいと言える。

また、この種の遺構は先にも述べてきた様な占地の特徴により、多くの場合、縄文時代以降の各期の集落遺構と共存・重複する形で発見されている。この事から、この種の遺構が集落跡を構成する遺構群のあるものと、性格のないしは時期的に何らかの関連性を有するのではないかと考えられる。しかし、溝状ピットの空間的分布や走向あるいは伴出遺物といったものを見た場合、この様な予想は必ずしも満たされていない様に思われる。

例えば、溝状ピットの走向とか、空間的な分布について見ると、これらのピットが集落跡を構成する住居跡とか墓塚とか、その他の各種のピット群の配置に対応した形で、集落跡内のある一定位置を占めるという傾向は必ずしも認められない。この事は、これらのピットが集落そのものの直接的な構成要素ではなくて、独立した形で存在し得るという事を示唆するものではなかろうか。そしてこの事は、岩手県滝沢村の大緩・高柳・大久保などの各遺跡で、他の集落跡関連遺構をほとんど伴わない形で溝状ピット群が発見されている事実によっても裏付けられているように見える。勿論、以上のような認識は筆者の知見の限界とか、発掘範囲の制約という事もあり、断定し得ないが、一応、現段階ではその様に考えていいのではあるまいか。

C. ピットの形態

さらに、ピットの形態であるが、溝状ピットはその規模とか、平断面の形状の違いから幾つかの種類に分けられる。この形態上の差異が、単なるピットの個体差に過ぎないものなのか、^{注20}それとも機能上の差によるものなのか、今のところよく解っていない。

D. 性格

ともかく、以上の様に見て来た場合、これらの溝状ピットの性格はどの様なものとして把握するのが妥当であろうか。この点に関して、函館空港第4地点その他の多くの例では、溝状ピットの立地条件、走向方向、そして遺構そのものの形状等から、陥し穴様の施設と推定されている。^{注21}先に述べた「Tピット」なる名称も、同様の推定のもとに付されたものである。^{注22}前九年Ⅱ遺跡の場合は、検出例が1例しかないので、その性格付けは、必ずしも単純な類推ではできないが、ピットの形態上の特徴は他の遺跡の例とほとんど変わりがない。そこで、ここでは一応、この溝状ピットの性格を、他の遺跡と同様に陥し穴状施設を想定したい。

ただ、その場合考えなければならない事は、この種のピットがどのような形で使用されたかという、機能上の問題である。つまり、この種のピットがどういう動物を対象にして作られ、その内部や周辺部にどういう仕掛けがなされ、どのようにして対象物が誘導されたのかという問題である。この事は、この溝状ピットを陥し穴と考えた場合に、その特異な形態とも関連して、非常に気掛かりな問題である。しかし、この点に関しては、未だ十分な解決がなされていないのが現状である。そして、その故に溝状ピット＝陥し穴説がかなり多くの人々から支持されているにもかかわらず、定説化し得ない要因となっている。^{注23}

今回の調査でも、その問題を幾分か解決し得る様、努力したが、満足すべき資料は得られなかった。従って、ここではこの問題については触れず、今後の資料の増加と諸方面の研究の進展を待つことにしたい。

なお、以上の説以外に、溝状ピットを「便所施設の跡」と見なす説もある。^{注24}しかし、溝状ピットの立地条件や群構造を加味して考えた場合、そのような考えが果して妥当であるか、疑問に思われる。勿論、「便所施設の跡」であるか、否か、という事は単純に立地や群構造のあり方のみでなく、埋土中の人工遺物や動植物の痕跡、あるいは化学成分などの入念な分析を通して結論付けられるべきではあるが、いずれ、この種のピットの性格や相互の時期関係を考えてゆく上で、今後とも参考にすべき貴重な見解の1つであろう。

E. 時期

この種の遺構は、多くの場合、遺構に直接に伴う遺物が出土していないので、所属時期が不明である。ただし、住居跡やその他の遺構との重複関係とか埋土中の出土遺物、あるいは形態上の類似性から、ある程度、時期の押さえられている例も幾つかある。それによれば、この種

の遺構のうち、古期のものは縄文早期に属すると推定されている^{注25)}。また、新期のものについては、縄文時代中期末～後期まで下る事が確認されている^{注26)}。

前九年Ⅱ遺跡の例では、埋土からも周辺部からも遺構の時期を示す遺物が出土していないため、その確実な時期は今のところ不明である。ただ、この遺跡から半径0.5km以内の場所に、縄文中期の遺物を出す前九年Ⅰや長畑などの遺跡があり、ここからも同様の遺構が検出されている。その時期は、前九年Ⅱ遺跡の例と同様に不明であるが、各遺跡の溝状ピットの埋没状況や立地形はかなり類似しており、距離的にも近い。その上、ピットの隣接区域ないし周辺部の遺跡からは、縄文時代中期の遺物が出土している。さらに、前九年Ⅰ遺跡では、4例の溝状ピットのうちの1例が、縄文時代中期の遺物を出すフラスコ状ピットを切っている。

以上の事柄から類推すると、前九年Ⅱ遺跡と他の2遺跡の溝状ピットが、一様に縄文時代中期か、それにやや遅れる時期の所産の様にも思われる。しかし、先にも述べた様に、これらの遺跡の溝状ピットは、大部分が単独で検出されている上に、伴出遺物が無い事、そしてこれらの遺跡の周辺部には、大館や小屋塚の様な中期の遺跡以外に、縄文時代早期の大館堤、大新・^{注27)}館坂などの各遺跡がある事などから、その所属時期を特定することがかなり難しい。この溝状ピットの時期をさらに限定して考えるためには、さらに広範囲な発掘調査と熟考が必要である。

いずれ、この点に関する考察は今後の研究にまかせることにし、一応、前九年Ⅱ遺跡の溝状ピットの所属時期を縄文時代全般に位置付け、特に縄文時代中期の所産である可能性の強い事を指摘するに留めたい。

(3) 遺跡の性格

最後に、前九年Ⅱ遺跡の溝状ピットが縄文時代の陥し穴であると仮定した場合、その存在意義について若干ふれてみたい。

既に述べた様に、諸葛川や木賊川などによって開析される盛岡市北西部～滝沢方面の台地上には、縄文時代の遺跡が数多く存在している。その中には幾つかの集落跡も見られるが、そのほかに、滝沢村の大緩^{注29)}、高柳^{注30)}、大久保^{注31)}、高屋敷Ⅰ・Ⅱ^{注32)}、盛岡市前九年Ⅰ・Ⅱ、長畑などの集落周辺の狩場、採集場あるいは、それらに付随するキャンプ地としての色彩の濃い遺跡が数多く見られる。これらの遺跡は、いずれも広い台地上の緩やかな起伏の中の比較的高所に立地しており、そこからは、大抵の場合、溝状ピットが発見されている。しかも、その発見数は、発掘範囲の比較的狭い前九年Ⅰ・Ⅱ、長畑の3遺跡を除いて、各々5～33を数える。勿論、その数自体も決して多いとは言えないが、これらの遺跡の範囲の広い事と考えれば、未発掘区域の分も含めた、溝状ピットの総数は遥かに大きいものになるであろう。

その全てが同時期に共存していたとは思われないが、いくつかの溝状ピットは、ある一定の規則性を有しながら、同時期に並存していたと推定される。

この様に見て来た場合、上記の遺跡や遺構が、盛岡市北西部～滝沢村方面の台地上に多く見られるという事は、一体何を意味するのであろうか。それは単純に考えて、このピットを用いて、捕るべき獲物がこの付近一帯に多く生息していた。という事を意味すると思われる。

その獲物が何であったのか、今のところよく解らないが、各遺跡で発見された溝状ピットの規模から考えて、かなり大きな動物ではなかっただろうか。このような動物の多く棲む遺跡付近の古環境についても、充分解明されていないが、おそらく、この付近に住んだ古の人々は、陥し穴を使った、追い込み猟やわな猟に従事していたのであろう。

いずれ、この溝状ピットとそれに伴う遺跡群の時期や性格については、未知な部分が多く、今後の研究に期待される面が大きい。

注 記

- (1) 岩手県教育委員会 1977 「昭和51年度 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」
同 上 1979 「東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」 岩手県文化財調査報告書第35集（本書）
- (2) (1)と同じ文献による
- (3) (1)と同じ文献による
板橋 源 1959 厨川柵擬定地盛岡市権現坂発掘概報 「岩手大学学芸学部研究年報」 第14巻第1部
- (4) 板橋 源 1969 「盛岡市安倍館古代末期城柵遺跡」 盛岡市教育委員会
佐々木博康
- (5) 吉田 義昭 1970 盛岡市大新遺跡 「奥羽史談」第54号 奥羽史談会
武田 良夫
- (6) 草間 俊一 1968 「盛岡市下厨川小屋塚遺跡調査略報」 岩手大学歴史学研究室
- (7) 岩手大学考古学研究会 1978 「大館町遺跡」 盛岡市教育委員会
- (8) 岩手県教育委員会 1974 「埋蔵文化財分布地図」
- (9) 中川 ほか 1963 「北上川上流沿岸の第四系および地形」『地質学雑誌』 第69巻第811号
- (10) 日本国有鉄道盛岡工事局 1975 「東北幹494km～497km地質調査報告書」（国鉄盛岡工事局蔵本）
奥山ボーリング株式会社
- (11) 「Tピット」という用語は、北海道方面の研究者に多用されている。「V字状ピット」という用語は、岩手県内の研究者などに多用されている。その他、この種の遺構は、その形状から「ワレ目状ピット」「U字状ピット」「V字状溝」などとも呼ばれている。また、報告書によっては「陥し穴状遺構」一湯沢遺跡、「溝状ピット遺構」一発茶沢(3)遺跡、「特殊遺構」一西桔梗遺跡、と呼んでいる例も見られる。
- (12) 函館市教育委員会 1977 「函館空港第4地点・中野遺跡」
- (13) 岩手県埋蔵文化財センター 1978 「都南村湯沢遺跡」
- (14) 同 上 1979 「岩手県文化財発掘調査略報（昭和53年度分）」
- (15) 同 上 1978 「岩手県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）」
- (16) 岩手県教育委員会ほか 1976 「宮手遺跡一昭和51年現地説明会資料」
- (17) 同 上 1979 「昭和53年度分 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査略報」
- (18) (14)と同じ文献による。

- (19) 岩手県教育委員会ほか 1976 「南矢中遺跡、昭和50年度第Ⅱ期現地説明会資料」
- (20) 溝状ピットの形態分類は(11)の文献のP328～355、(26)の高柳遺跡の項、および参考文献に掲げた「札幌市文化財調査報告書XⅣ」などで試みられている。
- (21) 以上の仮説のほかに、発茶沢(3)遺跡の報告では、歴史時代以降の放牧場に付設された防護施設の可能性も示唆している。また、名久井文明氏らによって、後述する「便所跡」説が提唱されている。
- (22) 「Tピット」という名称はトラップピット (trap-pit) という事で、意味するところは、要するに陥し穴ないし、その類似施設という事らしい。なお、この用語は下記の文献中に初現するとされている。
- 函館市教育委員会 1968 「函館空港整備事業の内遺跡発掘調査実績報告書一函館空港第1遺跡」
- (23) 渡辺俊一 1978 厚真Ⅰ遺跡のTピットについて 「郷土の研究」第4号
新沼・高橋ほか 1976 仮称V字形溝状遺構について 「フィールドノート」第24号
- (24) 名久井文明 1977 北日本における石器時代の溝状ピットについて 「岩手県高等学校年報 社会科研究」第18号
名久井文明 1979 東北地方早期縄文土器と中野遺跡 「函館空港第4地点・中野遺跡」
函館市教育委員会
- (25) 霧ヶ丘遺跡調査団 1970 「霧ヶ丘」
- (26) (13)と同じ文献、他による。
- (27) 岩手県 1961 「岩手県史」第1巻 上古篇・上代篇
- (28) 前九年一丁目地内に位置している。前九年Ⅰ遺跡の調査の際に発見されているが、その範囲は未確認である。
- (29) 岩手県教育委員会ほか 1977 「昭和51年度 東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査略報」
同 上 1977 「高柳・大緩遺跡跡合同現地説明会資料No.2」
岩手県教育委員会ほか 1976 「滝沢地区遺跡発掘調査現地説明会資料一久保遺跡・大緩遺跡・高柳遺跡」
- (30) (29)と同じ文献による。
- (31) (29)と同じ文献による。
- (32) 岩手県教育委員会ほか 1977 「高屋敷Ⅱ遺跡発掘調査現地説明会資料」
同 上 1977 「高屋敷Ⅲ遺跡現地説明会資料(第1次)」
同 上 1977 「高屋敷Ⅲ遺跡現地説明会資料(第2次)」

参考文献

なお、溝状ピット、その他陥し穴状遺構に関して、包括的に論じた文献資料としては、注記(23)の文献の他に、下記のもの掲げられよう。

- ① 石本省三 1976 Tピットの謎 「はこだて」5号
- ② 宮沢寛
今井康博 1976 縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題—いわゆる落とし穴について 「調査研究集録」第1冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- ③ 今村啓爾 1976 縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較 「物質文化」第27号 物質文化研究会
- ④ 内山真澄 1977 V・第2章 札幌S267・268遺跡の土壌群—いわゆるTピットについて 「札幌市文化財調査報告書XⅣ」 札幌市教育委員会

第3表

溝状ピット発見遺跡一覧表

No.	遺跡名	市町村名	立地	主な遺構	主な出土遺物の時期	調査年度	
01	三崎Ⅲ	久慈市	台地辺縁部、平坦面	溝状ピット	縄文中、弥生	1977	
02	長瀬A	二戸市	〃	住居跡	奈良～平安、縄文	1976	
03	長瀬B		〃	住居跡、溝状ピット	〃	1977	
04	長瀬C		〃	住居跡、掘立柱建物跡	奈良～平安、中世	〃	
05	長瀬D		〃	住居跡、掘立柱建物跡	〃	〃	
06	上田面		〃	住居跡	奈良～平安	1978	
07	田中3	一戸町	舌状台地辺縁部	住居跡、ピット類	縄文後、中世以降	1977	
08	田中4		〃	住居跡、ピット類	縄文、奈良～平安	〃	
09	田中5		〃	住居跡、ピット類	〃	〃	
10	荒屋Ⅱ	安代町	台地辺縁部	溝状ピット	縄文中	1978	
11	野駄	松尾村	丘陵辺縁部	住居跡、ピット類	縄文早～晩、平安	〃	
12	高柳	滝沢村	低平丘陵緩斜面	溝状ピット、ビーカー形ピット	縄文中～後期	1976～77	
13	大緩		〃	溝状ピット、ビーカー形ピット	縄文中～晩、平安	〃	
14	大久保		〃	溝状ピット	縄文中～後期	1976	
15	卯遠坂		丘陵辺縁部緩斜面	住居跡、ピット類	縄文後期	1977	
16	下平		低平な段丘辺縁部	住居跡、溝状ピット	縄文晩期	〃	
17	長畑	盛岡市	河岸段丘上微高地	ピット類、埋甕遺構	縄文中期	1976	
18	前九年Ⅰ		〃	竪穴住居跡、フラスコ状ピット	縄文早・中・(晩)?期	〃	
19	前九年Ⅱ		〃	ピット類	不明	〃	
20	繫Ⅵ		段丘辺縁部	住居跡	縄文、奈良～平安	1977	
21	高松		丘陵緩斜面	溝状ピット	縄文後期?	1978	
22	湯沢	都南村	段丘緩斜面	住居跡、ピット類	縄文中期末～後期初頭	1977	
23	湯沢A		段丘辺縁平坦地	竪穴住居跡、溝状ピット	平安	1975	
24	湯沢B		〃	周溝、ピット類、溝状ピット	〃	〃	
25	百目木		〃	住居跡	縄文中、平安	1978	
26	稲荷		段丘緩斜面	竪穴住居跡、土壇	平安	1974	
27	下永井	矢巾町	微高地辺縁部	住居跡	平安、近現代	1975	
28	一本松		段丘辺縁平坦地	竪穴住居跡、焼土ピット	平安	〃	
29	白沢		段丘辺縁平坦地	竪穴住居跡、古墳	縄文早・晩、弥生、奈良、平安	1973	
30	大渡野		河岸段丘上の辺縁平坦部	住居跡	縄文早、弥生、平安	1974	
31	上平沢新田		段丘上辺縁部平坦地	住居跡、ピット類	縄文～平安	1975	
32	栗田Ⅲ	紫波町	段丘辺縁部	掘立柱遺構	縄文早、平安、江戸以降	1978	
33	稲村		台地辺縁部	住居跡、ピット類	平安	〃	
34	宮手		微高地辺縁部	ピット類	縄文早、平安	1975～76	
35	西田		丘陵北辺部	住居跡、墓塚、ピット群	縄文早・中、平安	1977	
36	墳館		丘陵東辺部	住居跡、墓、土塁	弥生、平安、中近世	1975～76	
37	古館駅前	江釣子村	段丘辺縁部	竪穴住居跡、溝状ピット	縄文、奈良～平安	1973	
38	古館橋		〃	竪穴住居跡、溝状ピット	平安	〃	
39	杉ノ上Ⅱ		〃	住居跡、溝、ピット	〃	1973～74	
40	大瀬川C		石鳥谷町	丘陵	館跡、掘立柱建物跡	平安・中世	〃
41	梅ノ木B-Ⅰ		和賀町	段丘辺縁平坦地	館跡、掘立柱建物跡	〃	1974
42	梅ノ木B-Ⅱ	〃		竪跡	〃	〃	
43	梅ノ木B-Ⅵ	〃		住居跡、溝、ピット類	縄文中、平安、中世	1975	
44	猫谷地	北上市	〃	住居跡、ピット類	縄文後、古墳、奈良、平安	1973～74	
45	藤沢Ⅰc		段丘辺縁部	住居跡、溝状ピット類	奈良～平安	1976～77	
46	藤沢Ⅰd		〃	住居跡、溝状ピット類	〃	〃	
47	高前田		扇状地性台地上の小谷沿岸	住居跡、溝状ピット類	平安前期	1974	
48	上大谷地		〃	住居跡、ピット類	平安	1975	
49	中筋	金ヶ崎町	〃	住居跡、ピット類	〃	〃	
50	相去		〃	竪穴住居跡、竪跡、ピット類	縄文晩、平安	1973	
51	二子城坊館		河岸段丘辺縁	館跡、ピット類	縄文中、中世	1974	
52	つま根		段丘辺縁平坦面	掘立柱建物跡、竪穴住居跡	?	?	
53	林前		水沢市	低位段丘	住居跡、掘立柱建物跡	平安	1978
54	南矢中	段丘辺縁部		住居跡、周溝遺構、溝状ピット	平安	1975	
55	西大畑	緩斜面		住居跡、溝、掘立柱建物跡	縄文・奈良～平安	1974～75	
56	袖谷地	扇状地性段丘上の微高地辺縁部		住居跡、ピット類	平安	1974	

調査主体者	文 献	資 料	
久慈市教育委員会	「三崎(Ⅲ)遺跡発掘調査報告書」	久慈市教育委員会	1978
岩手県教育委員会	「長瀬A遺跡、現地説明会資料」	岩手県教育委員会ほか	1976
（財）岩手県埋蔵文化財センター	「二戸B・P関連長瀬遺跡現地説明会資料」	（財）岩手県埋蔵文化財センター	1977
〃	「昭和52年度分 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」		1978
〃	「二戸B・P上田面遺跡現地説明会資料」	（財）岩手県埋蔵文化財センター	1978
一戸町教育委員会	「田中遺跡、現地説明会資料」	一戸町教育委員会	1977
〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃
（財）岩手県埋蔵文化財センター	「53年度分 岩手県文化財発掘調査略報」	（財）岩手県埋蔵文化財センター	1979
〃	「野駄遺跡現地説明会資料」	（財）岩手県埋蔵文化財センター	1978
岩手県教育委員会	「東北縦貫自動車道関係 滝沢地区遺跡発掘調査現地説明会資料」	岩手県教育委員会	〃
〃	〃	〃	〃
〃	「昭和51年度 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査略報」	岩手県教育委員会	〃
〃	〃	〃	〃
（財）岩手県埋蔵文化財センター	「昭和52年度分 岩手県文化財発掘調査略報」	（財）岩手県埋蔵文化財センター	1978
岩手県教育委員会	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃
〃	「昭和51年度 東北新幹線関係 埋蔵文化財発掘調査略報」	岩手県教育委員会	1977
（財）岩手県埋蔵文化財センター	「昭和52年度分 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」	（財）岩手県埋蔵文化財センター	1978
岩手県教育委員会	「高松遺跡緊急発掘調査略報」	岩手県教育委員会	1978
（財）岩手県埋蔵文化財センター	「都南村湯沢遺跡」	（財）岩手県埋蔵文化財センター	1978
岩手県教育委員会	「昭和50年度 東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査略報」	岩手県教育委員会	1976
〃	「百目木遺跡、第2・3回現地説明会資料」	都南村教育委員会	1978
〃	「岩手県内溝状ピット検出遺跡一覧表」	岩手県教育委員会文化課調査班	1977
〃	「昭和50年度 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」	岩手県教育委員会	1976
〃	「昭和50年度 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査略報」	岩手県教育委員会	1976
〃	「昭和48年度 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」	岩手県教育委員会	1974
〃	「大渡野遺跡発掘調査現地説明会資料」	岩手県教育委員会	1974
〃	「上平沢新田遺跡現地説明会資料」	岩手県教育委員会	1975
〃	「栗田IV遺跡、現地説明会資料」	岩手県教育委員会	1978
（財）岩手県埋蔵文化財センター	「稲村遺跡、現地説明会資料」	（財）岩手県埋蔵文化財センター	1978
岩手県教育委員会	「宮手遺跡、現地説明会資料」	岩手県教育委員会	1976
〃	「昭和52年度 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」など	岩手県教育委員会	1978
〃	「墳館遺跡、現地説明会資料」	岩手県教育委員会	1976
〃	〃	〃	〃
〃	「昭和48年度 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」	岩手県教育委員会	1974
〃	〃	〃	〃
〃	「大瀬川館発掘調査現地説明会資料」	岩手県教育委員会	1978
〃	〃	〃	〃
〃	「岩手県内溝状ピット検出遺跡一覧表」	岩手県教育委員会文化課調査班	1978
〃	「梅ノ木B現地説明会資料」	岩手県教育委員会	1975
〃	「猫谷地遺跡 1974」	岩手県教育委員会	1974
（財）岩手県埋蔵文化財センター	「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報 昭和52年度分」	（財）岩手県埋蔵文化財センター	1978
〃	〃	〃	〃
岩手県教育委員会ほか	「高前田遺跡現地説明会資料」	岩手県教育委員会	1974
北上市教育委員会	「上大谷地遺跡調査概報」	北上市教育委員会	1976
〃	「高前田遺跡現地説明会資料」	岩手県教育委員会	1974
岩手県教育委員会	「相去遺跡現地説明会資料」	岩手県教育委員会	1973
北上市教育委員会	「二子城坊館遺跡調査報告書」	北上市教育委員会	1977
?	「岩手県内溝状ピット検出遺跡一覧表」	岩手県教育委員会文化課調査班	1978
水沢市教育委員会	「林前遺跡現地説明会資料」	水沢市教育委員会	1978
岩手県教育委員会	「南矢巾遺跡現地説明会資料」	岩手県教育委員会	1975
〃	「西大畑遺跡現地説明会資料」	岩手県教育委員会	1974
〃	「袖谷地遺跡現地説明会資料」	岩手県教育委員会	1974

No	遺跡名	市町村名	立地	主な遺構	主な出土遺物の時期	調査年度
〔北海道〕						
01	S 153	札幌市	台地辺縁部	ビット類	縄文晩期末	1973～74
02	S 263	"	"	溝状ビット	縄文中・続縄文	1976
03	S 263	"	"	"	"	"
04	S 265	"	"	住居跡、ビット類	縄文早・中・晩、続縄文	1975
05	S 267	"	"	住居跡、溝状ビット	"	1975～76
06	S 268	"	"	溝状ビット	縄文中期	1976
07	S 269 A・B	"	"	"	"	"
08	T 210	"	"	ビット類、墓跡	縄文早～中・晩、続縄文前期初頭	1975
09	美沢 1	千歳市	河岸段丘辺縁部	住居跡、土塚墓、各種ビット	縄文後・晩期	1976
10	美々 4	"	低い "	土塚墓、各種ビット	"	"
11	厚真 1	厚真町	台地辺縁部	住居跡、溝状ビット	縄文中期後葉	"
12	御殿山	静内町	河岸段丘	土塚墓、溝状ビット	縄文後期	1961
13	大津 B	松前町	丘陵地緩斜面	住居跡	縄文	1972
14	柵石	"	"	溝状ビット、ビット類	縄文晩期	1975
15	日吉町 I	函館市	"	住居跡、溝状ビット	"	1973～77
16	中野 A	"	"	"	縄文早期後半	1976
17	中野 B	"	"	"	縄文早期前半～後半	1975～76
18	函館空港第4地点	"	"	"	縄文前期前半	1974～75
19	西桔梗 B ₁	"	台地辺縁部	溝状ビット	縄文前～中期	1972
20	" B ₂	"	"	ビット類	続縄文(恵山式期)	"
21	" E ₁	"	"	住居跡、ビット類	縄文早～前期	"
22	森越	知内町	"	住居跡	縄文前・中期	1974
23	方和	乙部町	?	?	?	?
〔青森県〕						
01	発茶沢 (3)	六ヶ所村	丘陵地南縁	溝状ビット	縄文後期	1974
02	古街道長根	五戸町	緩傾斜の舌状台地	ビット類、溝状ビット	縄文早～後期	1974～75
03	新納屋 (1)	六ヶ所村	沖積台地	溝状ビット	縄文早～前期	1975
04	千歳 (13)	"	台地北緩斜面	ビット類	縄文早～後期	1974
05	発茶沢 (2)	"	丘陵地	ビット類	?	1972
06	源常平	浪岡町	舌状台地	住居跡、墓塚、他	縄文後・晩期、平安	1976
〔秋田県〕						
01	秋田城	秋田市	丘陵上の緩斜面	住居跡、掘方柱建物	奈良～平安	1976
02	下藤根	平鹿町	自然堤防	住居跡	"	1975
〔福島県〕						
01	柿内戸	富久町	段丘辺縁部	住居跡、ビット類	奈良～平安	?
〔埼玉県〕						
01	坂東山 B 地点	入間市	丘陵平坦面	住居跡、炉穴状遺構	縄文	1968
〔千葉県〕						
01	復山谷	白井町	沢状の傾斜地	Tビット	旧石器、縄文前、弥生、古墳	1976～77
02	上の台	千葉市	舌状台地	住居跡、ビット類	縄文、奈良、平安	1972～74
〔東京都〕						
01	多摩ニュータウン No.52	多摩町	丘陵地辺縁部	住居跡、配石遺構、ビット類	縄文早・前・中期	1966
02	" 35	"	丘陵地緩斜面	ビット類	縄文	1968
03	" 51	"	丘陵地緩斜面	ビット類	縄文早期	1967
04	" 88	"	丘陵地緩斜面	ビット類、集石、遺構	縄文	1968
05	" 99	"	丘陵地平坦面	ビット類、炉穴	"	"
06	松山廃寺 No.3	八王子市	丘陵丘根部	ビット類	縄文前・中・後期	1972
07	" 6	"	丘陵丘地平坦部	ビット類	"	"
08	池潤	"	?	?	?	?
〔神奈川県〕						
01	霧ヶ丘	横浜市	丘陵地緩斜面	ビット類	縄文早・前期	1972
〔長野県〕						
01	城の平	茅野市	平坦面	住居跡、ビット類	縄文中期	1965
02	扇平	岡谷市	段丘辺縁部	住居跡、配石遺構	縄文前期末～中期初頭	1973

調査主体者	文 献	資 料	
札幌市教育委員会	「札幌市S-153遺跡の調査」『考古学ジャーナル』No107	ニューサイエンス社	1975
"	「札幌市文化財調査報告書X V」	札幌市教育委員会	1977
"	"	"	"
"	"	"	"
"	「 " X IV」	"	"
"	"	"	"
"	「 " X V」	"	"
"	「 " X III」	"	1976
北海道教育委員会	「美沢川流域の遺跡群 I」	北海道文化財保護協会	1977
"	"	"	"
苫小牧市教育委員会	「苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財発掘調査概要報告書 I」	苫小牧市教育委員会	1978
?	「御殿山墳墓群について—第二次発掘報告」『考古学雑誌』第四六巻四号	日本考古学会	1961
松前町教育委員会	「松前町大津遺跡発掘報告書」	松前教育委員会	1974
"	「鬼石B、柵石遺跡発掘調査報告書」	"	1976
北海道教育委員会	「函館市日吉町 I 遺跡」	北海道文化財保護協会	1978
函館市教育委員会	「函館空港第4地点、中野遺跡」	函館市教育委員会	1977
"	"	"	"
"	「函館空港第4地点遺跡」『考古学ジャーナル』No105	ニューサイエンス社	1975
函館圏開発事業団	「西桔梗」	函館圏開発事業団	1974
"	"	"	"
"	"	"	"
"	「森越一繩文前中期の竪穴住居遺跡」	知内歴史研究会	1975
乙部町教育委員会	「方和」	乙部町教育委員会	1976
青森県教育委員会	「むつ小川原開発地域関係埋蔵文化財試掘調査概報」	青森県教育委員会	1975
"	「五戸町中ノ沢西張遺跡、古街道長根遺跡」	"	1976
"	「むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報」	"	"
"	「千歳遺跡(13)」	"	1975
"	「青森県埋蔵文化財報告書」第9集	"	1973
"	「源常平遺跡発掘調査報告書」	"	1977
秋田市教育委員会	「昭和51年度秋田城跡発掘調査概報」	秋田市教育委員会	1977
秋田県教育委員会	「下藤根遺跡発掘調査報告書51年」	秋田県教育委員会	1976
福島県教育委員会	「東北新幹線関係発掘調査略報 V」	福島県教育委員会	1978
埼玉県教育委員会	「坂東山」	埼玉県教育委員会	1973
千葉県文化財センター	「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VI」	千葉県埋蔵文化財センター	1978
上ノ台遺跡調査団	ほか「千葉、上ノ台遺跡第II次調査概報」『先史』9	駒沢大学考古学研究会	1975
多摩ニュータウン遺跡調査会	『多摩ニュータウン遺跡調査報告書III』	多摩ニュータウン遺跡調査会	1967
"	『 " III・V・VI』	"	1966
"	"	"	"
"	"	"	"
"	"	"	"
寺田遺跡調査会	「松山廃寺」	八王子市寺田遺跡調査会	1973
"	"	"	1973
池潤遺跡調査会	「池潤遺跡の略報」	池潤遺跡調査会	1973
霧ヶ丘調査団	「霧ヶ丘」	霧ヶ丘遺跡調査団	1973
尖石考古博物館	「城戸平竪穴群遺構遺跡」『蓼科』	尖石考古博物館	1966
岡谷市教育委員会	「扇平遺跡」郷土の文化財7	岡谷市教育委員会	1974

なが はた 遺 跡
長 畑 遺 跡

遺 跡 記 号：NH

所 在 地：盛岡市前九年三丁目 3 - 2 他

調 査 期 間：昭和51年 4 月 9 日～ 5 月15日

調 査 対 象 面 積：6370m²

平 面 実 測 基 準 点：東京起点 496.500km (JA50)

基 準 高：海拔142.90m

1. 位置と立地 (第Ⅵ図P 350、第Ⅶ図P 351)

〈位置と立地〉

長畑遺跡^{ながはた}は、盛岡市前九年三丁目地内に所在する。ここから北上川・雫石川・中津川の合流点までは南東方向に約4 km離れている。遺跡所在地付近は、現在、畑地や宅地になっているが、そのすぐ西側は東北本線に切られている。南側には、館坂橋方面から青山町方面に抜ける県道が走り、東北本線と交差している。この県道周辺部は、近年、市街地化が著しく進行しており、長畑遺跡の所在地一帯も、間もなく、宅地化される状況を呈している。

遺跡の立地形からみると、長畑遺跡は、北上川とその支流の雫石川に沿ぐ諸葛川^{もろくず}や木賊川^{とくさ}に挟まれた、河岸段丘上に立地している。この段丘は、北上川東岸部の高松段丘に相当するが、先の小河川を初めとする各小河川によって、著しく開析されている。そのため、この段丘上には、南北方向に走る浅い谷が幾条も見られる。長畑遺跡は、そのような谷の一つ、県営運動公園方面から夕顔瀬町方向に開いた木賊川の谷に接する段丘面の辺縁部に立地している。

〈周辺の遺跡〉

長畑遺跡の周辺には、観武町^{み たけ}・青山^{あおやま}・境橋^{さかいばし}・大新^{だいしん}・大館^{おほのつとむ}・大館町^{おほのつとむ}・小屋塚^{こやづか}・安倍館^{あべ}・厨川柵^{くりやがわのさく}擬定地^{ぎてい}・前九年Ⅰ^{ぜんくわん}・Ⅱなどの縄文時代～平安時代の各遺跡がある。そのうち、厨川柵擬定地以下の3遺跡は、東北新幹線ルートに関わる遺跡として調査されている^{注(1)}。

以上の各遺跡のほかに、これらの遺跡の西方には、諸葛川の低地を挟んで幅^{あし}・高柳^{たかやなぎ}・大緩^{おほのゆるみ}・大久保^{おほくぼ}・高屋敷^{たかやしき}などの諸遺跡が、東北縦貫自動車道沿いに南北に並んでいる^{注(2)}。その他、安倍館遺跡^{あべ}の南方部・館坂橋付近の台地上には、未登録の縄文時代の遺跡1ヶ所が存在している^{注(3)}。

今まで述べてきた各遺跡のうち、大館^{おほのつとむ}・大新^{だいしん}などの遺跡からは、縄文時代早期の遺物が発見されている^{注(4)}。大館町遺跡^{おほのつとむ}は、縄文中期の大集落跡^{注(5)}である^{注(6)}。小屋塚^{こやづか}・前九年Ⅰ^{ぜんくわん}・境橋^{さかいばし}・青山^{あおやま}、それに先に述べた大新^{だいしん}などの各遺跡は、大館町遺跡^{おほのつとむ}との関連から、付随的な役割りの予想される小遺跡である。厨川柵^{くりやがわのさく}は、前九年の役の際の古戦場として著名であるが、その位置や規模については未だ確定していない。現在のところ、一応、館坂橋から天昌寺にかけての台地辺縁部が、その最有力擬定地と見なされている^{注(7)}。また、安倍館^{あべ}は、岩手郡一帯を支配した豪族、工藤氏の本拠地として有名である^{注(8)}。

この様に、長畑遺跡の周辺部には各種の著名な遺跡があるものの、近年の著しい都市化の波に押されて、急速に破壊が進行している。そのため、これらの遺跡の保存のために早急な保護対策の実施がせまられている。

2. 調査の方法と経過

盛岡駅以北の東北新幹線は、しばらく、東北本線の東側を平行しながら、さらに北へ向かう。そして、長畑遺跡付近で緩いカーブを描きながら、東北本線を渡り、西側にその進路を移してゆく。今回の調査は、この東北新幹線の立体交差部分に関わる橋脚建設予定地の、長さ約255m、巾9～24m、総面積約6,370m²の範囲を対象に行なったものである。

〈方法〉

調査は、全て序文2で述べた方法に準じて行なった。なお、調査区全体を被う、3m×3m単位の方眼座標の基準原点は、東北新幹線の中軸線上の東京起点496,500kmに置き、ここをJA50と名付けた。また、その際の基準経線は、JA50と同一中軸線上の東京起点496,540km間を結ぶ直線と、その延長線をあてた。この基準経線は、本書掲載地形図の北の方位に対し、1°30′00″西に偏っている。

なお、高度測量に当たっては、基準高を海拔144.30mに統一する様にした。

〈経過〉

遺跡の調査は、1976年の4月9日から5月15日まで行なった。4月9日から4月12日までは、調査区内の各所に測量用基準点を設置した。4月13日から23日までは、遺構検出のために、調査区全域にわたる粗掘り作業を行なった。その結果、G区で、縄文時代の埋甕遺構が発見されたため、その部分の調査を前記粗掘り作業と併行して、4月16日から19日まで行なった。また、I区・J区でピット4基が発見されたので、その調査を4月20日から5月15日まで行なった。以上のほか、GD65グリッド内に土層観察用トレンチを設け、その調査を4月15・16の両日行なった。なお、調査に先立って、4月9日には、工事関係者と調査の期日や方法等について協議を行なった。

3. 調査の結果

〔1〕 基本層序

今回の調査では、調査区内の土層堆積状況を知るために幾つかの土層観察用セクションベルトを設けたが、その所見によれば、各セクションベルト内の土層堆積状況には若干の差が認められるものの、ほとんど同じと云える。そこで、ここではGD65グリッド内の層序をもとに、調査区付近の土層堆積状況についてみてゆく事にしたい。

第1表 土層注記



第2図 土層断面図

第2図でも解る様に、長畑遺跡付近では、広い意味での表土層に属するI層が比較的厚く堆積している。この層は、厚さ0.7m内外の黒褐色～暗褐色のやや粘りのある壤土質の土層（クロボク）よりなるが、成分や色調の違いにより、さらに大きく3層に分けられる。このうち、I a層は耕作土で、著しく攪乱を受けている。その層厚は、0.3m内外を測る。I b層は、比較的攪乱の少ない層で、その中にごく少量の黄褐色のスコリアや火山灰が混入し、スギナなどの植生根が多く見られる。その層厚は、I aと同様0.3m内外を測る。I c層は、前2者より色が薄く、暗褐色を呈する層で、I層からII層への漸移層である。また、I b層中の成分にII層の火山灰が混入した層で、幾分シルト質の成分が多く含まれている。

II層は、直径4mm大の風化した軽石や2mm大のスコリアを含んだ褐色の火山灰層で、層全体が固くしまっている。層厚は0.08～0.24mを測る。

III層は、火山砂とスコリアからなる層であるが、そのうちIII a層は、暗赤褐色の直径1～5mm大のスコリアと直径1mm内外の火山砂の混合層である。この層は乾燥すると白色を帯び、その層厚は0.2m内外を測る。III b層は、ほとんど直径0.5～1mm大の火山砂からなる層である。この層は、薄いうえに各所で途切れているが、広く分布するものと思われる。その層厚は平均0.04～0.1m程度を測る。

III層の下には、粘土層を主体としたIV層が続いている。この層は、さらにいくつかの層に分けられると思われ、その最上層は、明褐色を呈している。その地下1.8m以下には、茶褐色の粘土層が続いている。IV層の下限は、地下1.70mまで掘り下げたトレンチの範囲内では確認できなかったが、ボーリング棒の刺突探査の結果、地下2.9m付近まで達する事は确实であると予想された。そして、この深度付近に、地下水層の上限があるらしい。

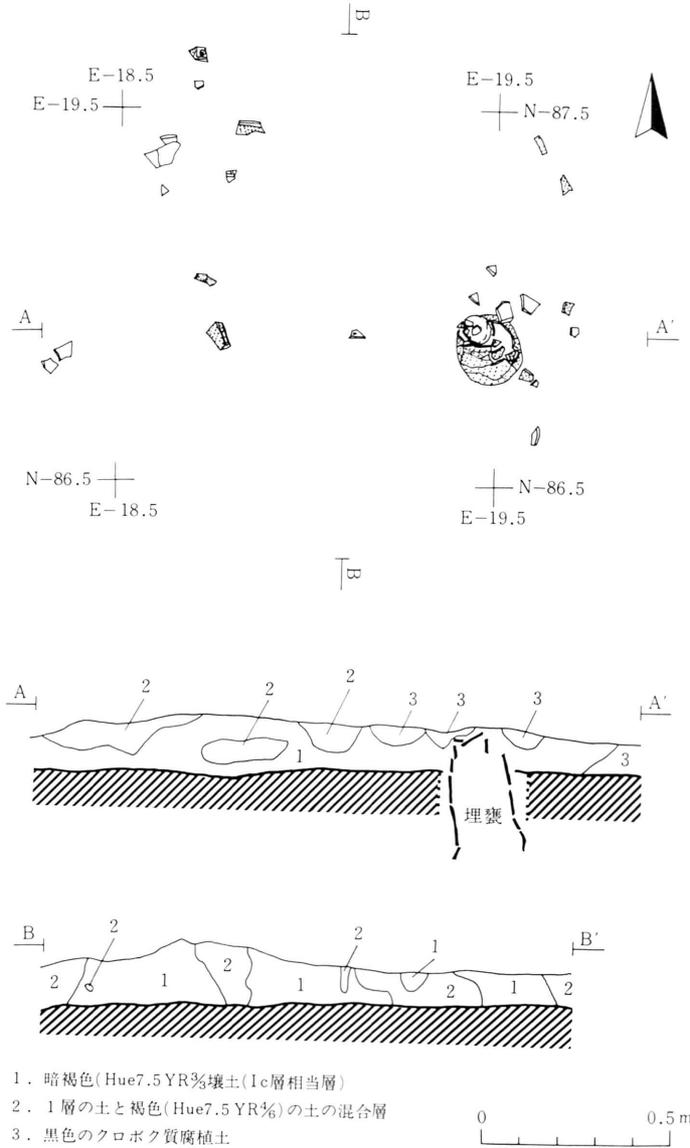
以上の各層のうち、人工遺物の発見される層はI層であるが、今回の調査で発見された縄文時代の遺物は、そのうちのI a層下部からI c層上部にかけての部分で発見されており、遺構も大体、この付近から掘り込まれているものと推定された。

〔2〕 発見された遺構と遺物

(1) 発見された遺構

調査の結果、次の様な遺構が発見された。

- 埋襲遺構…………… 1
(縄文時代)
- ピット類…………… 4
(そのうち近
現代…………… 1、
時期不詳… 3)



A. GB68埋襲遺構

(第3図、写真2-1・2)

〔位置〕 この遺構は、調査区の中央部東寄りのGA68・GB68両グリッドの境界部付近に位置している。

〔検出面〕 遺構検出作業の段階で、この両グリッド中のIb層下部から埋襲の一部をなす、土器片が若干検出された。しかし、埋襲施設の本体部分は、主としてIc層中から検出された。

〔検出状況〕 遺構周辺部の直径1.5mほどの範囲内のIb層下部～Ic層中には、埋襲の口辺～胴体部の破片が一部散在していた。そして、これ

第3図 GB68埋襲遺構周辺の土器片出土状況図

らの破片より、若干深い位置で倒立した形で埋められた土器の底部が、破損した状態で出土した。

〔形状・規模〕 この埋甕施設は、Ⅱ～Ⅲ層に相当する地山層を、土器が1個入るくらいの大きさに掘り込み、その中に、口辺部を破損した深鉢型土器を倒立状態で埋め込んだものである。

土器は、検出面より約0.3mほどの深さに埋め込まれていたが、底部には孔が穿けられていなかった。

土器とピットの壁の境界部には、Ⅱ層の土が突き固められた状態で入っていた。そのため、調査時の観察では、ピットの正確な形状や埋土をほとんど確認できなかった。ただ、埋められた土器の大きさから、直径0.2m内外、検出面からの深さ0.3m内外の円筒状ピットが想定された。

〔埋土〕 ピット内の埋土は、前の項でも述べた様に、埋甕の外側はスコリアや軽石を主体とした単一の土層で固められている。埋甕の中には、前記の埋土と同質の土が入っているが、そのしまりは粗である。

〔保存状態〕 遺構全体の保存状況は比較的良好であるが、埋められた土器は、土圧のため歪み、全体にヒビ割れが生じていた。

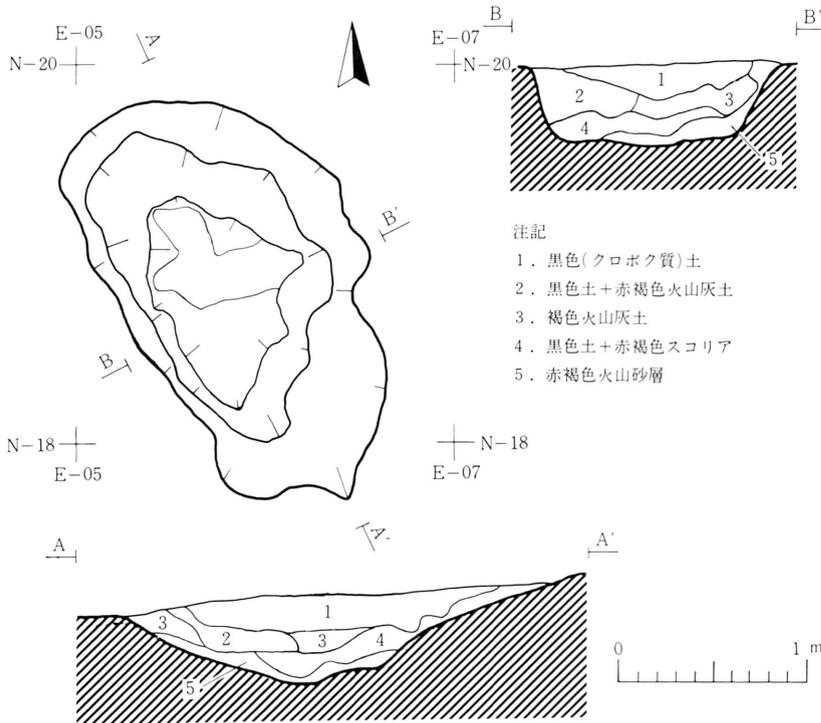
〔遺物〕 この埋甕に伴う遺物は発見されなかった。

B. ID50ピット (第4図、写真1-2)

〔位置〕 このピットは、調査区南方部のⅠ区の中央部付近に位置している。

〔検出面〕 遺構は、Ⅱ層上面で検出されたが、土層観察の結果、Ⅰb層上面付近から掘り込まれている事が解った。

〔形状・規模〕 このピットは、北西―南東方向に長い平面不整楕円形の舟底状ピットである。そ



第4図 ID50ピット平・断面図

の長さは2.4m、巾1.4mで、検出面からの深さは、最大0.48mを測る。ピットの底面は、やや傾向を変えながら、中央部で最も落ち込んでいる。

〔埋土〕 ピット内の埋土は5層よりなるが、全般的に、自然堆積に近い状態で堆積している。このうち、最上層は黒色のクロボク質土層である。2層は、1層の埋土に赤褐色の火山灰土を含み、全体的に黒褐色を帯びている。3層は、2層と同じ成分よりなるが、明色の成分が多いため、2層より暗褐色を帯びている層である。4層は、黒色土に直径1mm以下の赤褐色のスコリアをやや多量に含んだ層で、しまりは、やや粗である。5層は、直径0.5～0.05mm大の火山砂の層で、土のしまりは全体的に粗である。

〔遺物〕 ピット中からは、人工遺物が出土していない。

C. JD 031ピット (第5図、写真1-3)

〔位置〕 このピットは、調査区南端部近くのJ区のやや西寄り部分で発見されたピットである。

〔検出面〕 遺構の検出面はIc層上面であるが、Ib層に相当する層の上部から切り込まれているのが、土層観察の結果、解った。

〔形状・規模〕 このピットは、平面形がややいびつな円形を呈した、浅い皿状のピットである。その規模は直径1.1m内外で、検出面からの深さは0.1～0.2m内外を測る。ピットの底部は、北側の一部が凹んでいるものの、おおむね平坦である。

〔埋土〕 ピット内の埋土は、上下2層よりなる。そのうち1層は、やや粘りのある黒褐色のクロボク質土層で、2層は1とほぼ同質の土であるが、色調は極暗褐色を呈し、中には腐蝕した鉄製の針金が含まれていた。

〔遺物〕 針金が1点出土している。

〔重複関係〕 この遺構はJD032ピットと重複するが、埋土の観察によって、それより新期の遺構であることが知られた。

D. JD 032ピット (第5図、写真1-3)

〔位置〕 JD031ピットの東側に、それと一部重複しながら接している。

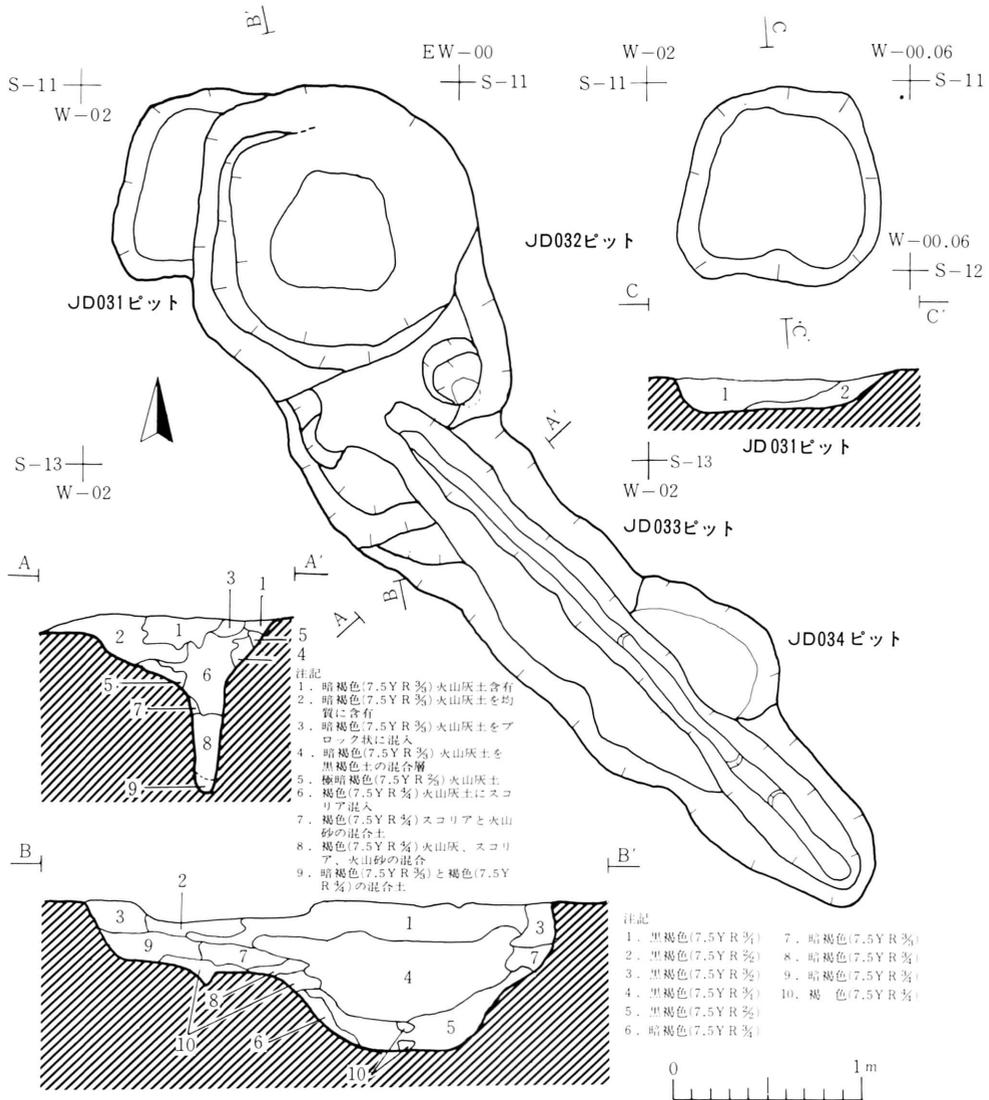
〔検出面〕 遺構は、Ic層中で確認されたが、JD031と同様、Ib層の上～中部分に掘り込まれている。

〔形状・規模〕 このピットは、平面がやや角張った不整楕円形のピットである。遺構は、大きく分けて南北2つの部分よりなる。

そのうち北側部分は、直径1.55m内外のやや角張った平面円形の摺鉢状ピットである。その南方部から西側にかけての側壁には、緩傾斜部が取りついている。その底部は0.6×0.6m内外の隅丸台形を呈し、最深部分で検出面より0.9m内外を測る。

南側部分は底の平らな鍋底状のピットになっており、東西方向の最大巾は1.22m、南北方向の最大巾0.94mで、その深さは、検出面より0.33m内外を測る。また、その東西壁際には、柱穴状ピットらしい付属遺構がみられる。そのうち、西側の遺構はほとんど痕跡だけで、深さは鍋底状ピットの底と同じである。東側のピットは、鍋底状ピットの底面から深さ0.21mを測る。

〔埋土〕 ピット中の埋土は、やや色調を異にする各種の黒褐色～暗褐色系の、やや粘りのある壤土質の埋土よりなる。



JD632ピット埋土のうち、1～5は基本土層図のI a層に類似している。
 6～9はI c層の成分に近似している。10はII層の土に近い。

第5図 JD031～034ピット平・断面図

層の堆積状況は、中央部分ではやや自然堆積に近い様相を呈しているが、側壁に近い部分では、人為的に埋め立てられた様な状況がみられる。

〔遺物〕 人工遺物は、いずれの層からも出土していない。

〔重複関係〕 このピットは、南東部にはJD033ピットなどを切っているが、その他にも、調査時の観察では十分な確認ができなかったが、完掘後の平面図等を見ると、2～3の遺構が重複していた可能性が推測される。

E. JD033ピット (第5図、写真1-3)

〔位置〕 JD032ピットの南東部に一部重複して、隣接している。

〔検出面〕 1c層の上面付近で検出された。

〔形状・規模〕 このピットは、南東―北西方向に長い溝状のピットである。その規模は、北西付近がCD032ピットに切られているので、やや不確かであるが、検出面上で長さ約3.6m、巾0.66mを測る。

ピットは全体として浅い舟底状部分と、その東寄りに大きく落ち込んだ深い溝状の部分よりなるが、その深さは、それぞれ検出面から0.28m・0.94mを測る。溝状部分の上巾は、0.20～0.36mで、下巾は0.1m内外、底部の長さ3.34mを測る。

〔埋土〕 ピット中の埋土は6層よりなるが、ほとんどが褐色～暗褐色系の土層である。そのうち1層は、やや暗い壤土質の暗褐色土層である。2層は1層と同質であるが、やや色調が明るい。3層は、やはり暗褐色を呈するが、褐色の火山灰土をブロック状に含んでいる。4層は、黒褐色のクロボク質の土と褐色の火山灰土の混合層で、全体的に暗褐色を呈している。5層は、極暗褐色のクロボク質の土である。6層は、褐色を呈した火山灰土層でスコリアを若干含んでいる。7層も褐色であるが、スコリアと火山砂よりなる層である。

〔遺物〕 ピット中からは遺物が発見されなかった。

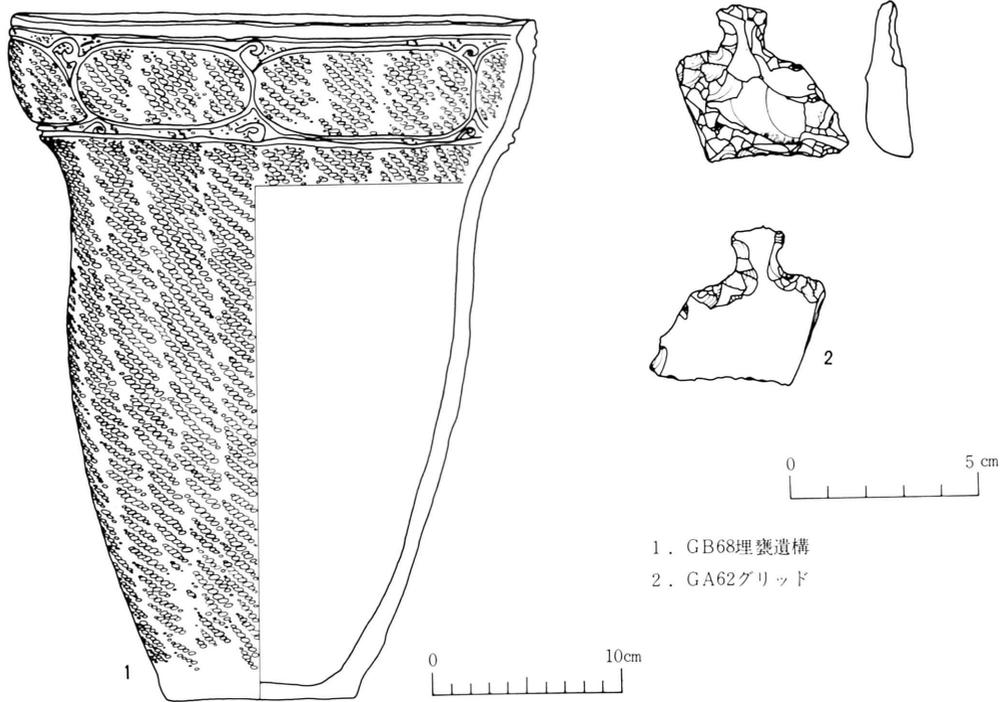
〔重複関係〕 このピットは、先のJD032ピットに切られている。そのほか、このピットにはJD034ピットと仮称するピット状の部分が付着している。しかし、JD034ピットとこのピットとの関連については、調査時には十分な確認ができなかった。

(2) 発見された遺物

今回の調査で、遺構中から発見された遺物としては、縄文土器1・針金1の計2点がある。そのうち針金は、現在、所在不明になっている。その他、遺構に伴わない遺物として、剥片石器1点が出土している。

A. 縄文土器 (第6図、写真2-3)

この縄文土器は、埋喪遺構から発見された、ほぼ完形に近いキャリパー型の深鉢型土器である。その規模は、高さ35.8cm・底径13.6cm・口径25.6cmを測る。その胎土は橙色を帯び、しま



第6図 出土遺物実測図

りがやや粗で、砂が多く混入している。

土器全体の形状を見ると、まず底部は平底である。そして、その胴部は中膨らみしながら、やや外傾し、頸部に続く。頸部でわずかにくびれた器壁は、そこからさらに、内湾気味に外傾し口辺部を形成する。この口辺部は平縁であるが、キャリパー型土器特有の中膨らみのした口縁部になっている。

土器の文様について見ると、その器壁の外表面全体には、左上がりの単節斜縄文が施されている。この単節斜縄文は、 $R < \frac{L}{L}$ 原体 (S字撚り原体) を縦回転させたものである。さらに、この地文の上に、口辺部では沈線文が施されている。口辺部の上・下端には、口縁に平行な沈線が1条ずつめぐる。そして、2つの沈線で挟まれた部分には、まず、横長の楕円文が相互に接続しながら周っている。楕円文と楕円文の接続部の上下には、早蕨状の沈線文が、各々1個ずつ施されている。

以上の様な形態や文様を有する土器は、この遺跡の南西1 kmに位置する大館町遺跡のⅢc群Ⅰ類の土器群の中にみられる。その他、類似した土器は、他にも北上市樺山・立花館・和賀町梅ノ木B-Ⅶ・江釣子村鳩岡崎・石鳥谷町大地渡・紫波町西田・盛岡市繫など、県内の各遺跡で

出土している。いずれも、縄文中期の大本8a式土器に比定される資料である。

B. 剥片石器 (第6図、写真2-4a~b)

埋甕遺構に近い、GA62グリッド内の1c層上面付近から、剥片石器が1点、単独で出土している。この石器はつまみのついた、いわゆる横型の石匕^{いしき}であるが、その身部は約 $\frac{2}{3}$ ほど欠損している。素材は硬質頁岩のフレークで、その片面にチップングが施こされ、横長の刃部が形成されている。その大きさは、縦4.1cm、横の残存長4.6cm、最大厚1.0cmである。剥片石器の時期は不明であるが、出土層位や平面的な位置関係からみて、先に述べた土器と同時期の遺物とみなし得るであろう。

4. まとめ

以上、長畑遺跡の調査によって解った事実について述べてきたが、これらの結果をもとに、今回の調査で得られた成果を簡単にまとめてみたい。

- (1) 長畑遺跡は、出土遺物からみて、少なくとも縄文時代中期中葉および近現代の2時期にまたがる遺跡である。
- (2) 縄文時代中期中葉に於ける、この遺跡の性格としては、調査区およびその周辺部にはあまり遺物の散布がみられない事、実際の調査でも、遺構や遺物がわずかしか発見されなかった事などから、当初予想した様に、近隣地域の大集落跡に付随した人間生活の場であったと推測される。その場合、最も近い同時期の大集落跡としては、大館町遺跡が予想される。
- (3) 縄文時代の埋甕遺構の性格については、今のところ不明であるが、他の遺跡の調査例から、墓^{注07}塚ないし祭祀遺構の可能性が予想される。なお、同時期の類似遺構は、県内では和賀町梅ノ木B遺跡^{注08}Ⅶ区や紫波町西田遺跡でも発見されている。
- (4) 時期不詳のピットのうち、JD033ピットの時期は、埋土の状況からみて、少なくとも近現代に属するものではないと推測される。その性格については、他の遺跡の出土例から類推して、一応、陥し穴状の施設が想定される。^{注09}
- (5) 近現代に属するピットとしては、JD031ピットがあるが、それに接するJD032ピットも、その埋土の色調やしまりなどから、それとかなり近い時期の遺構と推定される。

これらのピットの性格はいずれも不明である。ただ、ここが現在、畑地として利用されている事、そして戦前には野原で、現在の青山町にあった工兵隊駐屯地のゴミがしばしば捨てられたという事などから、根菜類の貯蔵穴とかゴミ捨て穴などの施設跡が推定される。

- (6) なお、余談であるが、長畑遺跡の南西部の東北本線を挟んで約0.2km離れた地点付近には、国鉄の宿舎がある。この宿舎の建設工事の際、縄文土器が多数発見されたといわれている。この事から考えると、今回の調査区域付近には、まだ未発見の縄文時代の遺構の存在している可能性が大きい。

注 記

- (1) 以上の各遺跡に関しては、下記の文献による。
 岩手県教育委員会 「埋蔵文化財分布地図」 1974
 同 上 ほか 「昭和51年度 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」 1977
- (2) 岩手県教育委員会ほか 「昭和51年度 東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査略報」 1977
 同 上 「昭和52年度 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査略報」 1978
- (3) 前九年Ⅰ遺跡の調査の際の分布調査で発見されている。
- (4) 岩手県 「岩手県史」第1巻 上古篇・上代篇 1961
 武田良夫・吉田義昭 盛岡市大新遺跡「奥羽史談」54号 奥羽史談会 1970
- (5) 岩手大学考古学研究会 「大館町遺跡」盛岡市教育委員会 1978
- (6) 草間俊一 「盛岡市下厨川小屋塚遺跡調査略報」岩手大学歴史学研究室 1968
- (7) 板橋源 厨川柵擬定地盛岡市権現坂発掘概報「岩手大学学芸学部研究年報」第14巻第1部 岩手大学学芸学部 1959
- (8) 板橋源・佐々木博康 「盛岡市安倍館古代末期城柵遺跡」盛岡市教育委員会 1969
 田中喜多美 中世の武家政治1「盛岡市通史」盛岡市 1970
- (9) (5)と同じ文献による。
- (10) 北上市 「北上市史」第1巻 原始・古代篇 北上市史刊行会
- (11) (10)と同じ文献による。
- (12) 1975年に調査されている。本報告未刊
 岩手県教育委員会 「昭和50年度 東北縦貫自動車道関係遺跡調査現地説明会資料梅木bⅦ区」 1975
 同 上 「昭和50年度 東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査略報一和賀地区一」 1976
- (13) 1973年から1975年にかけて、4次に渡る調査が行なわれている。本報告書未刊。
 岩手県教育委員会 「昭和50年度 東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査略報一江釣子地区一」 1976
- (14) 1975年から1977年にかけて、3次に渡る調査が行なわれている。本報告書未刊。
 岩手県教育委員会ほか 「昭和52年度 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」 1977
- (15) この遺跡は、いくつかの地区にまたがる広大な遺跡で、1957年以降、数次に渡る調査が行なわれており、最近では、1973年から78年にかけて、御所ダムに関連した調査が行なわれている。
 草間俊一・吉田義昭 「岩手県盛岡市繫遺跡」盛岡市公民館 1960
 同 上 岩手県盛岡市繫遺跡一「奥羽史談」第28号 奥羽史談会 1960
 同 上 同 二「同 上」第30号 同 上 1960
 同 上 同 三「同 上」第31号 同 上 1961

- (16) 佐藤洋 縄文時代の埋甕習俗「物質文化」第27号 物質文化研究会 1976
- (17) 以上の遺跡のほかにも、県内では、盛岡市柿ノ木平・繫^①・北上市樺山^②などで、縄文時代中期に属する、同様の埋甕遺構の発見例が報告されている。特に、柿ノ木平や繫の例では、倒立して埋められた土器の底部に孔が1コ穿けられており、樺山でもその様な例がみられる。

梅ノ木B遺跡の調査例によると、埋甕に使用される土器は器高が50cmを越すような、やや大型の深鉢型土器で、いわゆるキャリパー型のものが多い。土器を収めるピットは、口径が土器の最大径よりやや大きい程度の円筒形ピットで、地山面から深く掘り込まれている。そして、ピット内に倒立状態で収められた土器のまわりには、地山の土が固くつめ込まれている。そのため、倒立した土器が、一見、地山層そのものの中に埋没し、わずかに胴下半部をのぞかせるかっこうになっている。——以上は、島隆氏の教示による。

なお、これ以外にも、時期は異なるが、東北縦貫自動車道に関連して調査された滝沢村卯遠坂^③や紫波町大明神^④の2遺跡でも、縄文時代の埋甕遺構が発見されている。

- ① 遠藤輝夫 第四地点「北上市稲瀬町樺山遺跡緊急調査中間報告」北上市教育委員会 1968
- ② 吉田義昭 甕棺と思われる縄文文化中期の土器群「石器時代」第3号 石器時代文化研究会 1956
- ③ 岩手県教育委員会ほか 「卯遠坂遺跡現地説明会資料」 1977
- ④ 同 上 「昭和50年度 東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査略報—紫波地区一」 1976
- (18) 岩手県教育委員会ほか 「西田遺跡第3次調査現地説明会資料」 1977
- 同 上 「昭和52年度 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」 1978
- (19) この種の遺構は主として縄文時代の遺跡に伴なって、発見されている。現在のところ、その分布は関東以北～北海道中央部以南に限られている様である。多くの場合、伴出遺物がないので時期不詳であるが、その初現は現在のところ、縄文時代早期に求められている。その下限についてもあまりはっきりしないが、縄文時代中期末～後期頃まではほぼ確実に存在している模様である。
- 霧ヶ丘遺跡調査団 「霧ヶ丘」武蔵野美術大学考古学研究会 1976
- 今村啓爾 縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較「物質文化」第27号 物質文化研究会 1977
- 渡辺俊一 厚真I遺跡のTピットについて「郷土の研究」第4号 1978

〈追記〉 なお、本調査終了後、埋甕遺構の発見された場所のすぐ東側に新幹線工事のための起重機付帯施設が作られる事になった。その基礎工事予定区域、約225m²の補足調査を51年12月6日に実施したが、遺構・遺物は全く検出されなかった。

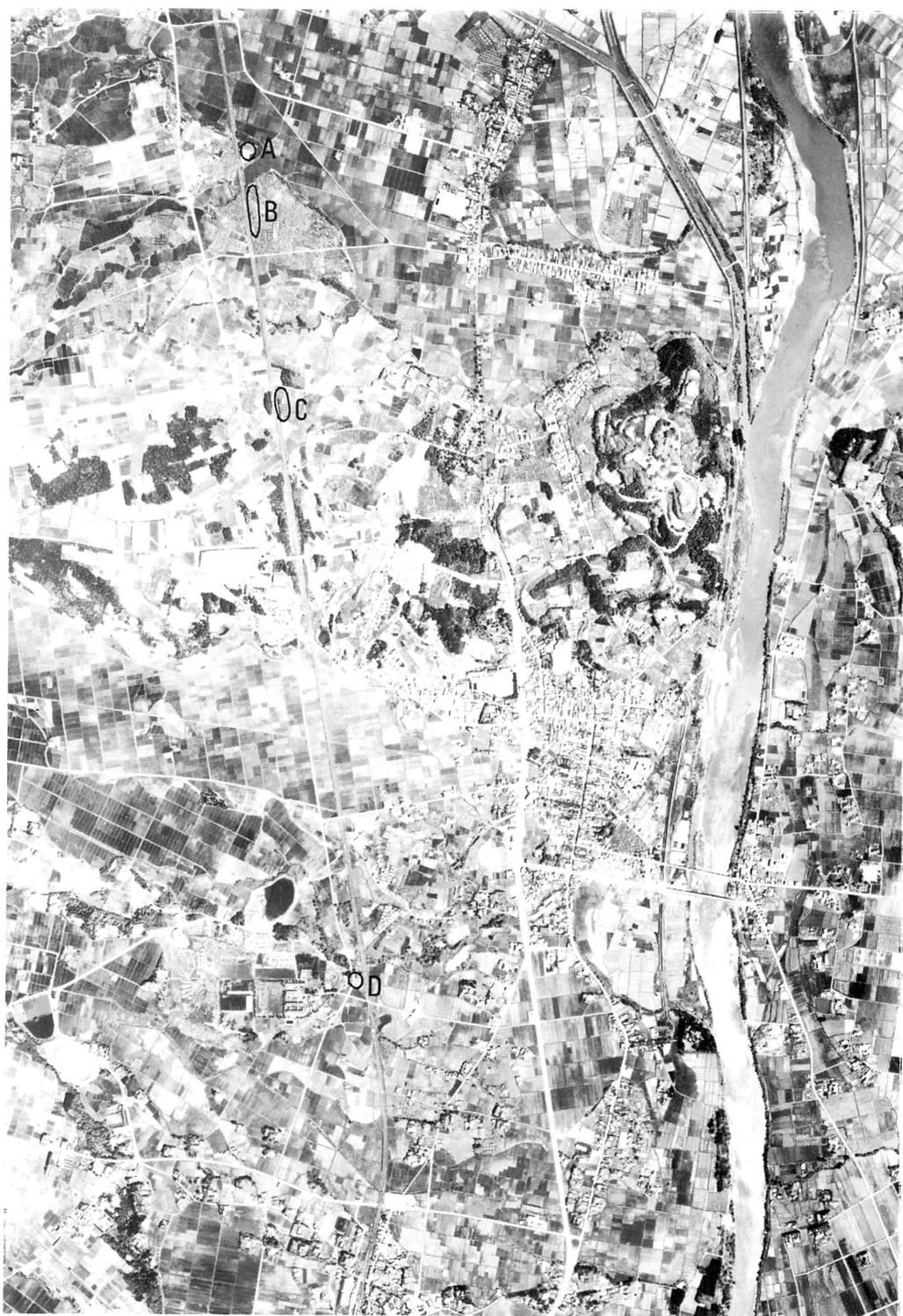
図

版



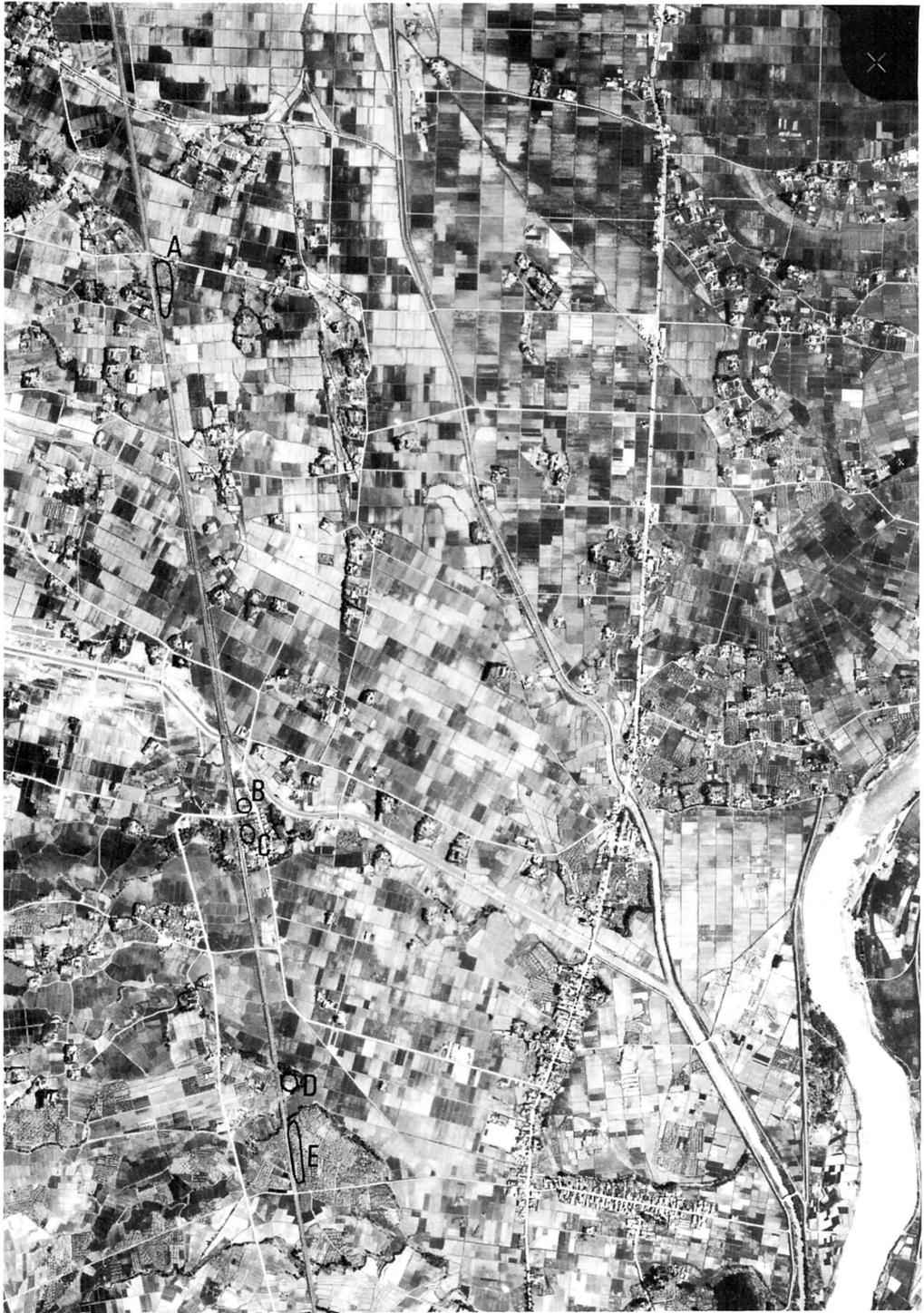
A 大日堂遺跡 B 大銀遺跡 C 西田遺跡 D 野上遺跡

図版 I



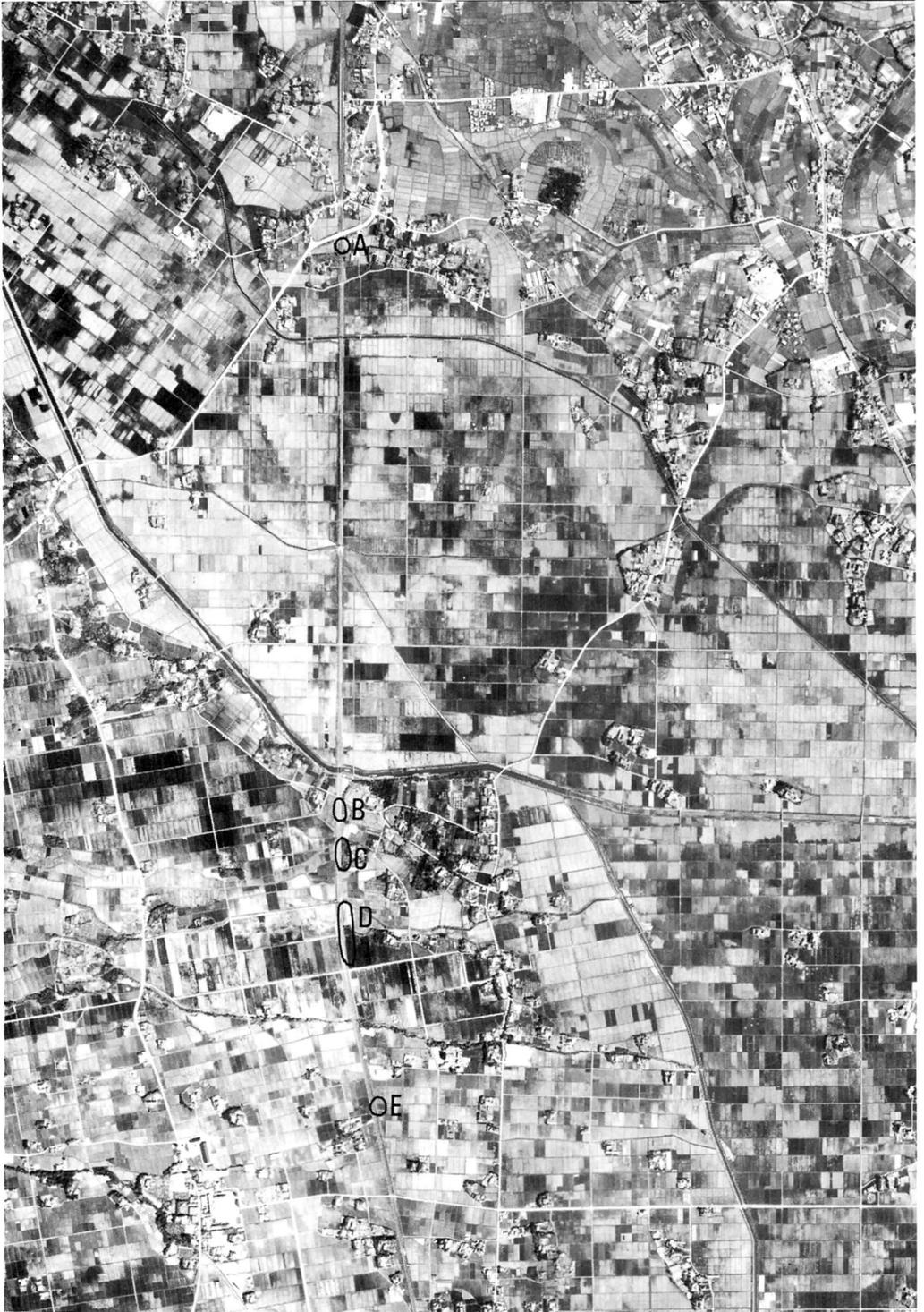
A 杉ノ上 I 遺跡 B 杉ノ上 II 遺跡 C 杉ノ上 III 遺跡 D 田頭遺跡

図版 2



A 白沢遺跡 B 古館橋遺跡 C 古館駅前遺跡 D 杉ノ上 I 遺跡 C 杉ノ上 II 遺跡

図版 3



A 下永井遺跡 B 下赤林III遺跡 C 下赤林II遺跡 D 下赤林I遺跡 E 高畑遺跡

図版 4



A 長畑遺跡 B 前九年II遺跡 C 前九年I遺跡 D 厨川柵擬定地

図版 5

野上遺跡

1：遺跡全景
(南東より)



2：遺跡近景
(北東より)



3：発掘作業風景

